

指示庭前那一株、九年面壁 碧瞳胡、若し趙老の雙華甲を論せば、太古の 莊椿半途に在り。

玉英 宗哲

晚成の大器天球を琢す、千萬人中獨り尤を抜く、色自ら粹温何の似たる所ぞ、黄花愛し看る晋の風流。

喜雲 宗慶尼

曾て十地を經たり眞の菩薩、終始 無心岫を出で來る、持して以て君に贈る怡悦すや否や、風一朶を吹いて天邊に落つ。

菊溪 宗芳

金莖一滴 壽無疆、離落水邊猶ほ霜に傲る、四海香風吹けども起たす、花に逢ふて問取す幾 重陽。

月岑 宗珠

指し來る不是話し來る非、鷲嶺曹溪共に機を顯す、今夜天外に出頭して看よ、山河大地光輝を發す。

器伯

玉に似たるを珪と名く磨すれども磷かす、六瑚八簋其の人を得たり、神を祭ること 在ますが如し

①碧瞳胡。達磨なり、面貌によりて之れをいふのみ。
②莊子逍遙遊篇に「上古大椿といふ者あり、八千歳を以て春となす、八千歳を以て秋となす」と。
③無心云々。潤明歸去來の辭に「雲無心にして岫を出づ」と、雲字を打するなり。
④重陽。九九の節句なり。
⑤宗廟に用ふる黍稷を盛る祭祀の器なり、簋は一斗二升を入るべしと。

廟堂の上、北野の梅花南澗の蘋。(澗を一に澗に作る。)

柏翁 宗郝

庭前雪に立つ歳寒の姿、古佛趙州酬い得て奇なり、天地同根同甲子、蒼髯の叟も亦萬年の枝。

春庵 正意上座

屋を環る皆山醉翁と稱す、蒲團紙帳春風に坐す、袈裟撩亂たり三杯の酒、興は簷花細雨の中に在り。

西伯 壽兌

竺土の大仙傳ふるに心を以てす、龜毛の葉を抽んで、翠森森たり、端無く轉じて東來意と作す、吾が祖の 甘棠一樹の陰。

檀溪 宗香首座

摩利山中雜樹無し、枝枝葉葉香風を起す、海外に流傳す眞の消息、此れより曹源一滴通す。

桃谷 周仁尼首座

洞中の春色人間に異なる、路は 武陵溪上より還る、秦皇の爲に塵垢を洗はず、飛花水を逐ふて日に潺湲。

覺林 妙等尼

①甘棠。召公奭の芟りし所、後人其の徳を頌して甘棠勿剪の詩を作る。
②武陵。昔武陵の人、魚を捕るに溪に縁つて行き路の遠近を忘る、忽ち桃花林に逢ふ、漁人之れを異とす、深く入れば小口あり、開けて土地平廣、良田美地あり、村人來り、皆問ふ、自ら云ふ、先世秦の亂を避けて此所に來ると。

佛の一字人口を汚す、只麼に嗽ぎ來る蘆荀の風。公案現成猶ほ未だ了せず、二株の娘桂綠叢。

鈍翁 宗銳

文武爐中百鍊し來る、看よ他の鐵漢鑄成す時、太阿の寶劍未だ利しと爲さず、龐老の機關猶ほ是れ癡。

稻屋 祖收

鐵牛耕破す一心田、秋水門に連る八九椽、招拾の法華穗を遺し去る、民村戸戸豊年を樂む。

香室 嚴

五葉芳を聯ねて春滿堂、龜を證して鼈と作す一燈光、麩麩として花落つ半巖の雨、撼動す毘耶の三萬牀。

澄江 清

今千年黄河を待たず、涇渭流を異にす看よ若何、元暉が那一句を鑿括して、風素練を翻して清波を湧す。

蘭庭 秀

十蕙多しと雖も一花に輪く、幽芳砌を繞る小籬、風流千古豈に種無

からん、子葉孫枝謝家に滿つ。

玉淵 琳

衣裡の寶珠大千に輝く、波に入つて驚起す臥龍の眠、好し龐老が西江水に和して、吸盡し來つて看る明月の泉。

大用 宗碩

劫外の靈機忽ち現前、威風凜凜として坤乾を動す、言ふ莫れ佛法多子無しと、裴休を賺過す黃檗の禪。

希道 宗弘

羊を亡ふ賊穀多端有り、首鼠瞿聃兩端無し、識らす人々の脚跟下、一條の活路長安に透ることを。

松屋 名は紹長、遠州の人

根を深うし蔕を固うして萬年榮ゆ、一木支へ來つて大厦成る、只だ寒山のみ有りて此子に較れり、近く聽けば愈好し遠江の聲。

芳心 宗妙

一字元來佛宣べず、龍兒八歲華鮮と稱す、月宮豈に三星の繞るを待た

①太阿。楚王、風胡子を召して吳越にゆき、歐冶子千將に見えしめ、之れに鐵劍三枚を作らしむ、一を龍泉、二を太阿、三を上市といふ、共に名劍なり。

②招拾。ひろひとるなり。

③維摩居士の疾を問ふ菩薩の數の多きも、之れを撼動せしむる概ありとなり。

④千年云々。黄河は水常に濁り、千歳に一度清むと傳ふ、之れを待つは殆んど望みなきの謂なり、周詩に、「黄河の清むを俟つも、人壽幾何ぞ」と。

⑤涇渭。涇水は濁り渭水は清む、合流三百里、清濁混ぜずと。

⑥芭。竹の一種、又は竹垣なり。

⑦裴休。黃檗禪師に參じて得法す、字は公美、河東聞喜の人なり。圭峰、宗密と法に於て昆仲、義に於ては交友、思に於ては善知識、教に於ては内外護たりといふ。

⑧亡羊。莊子に賊と穀の二人、相與に羊を牧して俱に其の羊を亡ふ、賊に奚事をせしかと問へば、則ち曰く、篋を挟みて書を讀めりと、穀に奚事をせしかと問へば、則ち博塞して以て遊べりと、二人の者その事業同じからざるも其の亡羊に於て等しと。

⑨首鼠兩端。鼠の性疑多きを以て穴を出で、觀望し、一前一却進退決せず、故に兩端を持つるものに喩ふ。

⑩龍兒。法華提婆品に出づ、婆竭羅龍王の女、年甫めて八歳、智慧人にすぐれ、文殊菩薩の

ん、維れ徳維れ馨し當體の蓮。

古峯 名は勝雲

高うして塵劫より躋攀を絶す、塊視す須彌百億の山、是れ今時の那一色にあらず、秋天舊に依る碧潺顔。

龜溪 慧兆藏主

空谷を出で、也た禪河に入る、正眼流通す迦葉波、^①雞足山中六を藏して後、一枝の佛法多きを須ひす。(波を一に婆に作る。)

明室 珍

玉兔金鳥照臨せず、靈光古に輝き又今に騰る、門より入る者は他物に非ず、僧寶元來滄海の^②琛。

鳳嶺 榮儀首座、軒を安巢と扁す

岐山鳥有り同曹を絶す、處を得巢を安んじて羽毛を嘲ふ、是れ丹楓碧梧の上にあらず、孤嵐百尺一峯高し。

一麟 瑞祥

衆角多しと雖も獨り群を出づ、^③四靈瑞を呈して氣雲の如し、^④漢王の殿閣遺像を留む、^⑤魯叟の

春秋闕文を修す。

聞庵 興健首座

香嚴竹を撃つて拳を豎つる機、鐵壁重重路の窺ふ無し、^⑥補陀巖畔の月に和却して、偃溪の流水門に入り來る。

雲如 宗慧

風に隨つて到る處帶無しと雖も、石に觸れて生ずる時根有るに似たり、^⑦臨濟の大龍纒かに奮迅す、忽ち法霈と爲つて乾坤に洒ぐ。

玉岫 珍

形山に秘在す無價の珍、金に非ず石に非ず、^⑧緇磷を絶す、東峯西嶺雲の間なる處、托出す天邊の月一輪。

覺林

草木山河淨法身、頭頭物物全身を現す、心花開發する底の時節、冷笑す華嚴會上の春。

瑞嶽

試みに龜哥に問へば吉兆多し、頽波砥柱禪河に立す、千年の鳥跋何の色をか現す、其の面花の如し

化導に依り、諸法實相の理を悟り、釋迦佛の前に來りて、變じて男子となり、直ちに南方無垢世界に成佛すとあり。^① 鷄足山。狼足山、又は鷄足山ともいふ。印度摩伽陀國伽耶の東南七哩にあり、迦葉入寂の地、六は頭尾四肢にて、藏は體を埋めること。^② 琛。寶なり。

^③ 岐山。支那鳳翔府岐山縣にあり、后稷の十三世の孫、古公亶父始めて此に居る。

^④ 四靈。麟鳳龜龍の四なり。^⑤ 漢王の殿閣。麒麟閣に功臣の像を畫き留めしを云ふ。

^⑥ 魯叟。孔子を指す、春秋の襄麟に筆を止むるを云ふ。

^⑦ 補陀。補陀樂山なり、觀世音菩薩の居所、南海中にあり。

^⑧ 法霈。法雨に同じ、霈然として來る、故にしかいふ。

^⑨ 形山。雲門一賣の公案に委しく見ゆ、又楚人下和、璞を得たる所、後此の玉秦王十五城に代ふ、即ち趙氏連城璧の由來、天下傳ふとある是なり。

^⑩ 緇磷。緇は黒色をいふ、磷は光る石なり、緇磷を絶すは、玉石を絶する程の意なり。

^⑪ 華嚴會。華嚴經を讀誦して、國家の安康阜祥長久を祝禱する法會。

娑竭羅。

希溪 善灌尼

少林の 尼總持を慕はず、庶幾す當日の老閑師、端無く衆流を截斷し去つて、劈箭猶ほ遅し閃電の機。

繼芳 性胤

甘蔗華を拈じて春手を授け、黃梅月に和して曉に衣を傳ふ、門門是れより香風起る、露滉して路紅吹けども飛ばす。

無參 宗參

善財此れより遊方を絶す、初發心正覺の場に登る、西天と東土とに往かず、玄沙元是れ謝三郎。

希雲

石に觸れて根無し岫を出で、飛ぶ、空に浮んで蕪有らず風を逐ふて歸る、線路を放開して他に與へて看せしむ、輕うして道人身上の衣に似たり。

逸峯

五嶽高しと雖も吾れ攀づ可し、飛來一朶雲間より出づ、軒に當つて獨坐する底の時節、塊視す須彌

百億の山。

悅林

破顏微笑の老頭陀、拈華の宗旨多きことを須ひす、給孤園裡好春色、留めて千年の烏鉢羅と作す。

覺翁

高く心空を叫んで江を吸盡す、角巾鬚髮雙雙たり、大疑團破るる底の時節、手を拍して呵呵として老龐を咲ふ。

月巢

丹山風有り僧中に現す、碧梧に接らず秋風を識る、桂花の枝第一を占得して、香を搏つて高く、廣寒宮に入る。

南陽

長成律師、南山の律宗を傳ふ、泉涌門下の碩徳と稱すと云ふ。

道宣の宗を傳へて律藏開く、戈を把つて佛日再び塵いで回す、嶺頭の春色梅に屬して後、四海の薰風此れより來る。

雪庭

宗可

② 尼總持。達磨の法嗣、梁の武帝の女、老閑師は達磨を指すなり。

③ 甘蔗。釋尊の姓の一なり、拈華微笑の因縁をいふ。

④ 玄沙。師備禪師、雪峰義存の法嗣、姓は謝氏、幼より好んで南台江に釣し、漁者に狎る、人よんで謝三郎といふ。

⑤ 給孤園。具には祇樹給孤獨園といふ、中印度舍衛城の南、凡そ一里の處にあり、もと祇陀太子所有の園林なりしが、須達(給孤獨)長者其の地を購ひて釋尊に獻じ、太子また其の林樹を佛に捧ぐ、かくて二人にて寄通したるが故に、是れを祇樹給孤獨園と名づけ給へり。

⑥ 桂花云々。月中桂樹あり、故に月字を拈弄するなり。

⑦ 廣寒宮。又廣寒府ともいふ、龍城錄に、上皇、中法師、道士鴻都客と八月望日の夜、法師の作術に因り、三人同じく月中に遊び、一大官府を見る、榜して廣寒清虛の府といふ。

吾が這裡心の安んず可き無し、黒漫漫地白漫漫、神光縦ひ少林の髓を得るも、梅花徹骨の寒に輪卻す。

安岳 隆泰

一を得て清く分一を得て寧し、嵩呼萬歲兩三聲、而今天下泰山の上、干戈を動せずして太平を致す。

密傳 宗嚴

祖師の心印付し將ち來る、何ぞ南天鐵塔の開くを待たん、眞言成佛の旨を會得して、眼頭高うして黃梅に到らず。

玉岫 宗琳

塵勞を磨し盡して光自ら生ず、人人具足本圓成、形山の一寶價無かるべし、秦王の十五城に換ふこと莫れ。

雲屋 宗澤

鄧林の一木君を得て支ふ、將に謂へり衝樓跨窻の兒と、瑞を爲し祥を爲して天下に雨ふる、須臾に蓋覆す四坤維。

瑞巖 宗祥

瑞雲乍ち起つて乾坤を覆ふ、輕うして天衣の石根を拂ふに似たり、空華を亂墜して我れを試むるを休めよ、銀山鐵壁入るに門無し。(乍を一に忽に作る。)

華仲 淨金

趙州の甲子未だ多しと爲さず、路を問ふ、臺山勸破の婆、鳥、墳箴を奏す百花の裡、木人咲つて唱ふ大平の歌。

以清 維泉

大地元來淨法身、知らず何の處にか織塵を立せん、曇華瑞を現する底の時節、河水千年一度新なり。

寶岳 法珍

衣珠一顆磨さずして圓なり、形山に秘在して幾年をか歴たり、端的雲外に出頭して看よ、夜光明月青天を照す。

大川 宗三

曹源那一滴を激起して、玄玄の處宗猷を立す、銀河倒に煎す須彌の筆、白浪滔天字を學んで流る。

高節 壽筠

また天寶遺事に、唐の明皇、月宮に遊び、天府を見る。榜して廣寒清虛の府といふ、素娥十餘人、皓衣にして白鸞に乗る、桂樹の下に舞ふと。

嵩呼。山呼に同じ、臣民君主の萬歳を呼ぶこと、漢書に、「武帝事華山に用ふ、中嶽に至り、親しく嵩高に登り、御史乘屬廟旁にあり、吏卒みな萬歳を呼ぶ」と。

臺山勸婆。趙州因みに僧、婆子に臺山の道、甚の處に向つてか去ると問ふ、婆云く、勸直去と、僧繞かに行くこと三五歩、婆云く、好箇の師僧、又惣殿に去る、後僧あつて州に舉似す。州曰く、待て我れ去つて爾が與めに道の婆子を勸過せん、明日便ち去つて、亦是の如く問ふ、婆も亦是の如く答ふ、州歸つて衆に謂ひて曰く、臺山の婆子、我れ爾が與めに勸破し了れりと。

多福の一叢歲寒を凌ぐ、霜前雪後平安を報す、衝天の意氣層雲の上、
渭子湘孫千萬竿。

虎林 正隆

藏を典る雲窓夢閣の間、風八極に生じて南山を出づ、爪牙備り羽翫成る
矣、臨濟の兒孫一斑を露す。

補拙 勤

垢面蓬頭 老懶の禪、鳴鳩呼醒す一春眠、願に垂るゝ寒涕拭ふに心無し、
手は熟す山中煨芋の烟。

悦叟 玄怡

天壽域を開いて八荒安んじ、卻つて算ふ 塔堂幾千ぞ、試みに聴け西風
一横笛、新翻唱へ起す萬年の歡。

永年 玄甫

黃竹墟の西 青雀回る、龜臺の金母瑤池に宴す、春風坐了す九千歳、海
上の蟠桃實を結ぶこと遅し。

柏心 梵茂

看よ他の華甲趙州翁、錯つて認む西來の雙碧瞳、龜蛇と其の齒を闘はし
むることを休めよ、三星夜夜 蟾宮を繞る。

聖倫 慧島

彼の眞丹を化す上大人、儒童菩薩是れ前身、仁里に居らす名を得るや否
や、衆角多しと雖も唯だ一麟。

壽岳 宗仙

龜齡鶴算白頭翁、三呼萬歳の嵩きを屑しとせず、遠く看近く聴けば聲愈好し、長松脩竹無窮
を祝す。

月桂 宗光

雲斤玉を削つて氷輪輾る、美譽芳聲載せ得て新なり、廣寒の枝第一を折り取つて、詩を作り遠く寄
せて 佳人に與ふ。

大宗 昌乘藏主、龍淵派

龍淵深き處老龍蟠る、日本支那多少の孫、一口に平吞して還つて吐出す、烏頭の毒氣乾坤に
溢る。

松庵 宗藤藏主

いふ、頃、蟻共に香けん、同
字なり。

曹源。曹溪の源、六祖慧能禪
師の流をいふ。

渭子湘孫云々。節字を拈弄す
るなり。

老懶の禪。懶瓚禪師、寒涕を
拭はざること前に見ゆ。

塔堂。堯の土塔三段、草を生
ず、十五日以前は一葉を増す、
十五日以後は一葉を落す、名
づけて葉葉といふと、これな
り。

青雀。西王母の使なり。西王
母再來を約して遂に來らす
と。漢武故事に七月七日、乾
承殿に齋居す、忽ち青雀あり、
西より來つて殿前に集る、上
東方朔に問ふ、朝日く、是れ
西王母來らんとするなりと、
頃ありて王母至る、去るに至
つて、帝に許すに三年の後、
復た來るを以てす、後、竟に

來らすと、之れを譏案するな
り、蟠桃は王母の漢皇に獻ぜ
し桃、三千年に一實すと。

三星。二十八宿中の心宿の星
なり。

蟾宮は月なり。

衆角。聖字に就いて點出す。

佳人。よき人といふ程の意。

山門の境地人の標榜、棟梁の材を得て宗再び興る、近く聽けば微風聲愈好し、三間の茅屋半間の僧。

橋洲 宗金藏主

千江月に印す光明藏、古佛心を傳へて一箇も無し、塔様機前若し相問はば、南村は梅白く北村は

蘆。(蘆を一に盧に作る。)

誰か 鷲膠を把つて斷絃を理む、九年の弓少林より傳ふ、寒梅甲を破る

六花の陣、箭を看よ威音空劫の前。

維馨 宗葩

東君の春信君が家に到る、是れより群芳次第に加はる、^① 連仙香影の句を傳へ得て、暗中に摸索して梅花を識る。

有節 理忠尼、醫王門下

摠持尼少林の翠に效ふ、九年の皮髓を分ち得て親し、若し宗門の功第一を論せば、^② 峻標清節麒麟に上せん。

壽峯 宗丘

巍然として突出す衆山の中、老彭に比するに依倚として同じからず、鶴算龜齡齒を鬪はしむるを休めよ、常春藤萬年の松に挂る。

傳巖 永霖

義層雲に薄る大丈夫、聖朝雨落ちて物皆濡ふ、今に至るまで天下磐石を安んじ、野に在る遺賢畫圖に入る。

春芳 名は桂、建仁寺の沙彌

花は發く東皇の第一機、^③ 根は蟾窟より遠く移し來る、少年能く 狀元の日を記して、凌霄三月の枝を探り取る。

雪庭 名は瑞、建仁寺の沙彌

普通年後宋の丁卯、^④ 巽二先驅して隙六多し、松柏歲寒うして猶ほ忍ぶべし、梅花太だ瘦す又如何。

鐵牛

二輪圍を鎔して一頭を鑄る、胡僧の心印誰れ有つてか酬いん、機に當つて拗折す黄金の角、少室

山前高く 牟と叫ぶ。

松雲 長

① 鷲膠。一に續絃膠とも云ふ、前に見ゆ、繼字を打するなり。
② 連仙。林逋、字は君復、宋の錢塘の人、和靖先生なり。
③ 蟾窟。龜窟と云ふ、よきけたらき手本などと云ふ意なり。

① 雨落ちて。霖字を打するなり。
② 根云々。桂字を打し來るなり。
③ 狀元。進士の試験に及第して一番となりたるものをいふ、宋史に「三場に狀元たり」と。
④ 巽二。風の神、隙六は雪の神をいふ。
⑤ 拗折。へしなること。
⑥ 牟。牛の鳴く聲。

帯を固うし根を深うす億萬年、春空霞翳として翠天に連る、風に随つて若し夜來の雨と作らば、箇の一枝を留めて杜鵑を啼かしめん。

月峯 宗圓、淨土宗

昨夜秋風廣寒を動す、桂花影映じて數峯残る、雲斤郢人の手を借らず、削り出す青山の玉一團。

清芳 淨土宗

帶水挖泥 遠社の蓮、崑崙の鼻孔半邊穿つ、歸り來つて寥寥地を認むること莫れ、風幽香を送る落日の前。

蘭曉 十字敷殿、名は宗芳

蕙草多しと雖も以て加ふる蔑し、根を林藪に托す楚人の家、從來朝廷の上にあるべきに、香春畦に滿つ只だ一枝。

壽岳 宗延、明石の則兼公

尼丘を以て老彭に比すること莫れ、金華の仙子長生を授く、嵩呼三十六峯の外、四海波平かなり萬歳の聲。

龍雲 堀豊後守、名は宗興

神物蜿蜒として石根より出づ、今に至るまで韓孟約猶ほ存す、一飛風雷の力を借らず、浪桃花を激して禹門に登る。

悦叟 鶴原氏宗怡求む

春門闌に滿ちて喜色多し、老年の花も亦溫和を帯ぶ、君が家自ら長生の訣有り、鶴算龜齡他に譲らず。

大業 宗繼

三千世界眼中に穿つ、百二の山河掌内に收む、若し此の老の功第一を論せば、武門関関箕裘を續ぐ。

大成 宗功、備の甲族、廣澤

家業興る時日に轉た新なり、美なる哉奐や美なる哉輪、離邊の燕雀相賀するを休めよ、三百の周詩碩人を賦す。

義江 光忠 禪門

足を濯ふ機前便宜に落つ、急流勇退運閑黎、丈夫の意氣層雲の上、渡頭の風月を開却し來る。

松翁

①百二山河。史記に、「秦は形勝の國、河山の險を帯び、懸隔萬里、持戟百萬、秦百二を得たり」と、古人倍を云ふて二と、蓋し百倍の意なり、地の利一人以て百に當るべき所をいふ。
②美云々。輪奐の美なるを云ふ、屋宇の高くして華なるをいふ。

③雲斤云々。莊子に「郢人堊にて其の鼻端を埒る、蠅蠶の如し、匠石をして切らしむ、匠石、斤を運らし、風を成し、聽いて之れを斲る、堊を盡して鼻傷らず」とあり。
④遠社の蓮。蓮社十八賢、前に見ゆ。
⑤金華の仙子。黃老即ち老子をいふ。

根に 茯苓有り幾春をか經たる、和扁の術を傳へて自ら神を願ふ、蒼髯豈に敢て秦垢に染まらんや、萬岳千峯一老身。

松屋

蒼髯叟棟梁の姿有り、一木今大厦を支へ來る、十里の風聲聽けば愈好し、儒門の知識戒禪師。

榮仲 泉隆

士林古より英豪を出す、雲 新豊を擁して樹影高し、三尺の吹毛元動か

す、太平の天下卯金刀。

太陽 宗旭、信州知久氏

足を衝る葵花日向つて傾く、君を堯舜に致して丹誠を抱く、鵝湖山下神在すが如し、陰德今に至るまで人名を誦す。

春芳

造化私無し德隣有り、東君の雨露百花勻し、春は梅に於てすると秋菊に於てすると、敢て保す 張良が婦人に似たることを。

芳室 宗葩尼

紅釋迦春雨の過ぐるに隨ふ、紫彌勒曉風の吹くを待つ、天花亂墜す珠簾

の外、獅床三萬を撼動し來る。

喜雲 明怡大姉

十地の初め兮十地の終り、無心軸を出でて又風に隨ふ、君に一朶を贈る須らく怡悦すべし、春色光明兜率宮。

希周 宗鼎

蠡斯の詩一篇を留め得て、文有り郁郁として曾て遷らず、家を齊へ國を治む任似に似たり、能く蒼姬を保つ八百年。

花屋 周林信女

輪奐美なる哉桃李の中、珠簾甲帳春風に坐す、家家富を争ふ盟壘老、多卻す一枝微笑の紅。

繼芳 祖胤大姉

鷺嶺の一枝別春を傳ふ、燈花燭を續いで瑞光新なり、二三四七相承の後、更に芳を尋ね臭を逐ふ人有り。

梅隱 祐芳信女

一枝の春色人間を謝す、贏ち得たり水邊林下の間、試みに看よ娘生眞の面目、月花影を移す小

①茯苓。寓生の植物、黒松の舊根株の邊の土中に自生し、塊を成すこと拳の如く、肉に紅白の別あり、藥用とす。淮南子に「千年の松下に茯苓あり」と。

②和扁。扁鵲等の醫術をいふ。

③新豊。白氏文集、新豊折臂翁、邊功を戒むる時に「幾くも無くして天寶大いに兵を徵す、戸に三丁あれば一丁を點す、點じ得て驅け將めて何處か去る、五月萬里雲南行、開道らく雲南盧水あり、椒花落つる時瘴烟起る、大軍徒涉水湯の如し、未だ過ぎず十人二三は死す」と、即ち却つて新豊の雲氣、靜かなるをいひしものなり。

④張良。狀貌婦人の如しと、而して其計を帷幄の内に運らし、勝を千里に收むと、此の春芳、又婦人に類するや。

⑤蠡斯の詩。蠡斯は蚊の屬、一同に九十九子を生む、詩の周南に、「蠡斯の羽詠々なり、宜なり爾の子孫振々たる」とあり、良く夫婦和合して子孫の多きをいふ。

孤山。

桂室 宗昌信女

根は是れ西天の胡種族、少林門下二株抽んづ、香を輪す白を遜る梅と月と、清きことは 姮娥宮裡の秋に似たり。

見室 妙心信女

佛眼も窺ひ難し一丈方、機を藏して密密露堂堂、桃花亂れ落つ 曼陀の雨、毘耶三萬の牀を撼動す。

月岫 慈園信女

宮裡の姮娥獨り欄に倚る、春花の影を移して人に與へて看せしむ、千山萬嶽雲收つて後、中峯を光照す玉一團。

慧雲 宗智信女

頓に十地を超ゆ未だ奇と爲さず、佛日の禪に參す無著尼、徑山三月の桂を攀折して、拈じて黒漆の竹篋と成し來る。

渭川 宗清信女

脩竹林深し千畝の秋、清流何ぞ敢て涇に混じて流れん、釣竿風穩かなり禁池の影、魚龍顔を畏れて

鉤に上らず。

天外 超

別傳向上の禪、坐斷す盡乾坤、天外に出頭して看よ、毘盧脚下の邊。

花溪

微笑の尊者、廣長の能仁、水有れば月を含む、誰が家か春ならざる。

燈溪

四七燭を續ぎ、二三流を同じうす、龜を證して鼈と作す、須彌の點頭。

玉岫 梵圭

溫潤縝密、山色連城、藍田日暖かに、崑崗烟生す。

潤屋 宗璣信女(信女を一に信男に作る。)

恩光雨露新に、晚節其の身を保つ、無盡藏開くや、楊州家裡の珍。

睡足 相國寺雲澤の仁恕の請

胸中の物八九の雲夢、眼底の書三萬の祿渠、雨過ぎて海棠春院靜かなり、清風一枕 黒甜の餘。

話月齋

國譯四滿本光國師見桃錄 卷之二

① 姮娥。月の異名。
② 曼陀羅華。蓮意華、天妙華、白花と譯す、花の名なり。光潔にして異香あり、見る者の意を喜ばしむと、桃花の雨に比する。
③ 徑山。大慧宗杲禪師の住山、無看は前に就いて法を受く、觀磨、總持等尼僧の傑出したるものとして稱せらる。

④ 毘盧。毘盧遮那佛の略、光明遍照と譯す、佛の身光、智光が遍く理事無礙の法界を照して、圓明なるの義なり、宗教にては大日如來と稱するは、即ち是れなり。
⑤ 點頭。うなづいて頭を動すを云ふ。
⑥ 溫、潤、縝、密は玉の四徳といひ、君子の徳に喩ふ。
⑦ 藍田。搜神記に「玉を藍田に種及て美婦を得たり」と。
⑧ 崑崗。千字文に「玉は崑崗より出づ」と。
⑨ 胸中八九の雲夢。胸中の極めて大なるを形容して云ふ、前漢書司馬相如傳に「雲夢の如き者八九を吞む、曾て蕪芥せ

暮山の雲を拾ふて束ねて薪と作す、茶を煮て榻に對す主と賓と、曹溪は月を語り士峯は雪、一語應に俗塵に落つる無かるべし。

萬休齋

白鷗我れに似て未だ吾れを忘れず、迷悟聖凡二途無し、瓦解氷消甚の時節ぞ、心閒なれば朝市も亦江湖。

半梅齋

梅は色を分つに因つて三白を遜る、雪は香あらざるが爲に一籌を輸く、劉項元來天下半なり、枝南枝北鴻溝を割く。

大笑齋

五峯の請

籬邊の斥鴳鵬程を小なりとす、口を開いて呵呵天地驚く、此に到つて寒山手を拱して立つ、柴門月色大江横ふ。

松鷗齋

江心

多とす汝が書齋實に名に合へり、青松社裡白鷗と盟ふ、近く聽けば愈好し遠く聽けば好し、十里の清風撲鹿の聲。

愈好齋

す」と、雲夢は前に見ゆ、楚の七澤の一なり。

①黒甜。支那南方の俗語にて午睡をいふ。

②朝市。繁華雜沓の巷、江湖は人聲を離れし閑寂の處をいふ、即ち坐禪せば、四條五條の橋の上のゆき、の人を、深山水に見ての心なり。

③劉項。劉邦、及び項羽を云ふ、史記に、項王乃ち漢と約し、天下を中分し、鴻溝以西を割き漢となし、鴻溝而東の者を楚となす」と。

齋主老蒼顔、松を栽ゑて境の閒なるを愛す、微風聽き得て好し、天地一寒山。

道 號 頌 下

希雲號

定光精舍は尾の古刹なり、迺ち大覺門下の一派なり。其の徒宗端藏局、予が室を扣いて、朝參暮究、孜孜として倦まず、志勤めたり矣。一日來つて告げて云く、「某諱は端、請ふ和尚之れに字せよ、以て華袞と爲さん」と。仍つて命するに希雲を以てす焉。蓋し古顔を希ふものは顔が徒なり、今日白雲を希ふものは白雲が孫なり、予が取る所茲に在るのみ。一偈を厥の上に係けて、遠大を祝すと云ふ。顔に非ず驥に非ず是れ龍に非ず、棒雨喝雷風も亦從ふ、金圈栗蓬鐵酸餡、甘棠故笏先宗を慕ふ。

明屋號

神高山龍寶禪寺は、和の望刹なり、其の主宗朝典藏、吾が門に入つて錫を挂くること年有り、晨參暮請意怠らず、其の志嘉尙す可し。一

日側に侍する次で、席を前めて云く、「某諱有りて字無し、請ふ和尚之れを圖れ。」仍つて明屋を以て之れを稱す、并せて村偈一章を賦して、以て遠大を祝すと云ふ。

心月孤圓大法輪、揚州是れ自家の珍に非ず、此の中花竹和氣有り、風光を占斷して主人と作る。

南華號

河陽の一縣に維僧有り、諱を榮と曰ふ、族は逆卷氏なり。韶亂の歳より、宜春法兄の室に投じて、師資の禮を執る焉。染衣の後幾ならずして、而して盛和墳寺の席を主る。繩墨を忽にせず、緇禮肅如たり。一日華姪の好を通じて、予に就いて字を徵す、南華を以て之れに命す。予不敏なりと雖も、且つ之れを説かん。夫れ南方は離の卦なり、離の言は麗なり、日月は天に麗き、草木は地に麗く、其の徳文明にして、而して華蟲の文有るが如きなり。華也草木欣欣として榮に向はんとす、春秋腓、咸く是れ南訛長養の功なり。蓋し南華眞經は、莊座主荒唐の説なり。① 遽然として蝶と化し、② 惘然として南華に入る。然れども而も梅に近づかず、大椿八千の春秋に誇ると雖も、朝菌一日の榮を奈ともせず、予が取らざる所なり。因つて記す曹溪の能大師、

① 道號。所得の道を表す語なり、又表徳の號とも云ふ、佛道に歸入すれば、受業師、本師等法諱を授く、爾後參禪修道の結果を見て、知識、名匠、特に其の號を送る、故に道號といふ。
② 大覺門下。日本禪二十四流の一、建長寺開山の覺禪師蘭溪道隆和尚を以て派祖となす。
③ 顔を希ふ。孔子十哲の一、亞聖顔淵同なり、此の人たるんことを望むものは、即ち顔の徒なりとなり。
④ 鐵酸餡。酸餡は餡餡ならん、

饜にて作りたる饜頭にて、衲僧の嘴を下し能はざる意に用ふ。
⑤ 揚州。支那の地名、古より繁華の地として名高し、唐詩にも「烟火三月揚州に下る」とある、之れなり。
⑥ 韶亂。齒の代りて新しくなる時分にて、小兒七八歳の頃をいふ。
⑦ 離は八卦の中位南方に當る。
⑧ 南華眞經は莊子の別名、即ち莊子の述なり。
⑨ 遽然は、自得の貌。
⑩ 惘然は喜び意に適ふ貌。

唐の龍朔中に黃梅の衣を傳へて、而して法幢を南華の地に建つ。斯の時宗に南北有り、曰く、南能、曰く、北秀。彼も一時なり、此れも一時なり、王侯の仰慕する所なり。宗門の榮、焉れより大なるは莫し。加之、吾が臨濟大師も亦南華の人なり。① 槃嶠の棒下に於て、骨髄に痒徹するものは、臨濟一人のみ。故に槃、囑して曰く、「吾が宗汝に到つて大いに興らん」と。是れに録つて之れを観るに、或は八十生の知識、或は百世の師なり。槃也、二師の華胄たり、南華と稱す亦宜ならずや。他日梅嶺の春を河内に回し、臨濟の涼を天下に布かんこと必せり矣。祝祝。偈に曰く、

一庵

一僧有り、諱を虔と曰ふ、肥の前州より來る、迺ち永明門下の徒なり。昔因を忘れず、一日予が室を叩いて字を徴す。來意の感する所、之れに字して一庵と曰ふ、蓋し來由有るなり。昔馬師、虔上に住庵す、鬼神の爲に夜垣を築く、果して八十四人を江西の派下に出す、亦護法の力にあらす乎。虔や他時異日、金鷄一粒を銜んで、十方の僧に供養せんもの、公に非ずして誰ぞや。之れを勉めよ、書して以て遠大を祝す。其の偈に曰く、

① 槃嶠。黃檗、德山の兩師をいふ。
② 妙芬陀。曼陀羅華をいふ、白蓮華のこと。

九州四海獨り翁と稱す、山鬼窺ひ難し密室の中、道ふ莫れ夜垣我れを助くるに非ずと、^① 江西此れより宗風を振はん。

汝雲號

神應主盟、祖泰藏主は、迺ち龍淵の龍孫、白雲の雲仍なり。姓は新見氏、備の甲族なり。一日予が室を叩いて字を徴す焉。予告げて曰く、「白雲は汝が祖なり、泰は汝が諱なり、汝雲を以て稱と爲す可ならん乎。」大凡そ雲の言は運なり、山川の氣石に觸れて起る、之れを雲と謂ふ。舒ぶるときは則ち彌綸して四海を覆ひ、巻くときは則ち消液して無形に入る。卷舒自在、變化得て測る可からざるなり。按ずるに公羊傳に曰く、「朝を崇へずして而して徧く天下に雨ふるものは、泰山の雲なり。」予が取る所茲に在り焉。若し敎家に據つて之れを論せば、吾が佛、四種の雲を説いて四比丘に喩ふ。一に曰く、雷して雨ふらず、言ふところは其の十二部經を誦して、而も人の爲に説かざるなり。二に曰く、雨ふりて雷せず、言ふところは其の顏貌端正、好んで善友と相隨ふなり。三に曰く、雨ふらず雷せず、言ふところは意儀を具せず、諸善を修せざるなり。四に曰く、亦雨ふり亦雷す、言ふところは其の學問修習、自を覺し他を覺するなり。是れに録つて三草二木恩に沾ひ、四生九類徳を感す焉。四種の中、亦雨ふり亦雷するは、是れ龍淵の雲耶。雨

① 江西云々。江西馬祖禪師に比するなり。
② 彌綸。廣がること。
③ 崇。終ふるなり。朝を終へずしてに同じ。

ふり雷せず、是れ泰山の雲耶。抑亦菩薩の十地を法雲と名くるなり。始覺の智、本覺の理に歸入して、而して始本不二なり。是れ乃ち汝が不二門なり。智行運動するときは則ち大智雲を起し、大法雨を澍ぐ。是れ甘露門にあらず乎。佛は人なり、閻梨則ち雲水、不二則ち甘露門なり。德澤をしも云はん乎哉、法霈をしも云はん乎哉、他日朝を崇へずして天下に雨ふるものは、汝雲に非ずして而して誰ぞ哉。旃れを勉めよ。偈を作りて以て遠大を祝すと云ふ。

直に龍淵より起つて、四坤を覆ふ、盡扶桑國是れ仍孫、忽ち霖雨と爲りて、枯槁を蘇す、不二廣く開く甘露門。

雲華號

巢林庵頭の祥公藏局、俗は藤氏なり、洞家の名宿、之れに字して雲華と云ふ。系くるに一偈を以てす。然れども世の騷亂に罹りて、而して飛鳥を亡じ、驚蛇を失す、以て遺憾と爲す。頃ろ楮皮を老拙に寄せて、書して以て其の請を塞ぐと云ふ。

磐石根を託して膚寸新なり、天瑞氣を呈し地春を回す、春空一朵眞の鳥鉢、持し來つて道人に贈るに堪へず。

梅江號

對陽の宗信藏主は西源翁の小子なり、余が側に侍すること殆んど一兩霜矣。然れども堂に昇りて未だ室に入らず。一日舊様に歸らんことを告ぐ、蓋し慈明母を省するの謂乎。之れに饒して梅江の二字を摘み、以て道稱と爲す。夫れ梅の梅たる、春を穢易の畫先に占む、白にして而も白ならず、紅にして而も紅ならず、宗を龍朔年後に分つ。頓にして頓ならず、漸にして漸ならず、謂つべし百花の魁なりと、嗚呼、實を道ひて花を道はず、說命の闕文乎、實を道はず花を道はず、楚辭の遺恨のみ。牡丹は實無し、荔支は花に非ず、豈に同日の語ならん乎。抑又江の江たる、江西に濫觴し、湖南に瀾漫たり。月の水に在る、猶ほ春の花に在るが如し。花に清香あり、水に令姿あり、之れを掬すれば月、之れを弄すれば花、春湖の白鷗、自然に宜しい哉。他時異日、西來意を漏泄し、雪月花を流傳せんもの、是れ梅江にあざらん乎哉、仍つて小偈を作つて以て祝すと云ふ。

西天の四七水器に傳ふ、東土の二三花衣に滿つ、畢竟花に非ず又水に非ず、暗香疎影、野蕒微。永正六冬節後一日。

①甘露門。具には甘露の法門、佛の教法を稱する語。施食法の奉請、發願門、諸陀羅尼を總稱する式文の名。施餼鬼を營むこと、又神足、善知識の意。

②四坤。四海に同じ。

③枯槁。やせおとろふること。楚辭に「形容枯槁せり。」槁は木の立ちがれなり。

④楮皮。紙なり、楮皮を以て作る故にいふ。

⑤伽陀。偈頌をいふ。

①舊梓。故郷をいふ。

②穢易云々。伏穢の易を畫する以前、即ち梅の萬花のいまだ開かざるに獨り混沌を破りて魁くるをいふなり。

③野蕒。三柳軒雜識に「野蕒は野客なり。又香譜に「大食國蕒花の露、五代の時、潘使十五瓶を以て獻す。」

古 礪號

昔僧有、大龍に問ふ、「如何が是れ堅固法身。」龍云く、「山花開いて錦に似たり、礪水湛へて藍の如し。」茲に一僧あり、諱を良堅と曰ふ、紙を寄せて號を求む、之れを雅稱して古礪と曰ふ、余が字する所、其の大龍の舊話端に在る耳。堅禪堅禪、二六時提撕して看よ、古礪寒泉竹物に非ず、若し是れ 瞪目せば、争か底を見ることを得ん。偶に云く、主人門外の舊山河、風定つて 湛然自ら波たゝす、空劫以前今日の事、落花流水早く蹉過す。

文仲號

竹隱軒主虎藏局、道稱を求む、之れを稱して文仲と曰ふ、仍つて貫華一章を唱へて、以て其の義を稱すと云ふ。大器成る時道を載せて行く、管窺錯つて認む老書生、一朝跳出す 南山の裡、凜凜たる威風 八紘を動す。

龍光號

攝の下郡に古禪利有り、醫王と曰ふ、適ち天龍門下の末派なり。周珍首座其の席を主る。幼より

- ①礪は水のある谷、礪に同じ。
- ②提撕。二字共にひつさぐる意、師家が學人を提携誘引して、正眼を開かしむること。
- ③瞪目、目を張りて見開くこと。
- ④湛然。水の清みたるへたる貌。
- ⑤管窺。くだの穴からのぞくことなり。小見をいふ。
- ⑥南山。支那の南山、周の都せし豊鎬の南にあり、詩に「南山の壽の如く、賽けず崩れず」とある之れなり、又李白の詩に「弓は摧く南山の虎」と、然れども茲は必ずしも定まれる地名とも限らず。
- ⑦八紘。八荒に同じ、八方の事なり、茲は八方の綱維なり。

醫を學んで、盧扁の術を得たり。換骨の方、願神の術、謂つ可し今日の醫王善逝なりと。近頃予に就いて字を徵す、龍光を以て之れに命す。昔宋の司馬溫公、天下の宰相なり、僧有り、相公の諱の光字を避けて瑠璃皎佛と唱ふ、古今の笑具なり。仍つて偶を作り、以て左證と爲す。扶桑樹萬八千の東、國を醫し民を養ふ唯だ一翁、淨瑠璃皎の諱に觸れず、人參甘草再溫公。(淨瑠璃皎を一に淨瑠璃光に作る。)

春韶號

令津首座は酒水派下の僧なり、一日入室の次で、予に字を徵す。之れに字して春韶と曰ふ。仍つて俚語一篇を携つて、以て其の請を塞ぐと云ふ。

- ①盧扁。古の名醫扁鵲なり、盧人なるが故にいふ。
- ②笑具。わらひ草なり。
- ③聞塵。耳なり。

物陽和を逐ふて資つて始めて生ず、唐虞の禮樂昇平に屬す、吾が家の一曲宮商の外、聞塵を洗ひ盡す流水の聲。

藏龍號

魯史に云く、「深山大澤は龍の窟なり。」宗澤藏主、余に就いて道稱を需む、之れに字して藏龍と曰ふ。偶を作り以て證と爲すと云ふ。

多年神物泥蟠に堪へたり、豈に池中に向つて獨尊を屈せんや、若し春雷蟄戸を開くに遇はゞ、鱗蟲

三百總に兒孫。

東明號

東山下の小阿師、諱を昇如と曰ふ、予に就いて字を索む、之れを雅稱して東明と曰ふ。仍つて貫華一章を製して、以て遠大を祝す。

先づ高山を照す日近き耶、之れを仰げば仁義の老耆迦、天外に出頭して須らく看取すべし、八十の華嚴春花に在り。

芳才號

禪佐藏主、芳才と號す、吾が鄧林師兄の命する攸なり。紙を寄せて偈を求む。

花を撰め錦を簇らす好文章、覺範參寥當るべからず、正法輪を轉す調羹の手、僧中今視る斯郎有ることを。大永五年孟春。

桃嶽號

智康藏主、道稱を予に求む、命するに桃嶽の二字を以てす。蓋し丹田の神、之れを桃康に認む、義此れに取るのみ。仍つて拙偈一章を唱へて、以て左證と爲すと云ふ。

古來度湖神茶を仰ぐ、直に丹田に入つて衆邪を摧く、洞中春色の標を羨まず、金輪法外斯の花有

り。昔享祿第四辛卯夷則吉辰、妙心住山大休老衲書す。

直指號

吾が山の後版、鄧林の一枝、諱を諤と曰ふ、俗は甲族仁木なり。予に就いて道稱を需む、直指を以て之れに命す。因つて偈一章を撰つて、以て其の義を證すと云ふ。

心地平かなる時繩墨正し、法梁高く架す鄧林の材、少室單傳の器を成せんと要せば、先づ斯の門より入得し來れ。天文龍集壬寅三月如意殊日。

蘭圃號

駿陽に沙彌あり、諱を金と曰ふ、予之れに字して蘭圃と曰ふ。禪詩一篇を賦して、以て遠大を祝すと云ふ。

九腕移し來つて深く芽を託す、風流種有り謝公が家、春風競秀山林の裡、十蕙一枝三四花。(芽を一に才に作る。) 天文十七祀戊申夏五十又二。

桂峯號

慶昌藏主、號を需む、桂峯の二大字を書して之れに與ふ。偈に云く、少林の惡孽、忽ち天香を發す、雲外に出頭して、三色蒼蒼たり。

①八十の華嚴。即ち華嚴經なり、譯者によりて其の卷數を別にす、實又難陀の譯、唐の證聖元年に東都の佛授記寺に於て譯したるもの唐經ともいふ、八十卷あり。佛自證の眞理を解きたる經典なり。

②丹田。梵音、優陀那の譯、躰下一寸五分許りの所、體氣をこゝに集むれば精神散亂せず、思惟に通ずといふ、躰下の丹田を下丹田と云ふに對して、兩眉の間を上丹田といふ。

③鄧林。宗棟、細川氏、山城州の産、特芳和尙に久侍し、得る所あり、後妙心、大徳寺等に住し、後柏原帝特泥輪旨を山門に下し賜ひて曰く、「正法山妙心禪寺は大燈國師上足の草創草園、先法御願の蘭若なり、是を以て輪命壽に復す、再興時を得」と、以て其の接化の機を推知するを得。

④九腕は鳥なり。楚辭に、既に蘭の九腕に蕙し、又蕙を百畝に樹う」と。

⑤蕙も蘭の一種なり。離騷に「蘭芷鬱じて芳しからず、荃蕙化して茅と爲る、何ぞ昔日の芳草直ちに此の蕭艾と爲る」と。

覺翁號

賢等老人、楮皮を寄せて道稱を求めらる、之れに命ずるに覺翁を以てす。蓋し教中に等妙の二覺有り、十信位より十地を歴て、而して等覺に至り、等覺一轉して而して妙覺に入る、之れを覺行圓滿と謂ふなり。佛とは覺なり、翁とは老稱なり、佛は是れ西天の老比丘なり。覺と云ひ翁と云ふ、字義炳然たり。若し吾が宗に約せば、一棒一喝の下、頓に正覺を成するものは誰ぞ哉、四海の一暮翁のみ。其の偈に曰く、

迷悟元來二途無し、黃塵烏帽白頭顛、眼は高し三世十方の外、老瞿曇を呼んで我が奴と作す。

業仲號

河陽に丹下氏有り、崑山源公幕下の臣なり。世々忠功あり、而して宗因信男は厥の宗なり。永正庚辰の春、源公の爲に、命を戰場に致す、謂つ可し亂世の英雄なりと。其の徒、紙を寄せて因公の字を求む、之れを稱して業仲と曰ふ。仍つて山偈を賦して以て左證と爲す。

道君臣を合す小縁に非ず、名家の父子一時の權、能く邦國を醫して功成つて後、日は落つ葛洪が丹井の西。

雲江號

越の太守、藤氏松井宗信公は、源右典厩幕下三代の忠臣なり。所謂武門の干城、法社の牆廩な

り。先師之れに諱して守慶と曰ふ、老拙之れに字して雲江と曰ふ。仍つて伽陀一章を唱へて、以て遠大を祝すと云ふ。

朝來岫を出で、自ら無心、白鳥明かなる邊春水深し、此に到つて老龐も口を下し難し、早天に雨と爲り又霖と爲る。

榮中號

多多良氏奈良元吉公は、源右京兆幕下の忠臣なり。弱冠より主に奉じて晨夕を廢せず。官暇の日、雪に螢に、父の書を読んで而して遂に射騎の妙を得たり。一弛一張、文武の道未だ地に墜ちざるもの乎。之れに加ふるに、公昔吾が鄧林法兄の室に入りて衣を受け、安名して宗繁と曰ふ、謂はゆる俗にして而して眞、眞にして俗なるものなり。今茲に大永乙酉夏、法門に瓜葛たるの故を以て、予が龍安の室を扣いて祝髮染衣す、其の志勤めたり矣。一日話する次で、楮皮を出して字を立せんことを需む、命拒む可からず、字して榮仲と曰ふ。因つて記す、漢の朱翁子錦を衣て郷に歸る、是れ翁子一時の榮耀なり。宋の蘇内翰、燭を賜ふて院に歸る、是れ内翰一場の富貴なり。蓋し公、

①安名は、新戒得度の者の爲に初めて法名を安んずること、得戒受具の者は父母の作るどころの名を稱すべからず、必ず佛法によりて、法諱法名を安んずべきなり、存命中得戒、又は出家せざるものには死後、歸戒、制度を授けて、然るのち法名を安んず。
②瓜葛。親類のつまきをいふ。法門に瓜葛は法系なるをいふ。
③祝は断なり、祝髮は剃髮に同じ。
④朱買臣、字は翁子、吳の人なり、始め貧にして妻孥に棄てらる、後會稽の太守を拜し、大に富み故郷に歸る、故妻之れを突望し、遂に自縊すと。

源君の命に榮中して、而して祿を賜ひ官に拜し、位匠作に至るなり、一門の榮、焉れより大なるは莫し。内翰の富、翁子の榮、彼れも一時なり、此れも一時なり、予、榮中と稱するも亦宜ならず乎哉。禪偈一章を唱へて、以て遠大を祝すと云ふ。

富貴前に耀く春一場、錦衣蓮燭恩光を帶ぶ、若し太守朱翁子に非ずんば、内翰昔時の蘇玉堂。(帶を一に賜に作る。)

東明號

大永五夏五吉辰。

細川右京兆の幕下に一老臣有り、秀綱と曰ふなり。姓は源なり、氏は中澤なり、世々越州刺史に任ず。公、蚤に六藝の芳潤に嗽ぎ、而して以て箕裘の業を繼ぐ焉。衰衰たる源流、藉藉たる家聲、言はずして而して知る可きのみ。是れより先、公、鄧林翁の衣孟を拜し、而して自ら籌室の先登と稱す、翁之れに諱して宗晃と曰ふ。而して後予之れに字して東明と曰ふなり。夫れ公の人と爲りや、仲尼の日月を扶桑に掲げ、而して厥の末光を挹す焉。天地と其の徳を合せ、日月と其の明を合す矣。晃晃焉として之れに就けば日の如し。蓋し明の明たる、私照無きを以て明と爲す矣。然らば則ち誰れか其の徳を仰がざらん乎、誰れか其の明を仰がざらん乎。予が命する所、義茲に在る而已、公厥れ之れを念へ。

- ② 六藝。禮樂射御書數をいふ。
- ③ 籌室。住持人の居室、方丈、函丈に同じ。費林傳に曰く、「西天の第五祖優婆塞多、石室あり、縱十八肘、廣さ十二肘、受學の者、一人の得道ある時は、籌室に室に滿つ、樹多減度に至つて室中の籌を將つて之れを茶昆す」と。籌は化度の人數を量る具なり。
- ④ 晃々。日の輝く貌。

青帝春を司つて、震方に居り、道儒星月光を争ひ回し、元來宇宙雙日無し、赫赫たる威名扶桑を照す。大永乙酉夏五吉辰。

大業號

寶泉寺殿前の常州刺史全勳大居士は、源家の棟梁、細川の砥柱なり。居士曾て龍安の室を扣いて、衣孟を義天師翁に受く。翁之れに諱して全勳と曰ふ、寔に宗門の金湯なり。居士已に薨じて、烏積み兔久し。蓋し源深きときは流遠し、厥の子あり、其の孫有るなり、一日來つて予に告げて曰く、「吾が全勳居士は、先龍安の命する所なり。然り而して其の諱を記して其の字を記せず、是れ遺憾のみ、請ふ、之れが爲に焉れに字せよ。」厥の辭肝に命す、之れを拒む克はず、稱するに大業を以てす。因つて記す、昔々三乾の猛將、人天百萬の兵を發して、三百餘陣を張る、雜華を先鋒と爲し、涅槃を殿後と爲す、堅を被り銳を執り、魔壘を攻むること殆んど四十九白。茲に於て魔軍大敗し、波旬瓜の如くに潰ゆ。遂に邪を捨て正に歸する者、今に二千歳、其の功も亦大ならず乎。之れを望めば雲の如し、其の業も亦盛んならず乎。之れに就けば日の如し、於戲誰れか仰がざらん哉。

- ① 青帝は春の神をいふ、尙書緯に「春を東帝と爲す、又青帝と爲す」と。
- ② 震方。易八卦の震を方位にあつれば東方に位す。
- ③ 金湯。金城湯池、城池の堅固なること。
- ④ 烏積み兔久し。日月の經るをいふ。
- ⑤ 昔云々。釋尊の濟度の大略を記す。
- ⑥ 四十九白は四十九年なり。
- ⑦ 波旬。魔王の名、常に惡意を懷き、惡法を成就し、僧を擾し、人の慧命を斷つといふ。
- ⑧ 天魔と相對して用ふ。

夫れ居士は天竺氏の將種なり、家系を言へば則ち源あり本あり、行迹を論ずれば則ち忠あり義あり、秋天と高を争ふなり。倘し然らば大業と稱するも亦宜なり。仍つて一祇夜を唱へて以て左證と爲す而已。

用ひ得たり竺乾猛將の謀、源流衰衰箕裘を繼ぐ、昔年馬上に天下を定む、一劍霜寒し兩鬢の秋。

桃溪號

藤氏伴野は尾州の太守、諱は永勤、予に就いて字を徵す、之れに字して桃溪と曰ふ。蓋し靈雲見桃の義に取るのみ。仍つて貫華一篇を賦して、以て左證と爲すと云ふ。

武陵一たび源頭を失してより、千古花流れて水流れず、敢て保す靈雲

擔板漢、隨波逐浪幾時か休せん。

安邦號 (待曉院殿と法號す)

藥師寺國長公は、梅の宮の奕葉、橘家の棟梁なり。幼にして而して孤、敏にして而して學ぶ。精を騎射に研き、思を倭歌に覃す、幾ど父の風有り。世々京兆の幕下に仕へて、股肱の力を竭し、忠貞の節を持す、寔に遠大の器なり。一日官の暇、予が龍安の室を扣いて打話する次で、近前して曰く、「請ふ、師安名せよ。」予咄して曰く、「歷劫名無し、甚の安名とか説かん。」然り而して堅

①武陵。桃源の義を讀出し來り、靈雲禪師の見桃悟道の因に混融するなり。
②擔板漢。一面を見て全體に通ぜざる癡漢をいふ、僻見に譬ふ。
③覃す。深く廣くする意。

く請ふて已ます、遂に之れに名けて紹泰と曰ふ。公、信受して而して退く矣。三四句の後、吳腹を

寄せて字を需む、字して安邦と曰ふ。夫れ安なる者は止なり、凡そ人の一世に處する、安處に置くときは則ち安し、是の故に人情安を欲せざる無し。吁、累卵の危に居して而して泰山の安きを圖る、是れ復た人世の常なり。邦なる者は、古に謂く、「諸侯を封するを邦と爲す」と。(邦を二に國に作る。)禮に曰く、「大を邦と曰ひ、小を國と曰ふ。」二義既に明かなり矣。蓋し予が所謂安邦は然らず。昔漢の時、賈誼、治安の策を上る、治安なる者は何ぞや、乃ち國を治め民を安んずるの策なり。上古の聖人、以て教を設け、政を施すの大本と爲す。竊かに以れば、公の祖及び子孫、三代、津陽の刺史を領す、爰に治安の策を用ひて、而して蒼生を起し、社稷を保つ者、年有り矣。因つて記す、洛社の耆英司馬光、偶藥師瑠璃光佛と諱を同じうす、兒童走卒も之れを誦す。(誦を一に稱に作る。)元祐中に召されて相と作る。是れより先、民、王呂が新法に苦しむこと久し、光、政柄を執るに及んで、議して以て舊に復す。抑國を醫し民を活するの術は、焚溺を救ふが如く爾り。

①吳腹。支那製の紙なるべし。
②賈誼。漢の文帝の時の人、年二十餘にして博士となり、一歲にして大中大夫となる、禮樂を興さんとして禮に遭ひ、長沙王の傅となる、嘗て屈原を弔ふ文を作る、後、梁の懷王の大傅となり、治安策を上る、懷王馬より墮ちて死するに及んで、自ら責の重きを思ひ、哭泣すること歳餘、遂に死す。
③社稷。國家といふに同じ、社は土の神、稷は穀の神、國は土穀によりて以て民を養ふ、故に立て、以て之れを祀る。孝經に「其の社稷を保ち、而して其の民を和ぐ」と。
④程明道、程顥、字は伯淳、宋の大儒、業を周茂叔に受く、元豐八年卒す。

程明道嘗て曰く、「君實の言は人參甘草の如し。」厥の無妄の疾、藥すること勿うして喜有るの謂乎。此れに由りて之れを觀れば、昔時の溫藥師は、宋室に相として君を堯舜の上に致し、今日の藥師寺は、津陽に守として枕を泰山の安きに置く。彼れは賢宰相、此れは賢太守、支桑異なりと雖も、地を易へば然らん。件件は且く措く、吾が宗、別に安心の藥あり、公、試みに嘗過して看よ、必ず大安樂の地に到らん。祝祝。

劉の爲に偏に左邊の肩を袒ぐ、國昇平に屬す四百年、且喜すらくは商顔猶ほ老いず、橋中の一局漢の山川。大永五 禪季夏吉辰。

輝岳號

攝の入江氏、一の奇男兒あり、幼にして棟梁の材を抱く、生れて而して風流の種と爲る。萬葉千歳を詠じて、精を雪に研き、六韜三略を學んで、思を螢に覃す。箕裘の業、將に寒氷ならんとす矣。一日老拙に就いて、法諱并に道稱を需めらる、乃ち禪果を授けて之れが諱と爲し、輝岳を之れが字と爲す。且つ告げて曰く、「拙聞く、入江は藤氏の裔たり、厥の家聲や古今に輝騰す。昭昭乎として之れに就けば日の如し、巍巍乎として之れを仰げば山の如し。輝と曰ひ岳と曰ふ、亦宜しからず乎哉。」偈を作りて、以て遠大を祝すと云ふ。卓爾たる高標攀ぶ可からず、日輪推し出す。搏桑の間、三千刹界光明藏、百億の須彌福壽の山。

模堂號 (清純は靈雲)

有馬の郡主赤松氏、一賢女有り、適ち攝の刺史橋國長公の賞堂なり。諱して清範と曰ふ、字して模堂と曰ふ。老拙之れが爲に偈を作り、以て字說に代ふと云ふ。百丈の叢規今尙ほ存す、三千の禮樂一乾坤。魯般此に到つて繩墨を絶す、月斧雲斤痕を見す。天文龍集癸巳仲春日、大休老衲花園の見巖軒に書す。

心源號

菅家左金吾宗徹居士、予に就いて字を徵す、固辭する克はず、心源を以て之れに命す。蓋し聞く、居士瑞龍門下の諸老宿に參じて、烏積み兔久し矣、謂つ可し藥嶠下の表休、藥嶠下の李翺なりと。人中の烏蔑、希世の才なり。仍つて祇夜一篇を拈つて、以て遠大を祝すと云ふ。龍淵の派脈菅原に屬す、聞くならく他は東海の的孫と、謂ふ莫れ祖師意旨無しと、黃河九曲して崑崙より出づ。

秀峯號

支桑。支那扶桑の略。
劉の爲云々。君の爲に偏に丹心を盡すをいふ。
白襪は祀に同じ、年をいふ。
搏桑は扶桑に同じ。

① 賞堂。詩の衛風伯兮篇に、「焉んぞ設草を得て、言れ之を背に樹点ん」とあり、背は北堂なり、母の居る所、之れを賞堂といふ。設は賞に同じ、わすれぐさ、之れを食へば憂を忘ると。
② 百丈の叢規。百丈の古清規二卷、大智禪師の撰、叢林規矩の第一の書なり。
③ 魯般。孟子離婁上篇に、「離婁の明、公輸子の功も規矩を以てせざれば方員をなすこと能はず」の註に、「公輸子名は班、魯の巧人なり」と、淮南子に「魯般木を以て焉を爲り、而して之れを飛ばす」とあり。
④ 李翺は唐朝の人、朗州刺史たりし時、初め岷山に見ゆ、山顯みず、侍者白して曰く、太

駿州刺史源府君、入室參立の次で、法諱を求む、之れを名けて宗哲と曰ひ、之れに字して秀峯と曰ふ。按ずるに倒に上り秀づるものは峯なり、蓋し義茲に取るのみ。仍つて偈を作つて、以て遠大を祝すと云ふ。富士蓬萊日本の東、山顔老いす壽窮無し、虚空背上に頭を擡げて看れば、百億の須彌下風に立つ。

芥舟號

尾の賢太守武衛源公の幕下に禿居士あり、宗余と曰ふ。姓は藤、氏は織田、累代武門の勳閥なり。或人其の徳を表して芥舟と號す焉。近頃楮先生を介して、一偈を予に求む。予之れを聞けり、千金を芥にし、萬乗を履にし、而して雲夢の如くなるもの八九澤、其の胸に芥蒂せずと、寔に光風霽月洒落の士なり。蓋し芥舟と號する所以は何ぞや、之れを莊子の逍遙篇に取る耶、且つ夫れ水の積るや、厚からざれば、則ち大舟を負ふに力無し、杯水を坳堂の上に覆せば、則ち芥之れが舟と爲り、杯を置くとときは則ち膠す、水淺うして而して舟大なればなり。郭象曰く、「夫れ質小なるものは、資る所大を待たず、則ち質大なるものは、用ふる所小を得

守此に在りと、朝性福念にして乃ち言つて曰く、面を見んよりは如かず名を聞かんにはと、山太守と呼ぶ、朝應諾す、山曰く、何ぞ耳を貴んで目を賤しむことを得たる、朝手を拱いて之を謝す、問うて曰く、如何なるか是れ道山、山、手を以て上下を指す、曰く、會するや、朝曰く、不覺、山曰く、雲は天にあり水は瓶にあり、朝禮拜し一偈を述べて曰く、「身形を練り得て鶴形に似たり、千株の松下兩面の經、我れ來つて道を問ふ餘説なし、雲は青天にあり水瓶にあり」と、盛んに方外の遊を爲す、居士の名漸く禪界に知らる。

●芥蒂。芥在といふが如く、胸中苦とならぬをいふ。

す、故に理に至分あり、物に定極あり、各事に稱ふに足りて、其の濟すこと一なり」と。是れに繇つて之れを觀れば、一塵天を翳し、一芥地を覆ふ、居士其の兩間に生れて、仰いで瞻し俯して察す、天地は杯水の芥を浮ぶるが如し、身之れが舟たるなり。然して識浪の爲に溺せられず、淺深高低、情に適して逍遙す矣、飄飄乎として一葦の如く所を縦にす、樂しみ至れり矣。厥の徳天地の間に昭昭乎として、莊が日月の如し、予が言其の明を掩ふ、豈に郭が霧に異ならざらん乎。嗚呼、濟川の材、諸れを含めよ、汝を用ひて舟と作さん、旃れを勉めよ。

春澤號

芥舟平地に波を起す時、空裡の遊絲之れを繋がんと欲す、一夜風吹いて仰の處にか去る、蟣螟海を負ふて蚊眉に入る。

備の後州に甲族あり、姓は藤、氏は廣澤なり、因つて食邑を安田と號す。安田光忠、予未だ其の面を見ずと雖も、遠く書信を寄せて、諱號を雷む。諱して宗光と曰ひ、字して春澤と曰ふ矣。蓋し之れを淵明が春水四澤に滿つるの句に取るのみ。祇夜一篇、以て遠大を祝すと云ふ。

●淵明春水四澤の句。陶淵明の四時の詩の起句なり、「春水四澤に滿つ、夏雲奇峰多し、秋月明輝を揚げ、冬嶺孤松秀づ」と。然れども許彦詩話にいふ、「四時の詩は此れ顧長康の詩なり、誤つて彭澤集中に入る」と、彭澤は淵明の令たりし處なり。

氷解け雪消して風波たてず、雲夢八九未だ多しと爲さず、天野水を浮べて眼俱に碧なり、一箇の白

鴨黃達麻

月虎號

尾の甲族織田又六郎信張、冷香軒主に介して、諱號を子に求む。子竊かに聞く、此の郎人と爲り、威にして猛ならず、虎の乙を挾むが如し。爪牙具り兮頭角全し、狐其の威を假り、羊其の皮に象るの屬に匪すと。之れに諱して宗乙と曰ひ、之れに字して月虎と曰ふ。可ならん乎、軒主之れを領ふ。抑虎の虎たるや、大戴禮を按するに、云く、「西に毛蟲三百六十あり、虎之れが長たり、生れて而して三日、伏肉を喰はず、牛を食ふの機あり。始めて南山に入りて霧に隠るゝこと七日、厥の文炳然たり。」蓋し虎穴に入つて虎鬚を拵で尾を履むものは、乙居士に非ずして誰ぞや。昔長沙の岑禪師、月を翫ぶ次で、仰山、月を指して云く、「人人盡く這箇あり、只だ是れ用ひ得ず。」沙云く、「恰も是れ便も爾を情ふて用ひん那。」仰云く、「爾試みに用ひよ看ん。」沙一踏に踏倒す。仰山起つて云く、「師叔一に箇の大蟲に似たり。」後來人號して岑大蟲と爲す。是れに繇りて之れを觀れば、月と曰ひ虎と曰ふ、亦宜しからずや。氣類相感するときは、千峯の月に吼え、萬嶽の風に嘯く、凜乎たる餘勇、今に至るまで斑斑兒孫の在るは、

④ 虎の乙。虎の脊の兩傍の皮下にありと云ふ乙字形のもの。
 ⑤ 領す。うなづく、承諾するなり。
 ⑥ 大戴禮。漢の戴德の輯むる所のものなり、揚雄の傳へたる禮記を小戴禮と云ふに對して名づく。
 ⑦ 伏肉。蓋し死肉を云ふなるべし。

乙居士の謂乎。偈を作つて以て遠大を祝すと云ふ。

毛群三百六十の長、兔子懷胎大蟲を産す、南山雲霧の裏を跳出して、一聲吼破す廣寒宮。

玉雲號

宗珪信女、紙を寄せて號を求む、之れに雅して玉雲と曰ふ。因つて貫華一章を唱へて、以て其の義を證すと云ふ。

崑山片片 崔嵬を覆ふ、帝網重重 殿陔を鎖す、朝に風を逐ふて

荆岫を出づと雖も、暮に雨と爲つて陽臺に到らず。

雲外號

和の山中に甲族あり、山田氏と稱す。武門の閥閱、法社の金湯、靈山の遺囑を忘れざるものか。是の故に兒卒も之れを誦し、草木も其の名を識る矣。宋の再溫公か、齊の諸田氏か、嘉尚すべきなり。復た教外の宗を慕ふて、日に碧巖集を課す。之れを手にし、之れを口にして輟めず。近頃紙を子に寄せて字を徵す、或人之れに諱して宗公と曰ふ。蓋し公の義たる、天下大小と無く之れを稱して公と曰ふ、諱に宜しからざるなり。余公を改めて興に作るの次で、之れに字して雲外と曰ふ。

① 崔嵬。石山の土を頂くをいふ。
 ② 網一本綱に作る。
 ③ 殿陔は殿階に同じ。
 ④ 荆岫。荆山下和。岫を出したる所、玉によつて之れをいふ。
 ⑤ 楚の襄王の故事、雲と爲り雨となりの意により、暮に到らざる意をとるなり。
 ⑥ 諸田氏。田横は齊王田榮の弟なり。通鑑集覽に、彭城既に漢の封を受く、田横其の屬徒五百餘人と海に入り、島中に居る、漢の高祖其の亂を爲さんことを恐れて、田横の罪を

按するに大戴禮に云く、「東に鱗、蟲三百六十あり、龍之れが長たり。」然らば則ち公も亦鱗蟲の長たり、而して雲を起し雨を降す、人中の龍に非ずして何ぞや。其の變化得て識り難し。孔と云ひ休と云ふ、亦誣ひすや。仍つて偈を作り、以て遠大を祝すと云ふ。

和國の山河瑞氣濃かなり、風塵の表に出で、靈蹤を露す、由來是れ池中の物にあらず、且く春雷を待つて、臥龍を起さん。天文十三龍集甲辰菊月^①上澣日^②。

汝宗說

大雲山中に一の侍史あり、諱を派と曰ふなり、乃ち吾が西源翁の舎飴なり。一日予が室を扣いて字を求む、之れに命するに汝宗の二字を以てす。侍史曰く、「其の説得て聞くべしや。」予曰く、「居れ、吾れ汝に語らん。夫れ法幢を建て宗旨を立する者、四七、西乾に^③倡へ、二三、東震に傳ふ。而して曹溪の一滴此れより分る矣。波波波浪、江西湖南の間に森瀾たり。或は^④五家、或は七宗、天下滔滔たるもの皆是れなり。誰れか吾が宗に歸せざらんや。譬へば水の海に朝宗せざる無きが如きなり。然りと雖も天下本

故して之れを召す、横謝して曰く、敢て詔を奉ぜずと、使遣り報す、帝乃ち衛尉卿前に詔して曰く、齊王田横即し至らば敢て動搖するものは、族夷と致さんと、遂に義、漢に臣たるを恥ぢて自刺す、餘五百人尙ほ海中にあり、使をして之れを召さしむ、横の死をき、皆自殺す。以て其の人と爲りを知る。

①臥龍、龍は靈物なり、起てば必ず爲すことあり、英雄の未だ世に出でざるに喩ふ。三國誌に、「諸葛孔明は臥龍なり」とあり。蓋し之れに比するなり。

②上澣、上旬に同じ。

③倡へ、唱へに通じ、同義なり。

④五家、臨濟、潯仰、曹洞、雲門、法眼、七宗は此れに攝岐、黃龍の二宗を加へたるものなり。

⑤表盜などないひて、其の術の巧妙より機鋒端倪すべからざるに喩ふ。

⑥鑿頭、大瓶の頭なり。

⑦南浦、大應國師をいふ。

色の^⑤白拈と稱するものは、臨濟一人而已。因つて記す、臨濟一日、松を栽うる次で、黃葉問うて云く、「深山裡に許多を栽ゑて甚麼か作さん。」濟云く、「一には山門の與に境致と作し、一には後人の與に標榜と作さん。」道ひ了つて、鑿頭を將つて地を打つこと三下す。葉云く、「然も是の如くなり」と雖も、子已に吾が三十棒を喫し了れり。濟又鑿頭を以て地を打つこと三下す、嘘嘘の聲を作す。葉云く、「吾が宗、汝に到つて大いに世に興らん」と、一問一答、師資道合す矣。」侍史今厥の孫と爲りて厥の宗を定む、夫れ予が字する所、茲に在らず乎。他日若し^⑦南浦の春を花園に回し、西源の流を桑海に激せば、吾れ汝を以て臨濟の正宗と爲さん。旗れを勉めよ。

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之二終

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之三

遠孫比丘衆等重編

立地

釋迦如來文殊普賢二大士安座の 開光

「本是れ天然の老釋迦、金剛の正眼塵沙を絶す。象旋獅擲大人の境、一會の靈山春花に在り。筆、左眼に點じて云く、「錯。」右眼に點じて云く、「錯。」頂門一隻に點じて云く、「果然果然。」

三島江眞光寺本尊彌陀如來の開光

青山綠水無量壽、玉兔金烏雙眼睛、當處に豁開す。安養界、霜に傲る黃菊一場の榮。夫れ以れば、末劫濁亂願海澄清、枳里俱の三字の義を合して、上中下九品の名を分つ。枯木の形段淵黙の雷聲は、四倒八邪を利濟して、諸

①立地。地に立つ、地の上不起立するの意、又立地聽法といふ如き場合、又立ちどころ其の場にてなどいふ意にて、立地成佛などいひ、忽然などに同じ、此所は此の意をとる。
②開光。開光明、開光佛事の略、開眼、點眼に同じ。
③安養界。九品安養界といひ、極樂世界をいふ。
④上中下九品。觀無量壽經に、極樂世界の果相を説き、上、中、下に各また上、中、下ありて、總じて九品ありとなす、これその往生の因種に區別あるを以てなり。

有を空盡す。①十惡五逆を捨てず、衆生を接取す。右脇は大勢至、左邊は正法明、主と作り伴と作る、弟の如く兄の如し。凡聖同居、西方を十萬億に縮め、神仙の靈境、三島を咫尺程に移す。人々如來地に入り去る、箇々毗盧頂を踏んで行く、也た奇怪也た奇怪。白鼻の崑崙は太平を賀す。山僧別に眞光を點出せん。看よ看よ。寶樹寶臺七重の影、檀門成する日寺門成す。收。

觀音點眼

①梵釋天を照す雙眼睛、湯池と作り也た金城と作る、普門八字に打開し了る、永く護す吾が山の正法明。

心安淨源居士、法華千部を誦する供養

の語

國譯圓滿本光國師見桃錄 卷之三

④四倒。四顛倒の略、迷界の衆生は明智なき故、常に正理を顛倒して見解するものこれなり、凡夫世間の實相なる非常を常、非樂を樂、非我を我、非淨を淨となすをいひ、二乘及び菩薩の四顛倒は、涅槃の實相なる常を非常、樂を非樂、我を非我、淨を非淨とするなり。
⑤諸有。四洲、四惡趣、六欲天、梵天、無想天、那含天、四禪天、四無色天等を總稱していふなり。これを有と稱する所以は、これ等の諸界は、因果相續して果中未來の果を結ぶべき因を具有するが故なり。
⑥十惡五逆。十惡は十種の惡業、殺生、偷盜、邪淫、妄語、綺語、惡口、兩舌、貪慾、愚痴、瞋恚をいひ、五逆罪とは恩田に違逆し福田に違逆する五種の暴惡なる罪過、五無間業と

薩訶世界南瞻部洲、扶桑國攝津州に居住する

奉三寶の弟子藤原朝臣親吉、形俗に處すと雖も、

究竟の法理法門と喩ふ。
① 經王。法華經をいふ。
② 羊鹿牛。法華經譬喻品に出づ、大要に曰く、某長者邸宅

ひたりといふ、羊車はこれを聲聞に、鹿車は之れを緣覺に、牛車はこれを菩薩乘に喩ふ」と。

心は浮圖氏の如し。③ 卅歳より日に法華を課す。寸陰分陰、之れを手にして釋てず、之れを口にして輟めず、一部に始りて千部に終る。謂つ可し在家の菩薩と。也た其の功大なる哉、其の德至れる哉。那由他の舌を以て、説いて塵劫に到るも、

に火災ありしが、小兒等は遊戯に興して出でざる故、長者はために門外に羊鹿牛の三車ありて、汝等を待てりとすか

④ 華封の三祝。莊子に「華の封人、堯を祝して曰く、願はくは男子多かれ、壽多かれ、富多かれ」と。
⑤ 石火光中は瞬間をいふ。

豈に盡す可けんや。夫れ法華は諸佛出世の本懷、衆生成佛の直路、是の故に諸經の中に最も第一たり。五時を以て之れを配すれば、則ち日午に三更を打す、⑥ 五味を以て之れを分てば、則ち酥酪醍醐と變す。妙の一字、三世の佛も説き盡さず、歷代の祖も提不起、展ぶるときは則ち天を挂へ地を挂ふ。收むるときは則ち毫を絶し釐を絶す。妙の妙、玄の玄、不可説不可説、不思議不思議。蓮の華たる、内塵にして外直なり、五濁の水を出でて心華開發す。之れを清せども濁らず、之れを澄せども清まず。其の色や也た黃絹幼婦、其の香や也た八百の鼻功德、當體の蓮、譬喩の蓮、色即空、空即色。然らば則ち妙を離れて蓮無く、蓮を離れて妙無し。開權顯實の花、本迹二門一時に豁開す。伏して冀はくは、心安淨源居士、這の 經王讀誦の功に憑つて、 羊鹿牛に駕せず、頓に火宅を出でて象兎馬を叱起して、

直に三乗を超えん。加之、⑦ 華封を三祝に致し、藤氏を萬世に盛にし、梵釋龍天之れが爲に證明し、鬼主鬼官之れが爲に合掌せん。然も是の如くなりと雖も、山僧別に七軸を撥轉する底の活手段あり。居士高く看經の眼を著けよ。八邪の轍を翻轉して、一乗の大車と作す、眞の寶處に到らんと欲せば、風流當家に屬す。

石塔を建つる語

元來無縫鐵崑崙、塔樣分明なり誰れか敢て論せん、 ⑧ 石火光中高く眼を著けよ、風荷葉を翻して露團々。

拈香

鼻祖忌

禪と説き道と説く是れ争の端、^①肉を分ち皮を分つて猶ほ未だ寒からず、
 梁魏の山河野狐の窟、人をして多少疑團を著けしむ。
 廓然の一箭已に絃を離る、面壁弓を挂く八九年、天下今落鵬の手無し、
 等間に飛び過ぐ竺乾の西。
 野狐跳つて太平州に入り、六宗を破卻し俗流を誑かす、^②熊耳峰高し一
 痕の月、空しく隻履を埋めて愁を埋めず。
 梁魏の小山河を眇観して、風浪花を捲いて、^③蘆葉過ぐ、大藏五千餘卷の
 外、片岡別に一篇の歌有り。
 梁魏の山河亂れて麻の若し、果然として賊は貧家を打せず、何の面目有
 つてか西に歸り去る、冷笑す江湖の鷗一沙。
 神光三拜相當らず、五逆の兒孫錯つて擧揚す、若し西來意旨無しと道は

①拈香。香を拈じて爐に焚くこと。

②鼻祖忌は達磨忌をいふ。

③肉を別つ云々。道副、摠持、道育、慧可は達磨門下の四神

足なり、道副、皮を得、摠持、肉を得、道育、骨を得、慧可、獨り髓を得と、便ち道の深淺

によりしなふのみ。

④熊耳峰。祖庭事苑第三に曰く、熊耳嶺は即ち達磨の塔所なり、塔の記に曰く、大師化縁已に畢る、傳法人を得、乃ち端居して逝く、大同二年十二月五日なり、熊耳山に葬り、塔を起つ」と、後魏の宋雲。

ば、直に須らく東海變じて桑と成るべし。

隻履は西に歸り隻履は東し、九年面壁楚人の弓、今朝拾ひ得て香片と爲す、落葉吹き残す昨夜の風。

這の野狐精丘に首してより、叢林千古宗猷を失す、自家頻に單傳の葉を掃つて、梁王臺上の秋を管すること莫れ。

石上の油麻惡芽を生ず、西來萬里袈裟に衰む、^①眞丹闔しと雖も餘地無し、移して扶桑に入つて毒花を開く。

達磨大師千年忌

千年の滯貨祖師の禪、賣弄何ぞ曾て半錢に直らん、衲僧辛辣の手に觸著すれば、野狐涎も亦龍涎と作る。

妙心開山忌拈香

香を擧して云く、「關山の梅は臘天に向つて開く、雪に和して一枝拈出し来る、只だ兒孫五逆を消するが爲に、臥龍奮迅して雲雷を起す。大日本國山城州平安城西京正法山妙心禪寺、大永元年臘月十二日、山門伏して開山師祖關山大和尚、^②瘞履の辰に値ふ。鐘を鳴し衆を率ゐて、微笑塔下に就い

使を奉じて葱嶺に於て師の手に隻履を携へて往くに遇ふと、依つて塚を發いて見れば、塚中只だ隻履の存するのみと。

①蘆葉過ぐ、達磨初めて梁の武帝に相見して、問答應對するに機宜投合せず、依つて遂に江を渡りて、北の方魏の國に向つて去れり。傳燈錄に其の渡江を記して、葦一葉を折りて楊子江を渡り、梁を去ると。

②野狐の精魅なり、化けものなり、他を抑下して評する語、また意に托上して用ふること少からず。

③眞丹。眞丹、又は眞且と書す、支那をいふ。

④瘞履。瘞はうづむこと、履を埋むにて屍を収むることをいふ。

て、嚴に香華燈燭非薄の禮奠を備へ、同音に大佛頂萬行首楞嚴神咒を諷演する次で、住持比丘宗休、這の崑崙耳を割いて、聊か小香料と作し、慈蔭に上奉し、以て涓埃に充つ。餘薫必ず三際に亘り、九垓に遍からん。共しく惟れば、大和尚活機電轉じ、微笑春回る、正法眼藏を凌滅し、本分の錯鈍を賣弄す。國師に嗣いで兩朝の帝王に調す、捲輪冠無憂履、風顛を愛して四海の英衲を罵る。單傳の器、直指の才、御爐の煙、袈裟角に裏み、方丈の雨、錦繡堆に洒ぐ。全く他力に依る。聖胎を長養す、異代名を同じうして、百千の林際を七歩に屈す。透關眼を具して、大小の雲門を半杯に空す、坐來星彩收り、月華散す。喝下地軸折け、天柱摧く。信州の海棠花遅し、故園憶ふこと有り、吳宮の野草、綠老いたり。徑路無媒、郊隣逃れ藪鳳竄る、夜鶴怨み曉猿哀む。再來何の時ぞ、且く祖塔の紅瑪瑙と變するを待つ。示寂斯の日未だ吾が山の碧崔嵬を露すを見ず。蓋し左に相ぐ者は、呂の爲にす、風に趨る底は、隗よりす。讎に酬ゆるときは、則ち頭綱八餅、恩に報するときは、則ち熱鐵數枚、恩に報するが是か讎に酬ゆるが是か。更に道へ、更に道へ、快哉快哉。香を以て爐に挿んで云く、「猶は霜に傲る一莖の榮有り、牀脚下に向つて手づから栽培す。因。」

鄧林和尚入牌祖堂 大永二年十一月二十五日

① 涓埃に充つ。恩顧の萬分の一を報するの意。
 ② 呂は漢の呂後の族をいふ。
 ③ 郭隗先生をいふ、燕の昭王に事へ、昭王賢者を招くに當り、曰く、王誠に士を致さんと欲せば、先づ隗より始めよ、隗すら使へらるなり、以て隗より賢なるものをやと。

牌を拈じて云く、「列聖叢に贗本の碑無し、諸方莫教あれ海螺兒、龜山一夜同參の話、雪梅花に在り誰にか説向せん。共しく惟れば前住當山第十七世鄧林法兄大禪師、通方の作者、見處師に過ぎたり。蚤く京兆の幕府を辭し、晩に百丈の叢規を董す。塵塵刹刹、熾然說法、巍巍堂堂、肅如たる威儀、祖月禪風、達磨氏の倭歌の體を學ぶに效ふ。怪巖奇石、寒山子の梵語の詩を題するに擬す。毎に百則の公案を評して、痛く八教の閑梨を罵る。鸞鳳を雲間に望む、泰華峯仰げば彌く高し、龍蛇を格外に辨す、溜池の水嘗めて之を知る。上根中根下根の群沓を接し、正法像法末法の住持と稱す、賓主互換、棒喝交馳す。御園春回る、艸色染め成して藍樣翠かなり。先廬秋晩れ、盧橘花開いて楓葉衰ふ。晴拄杖正に好し、力を著くるに、爛枯柴檢束して知に酬ゆ。若し驢胎馬腹の内に入らば、何ぞ其れ鵲噪鴉鳴の時を了せん。錯錯、且く道へ、世尊金襴を傳ふる外、別に甚を將つてか大龜に付す。顧視して云く、「侍者、平胃散一盞を點じ來れ。」

興宗和尚入牌祖堂 天文四年乙未五月二十一日

この瞎驢堆瞎漢を容る、百千の臨濟一叢林、後人の標榜山門の境、即ち

④ 龜山。雪峰義存禪師、師兄岩頭全義禪師と同行にて紫山に到り、一夜岩頭の提擲により大悟成道せし故事をいふ。
 ⑤ 泰華は泰山及び華山をいふ。
 ⑥ 溜池の水。列子に溜池の水は味を異にす、されど既に合すれば、其の味を辨知し難し、唯能く味を知る所の易牙のみは嘗めて之れを辨知したりと。以て聰明なるもの善く微妙の義理を辨知するに喩ふ。
 ⑦ 興宗和尚。諱は宗松、美濃瑞龍寺の悟溪禪に參じて、遂に悟溪の印記を受けて、後妙心寺、龍安寺に住す、聲價播越す、豐後の刺史齊藤氏、大寶寺を創め師を請じて開山始祖となす、文龜四年勅命により大德寺に陞る、後、尾張の瑞泉寺に移る、大永三年六月二十一日寂す、勅して大猷慈濟禪師と諡す。

是れ吾が家の大寶の箴。共しく惟れば前住當山第二十三世興宗松公大禪師、之れを仰げば佛日彼の傳霖に逢ふ、辛苦十年、汗馬を心地に收む。震驚百里、瑞龍を蹄浴に起す。吾が宗大いに興るの日に際して、由來積徳の陰を感ず。上に蘇有り下に蒼有り、諸子密付の志を抱く。梅に始つて棟に終ふ。此の翁已墜の風を回す時、烏鉢を現す。地、黄金と變ず、眞淨の宗教大珠に類す。横説堅説、虚堂の兒孫東海に在り。以心傳心、明月夜光、多くは劍を按するに逢ふ。高山、流水、只だ知音を貴ぶ。者裏還つて祖師有りや麼や、井底に林檎を栽うと道はず。咳。

花園法皇二百年忌の香語

曇華再び現す百花園、稽首す。

法皇無上尊、是れ恩に報する耶、是れ徳に酬ゆるか、龍涎吐き出す鐵崑崙。

龍泉景川和尚七年忌

扶桑國裏一禪翁、舌龍泉を振つて氣虹を吐く、滿肚の無明七年の雨、三千條の罪落花の風。

特芳和尚十七年忌

恩を知つて今日恩を報することは易く、毒に中つて當時毒を用ふることは難し、將に謂へり先師肉猶ほ暖かなりと、疎離の殘菊霜を帯びて寒し。

特芳和尚三十三回忌の香語

天文六年

吾が正法を滅す瞎驢の漢、項上の鐵枷三百斤、一炷の爐香阿鼻の種、業風吹いて北山の雲と作る。

賢甫宗岳首座七周忌の拈香

師時に河州に在り

「昔時何事ぞ 冤家を結ぶ、藝地に掀翻す奈落迦、我れに本來の香一瓣有り、風に和して吹き送る七梅花。今茲永正第九仲春二十日、伏して賢甫宗岳首座七周忌の辰に値ふ。厥の徒外記檢乎、山僧に告げて曰く、「洛の北柱蔭の舊廬に就いて、某兄某弟、春色分に随つて、或は花を拈じて佛に供じ、或は柳を折つて僧に齎す。嗚呼、何を以てか涓埃の報と爲さん乎。願はくは師の一偈を請ふ、往いて以て例に隨はん。」也た山野咄して曰く、「一棒一喝、是れ外記の報にあらずや、無言無説、是れ山野が偈にあらずや。無

蹄浴。馬蹄などの跡に水の溜りたるもの。

蘇。いなしなつら、若は藥草の名。

棟。あふち、高さ丈餘、葉は桃の如く尖り、三四月頃花を開く。

咳。い、又いい、大呼なり、又笑ふ貌、師家が學人を接待する場合に、法語の結末、意盡き語窮つて發する語、宗門多くは香語、或は引導法語の中間に唱ふ。

景川。諱は宗隆、姓は平氏、伊勢の人なり、幼にして本州の圓明寺に投じて剃具し、初め尾張の瑞泉寺の雲谷祥に參じ、又思溪寺に義天詔に謁し、尋いで讃岐慈明庵の桃隱期に參じ、後、龍安寺に雪江環に依る、一日入室、問を發せんとして師の一折に逢ひ、豁然として大悟す、大和興雲寺、

伊勢の瑞應寺、京師大心院は、皆師の開山始祖たり、京の妙心、龍安、尾張の瑞泉、丹波の龍興寺、伊勢の大樹寺等に歷住す、文明六年詔を受けて大德寺に親蒙す、明應九年三月朔寂す、本如實性禪師と諡す。

三千云々、師末期の偈に云く、「元本の無明、七十六歳、最後の牢關、三千條の罪」と。

特芳。諱は禪傑、尾張熱田の人、業を妙喜院の瑞石岩に受く、後雪江環に參じて契悟す、出でて尾張の瑞泉、丹波の龍興寺、攝津の海清寺、京の妙心寺等に遷る、又丹波の龍潭寺を創む、後大德に墜る、又細川政元聘して龍安寺を董さしむ、永正三年九月十日寂す、大寂常照禪師と諡す。

殘菊。忌日は九月十日、故に最情を叙舒して併せて其の徳

垢稱の曰く、汝に施す者を福田と名けず、汝を供養する者は三惡道に墮す。外記外記、恩に報するや、隣に報するや、以て加ふること蔑し焉。然りと雖も、乞うて報せず、遂に香語を唱へて請に酬ゆる者なり。夫れ惟れば某名、古道の顔色、宗門の爪牙、洋嶼の黃楊の禪に參するときは、則ち二十年辛苦を喫す。松源の黑豆の法を用ひるときは、則ち三千里誦詁をみる。志、鴻鵠を凌ぎ、眼龍蛇を定む。蓋し首座說法如何。晝は閑浮、夜は兜率、而して先師の公案未了なり。水は黃河、山は太華、餘波左右に及ぶと雖も、殘夢袈裟に裹み難し。春風樓下生前の酒を愛し、水晶簾中睡後の茶を煎す。加之、七歩の臨濟を罵倒し、一宿の永嘉を驚起す。歸去來歸去來、天は白雲と共に曉け、沒交涉沒交涉。泉は石徑を銜いて斜なり。此れは是れ賢甫首座の無盡藏陀羅尼三昧なり。別に後昆を覆蔭する底の句を要す、諸人試みに煨桂新芽を長するを看よ。香を以て眞を指して云く、幸字脚し飄沙、石上に油麻を種う。唧唧。」 江南釋宗休和南。

前任普門月心照公座元三十三年忌の香語

「雜華を按ずるに人間に香有り、名けて象藏と曰ふ。龍の鬪に因つて生

す、若し一九を焼けば、即ち大香雲を起して、王都に彌覆す。七日の中に於て、細香雨を雨ふらす。香を擧して、山僧亦那一香有り、生鐵鑄成す底の鵲崗、之れを未兆の先に得たり、即今鎚碎し將ち來つて兜羅綿よりも軟かなり。大慈雲を白花巖に起すときは、則ち猗蘭四十里の臭氣を退く。小曼陀を金粟室に澗ぐときは、則ち蟾桂五百丈の芳鮮を奪ふ。上碧落を穿ち下黃泉に徹す。鵲崗即ち象藏、象藏即ち鵲崗。一回這の香氣に觸るゝ者は、三摩地より普門に入得す、諸人還つて入得すや麼や。別々。綠楊晝暗し鷓鴣の烟。大日本國攝州路慈雲山普門禪寺守塔比丘聖安、維時享祿三年龍庚寅に集る。孟陬二十七日、山門茲に前住當山月心照公座元禪師三十三白蓮忌の辰を迎ふ。庚に先つこ

- ① 樂風。業の力に煽られて、惡處に苦を感ずるを猛風に譬へていへるなり、大乘義章には、「業力風の如く、諸の衆生を吹いて惡處に苦を受けしむ」とあり。
- ② 冤家。仇敵といふが如し、心に忘れられざるの意に用ふ。
- ③ 永嘉。永嘉玄覺禪師、曹溪に參じ、一宿して大悟徹底す、時に學者輻輳し、眞覺大師と號す、先天二年十月寂す、無相大師と謚す、證道歌一篇、永嘉集十篇あり。
- ④ 鵲崗。崑崙、派論などに同じ、崑崙山の略、又は崑崙國、又物の渾然として未だ分割せざるをいふ、又人の頭をいふ場合あり、又混沌未分時の意に用ふ。
- ⑤ 曼陀羅華をいふ。
- ⑥ 三摩地。梵音サマードヒ、尋持と譯す、又正心行處ともいふ、實を修すれば、心一境に住して動ぢざる故に名づく。
- ⑦ 普門。法華經二十八品中の第二十五品に見はれたる觀世音菩薩普門品の所説の抽象的約語なり、この品の中には兩番の問答あり、前者は觀世音を論じ、後者は普門の法を論ず、實相の法は、圓法なるが故に一切に周徧す、故に普といふ、又實相の法は、非空、非假の中道なるが故に、能く空假の二諦を雙照し、敢て塞がることなし、故に門と名づく、依つて普門の意を知るべし。
- ⑧ 孟陬。陰曆正月をいふ。
- ⑨ 函丈。方丈ともいふ、禪室のこと。
- ⑩ 如干。若干に同じ。
- ⑪ 水月懺摩。懺悔のこと、懺悔に二種あり、理の懺悔、事の懺悔、水月は理事をいふなり。

- ⑫ 水陸會。悲濟會ともいふ、施食會、施餓鬼會の別稱、普門水陸會を以て施餓鬼會の別稱とすれども、本來は水陸會と施餓鬼會とは其の所由を異にせり、委しくは釋門正統、釋氏資鑑等に見ゆ。
- ⑬ 觀。梵語達觀の略、具には達觀擊といひ、或は駄器尼と書く、譯して財施、又は檀施といふ、布施物のことなり、觀を撰、又は觀に作る。
- ⑭ 白傘蓋無上神呪。楞嚴呪を異稱して云ふ、即ち八句の陀羅尼なり。首楞嚴經に云く、「我佛頂光明摩訶薩怛多般怛無上神呪を誦せよ」と、溫陵會解に曰く、「摩訶薩怛多般怛羅、此に大白傘蓋といふ、即ち藏心なり」と。
- ⑮ 六道能化。六道の邊界に沈淪する衆生を化度する菩薩のこと、六觀音、六地藏の如き是

と七日、^① 函丈に就いて諸般の善利を修し、常忌の佛の尊像を彫刻するも
の一軀、經王妙典を讀書するもの ^② 如干部、^③ 水月懺摩を修禮する者一場、
水陸淨供を施設する者一會。今散筵に當つて、香花燈燭茶果珍饈の儀を
營辨し、佛に供じ僧に ^④ 嘸す。仍つて現前の苾芻衆を集めて、異口同音に
白傘蓋無上神咒を誦演するの次で、手を洛下退藏の野衲宗休に借つて、
這の一瓣を焚いて本師釋迦牟尼善逝、濡首・徧吉の二菩薩、今日の教主香集
世界の菊光佛、現座道場の正法明如來、^⑤ 六道能化の男々和尚、三世十
方の諸佛薩埵乃祖大覺禪師、三國傳燈列祖師、天主・地神・水族・山靈・一切の
含識等に供養し奉る。伏して冀はくは ^⑥ 覺靈、這の薰染に沐して、黨も無
く偏も無く、冤親平等證行同圓ならんことを。夫れ惟れば、月心座元禪
師、蚤に講肆に遊び、晩に歸田を賦す。知識は優曇華の如し、本朝始めて
大覺の徽號を賜ふ。首座は僧中の月たり、季運幸に無明の正傳を得たり。
其の出興也、世尊滅後、其の行道也、^⑦ 威音已前、闍市、喧を厭ふ、黃塵・
烏帽・伽黎・勃罕・間房に老を投ず。青山素髮孤榻蕭然、毎日に經を課して
坐し、長夜夜、佛を抱いて眠る。秀鐵面を圓通に仰ぐ、戒乘俱に急なり。照

れなり、能化は所化の對語に
して化主の意とす。
① 亡者の靈をいふ。
② 天地未生前に於て已に世のう
るさいことを厭ふてなり。
③ 廣大無邊の義。洞山大師支中
銘に「觸目荒林年を論する放
曠」と、蓋し放曠は方廣に同
じ。
④ 芒屨は芒鞋に同じ。
⑤ 馬鳴は如來嫡傳第十二祖、馬
鳴尊者なり、梵音「アシユヅ
グホーサ」、阿濕縛羅沙、阿那
菩提は其の轉訛なり、大乘起
信論は實に尊者の遺出なりと
傳ふ、周の顯王四十二年寂す。
龍樹尊者は傳燈第十四祖、梵
名那伽闍利樹那、龍猛又は龍
勝と譯す、宗門傳燈の祖たる
のみならず、八宗の祖師と崇
めらる、大智度論百卷、十住
毗婆沙論十七卷、中論四卷、
十二門論一卷等の著あり。

白眉を ^① 方廣に推す、名實兼ね全し。或時は短袈衣を著て、早梅を前村の
雪裏に探り、或時は生苾芻を拈じて落葉を夕陽溪邊に掃ふ。南方の佛法如
何、桃紅李白薔薇紫、西來の祖意會すや麼や。 ^② 芒屨・竹杖・布行纏・分身・
散影、塵塵爾、刹刹爾。放光動地、焯焯焉たり、煌々焉たり、休休休。
馬鳴龍樹千論未だ盡さず、錯錯錯。鹿野鶴林一字宣せず、初發心に正覺
を成す、真如の性、變遷を絶す、蚯蚓東海を抹過し、螻蛄坤乾を吞卻す。
然も潛塵なりと雖も、向上的牙爪を見んと要せば、祇夜一篇を聽取せよ。
山中無角の老 ^③ 烏健、高臥安眠三十年、忽ち金毛の活獅子と化す、一聲吼
裂す率陀天。喝一喝す。

大藏開基華屋宗榮尼首座三十三年忌の香語

「這の老婆我れに於て太だ賒なり、多年香瓣袈裟に裹む。香を擧して、
「如かず寶爐に挿向し去つて、芙蓉八月の花に供養せんには。大日本國河州路茨田郡多福山大藏禪寺
住持苾芻尼宗玖、維時享祿二載八月十奠、伏して當寺中興華屋宗榮尼首座三十三白の遠諱の辰に値
ふ。迺ち函丈に就いて梵筵を修飾し、菊光佛、彫刻する者一軀、僧叡筆授の ^④ 經王、印書する者若干、西
湖の蓮式、製する所の ^⑤ 圓通妙懺、修する者一座、^⑥ 三摩耶形、造立する者一基、作善の件々の品目、

- ① 烏健は去勢されたる馬牛、月
心禪師に比するか。
- ② 芙蓉は宗榮尼に比するなり。
- ③ 法華經を經王といふ、一に純
四獨妙王經ともいふ。
- ④ 圓通妙懺は觀音懺法をいふ。
- ⑤ 諸佛菩薩の本誓を現したる形
をいふ、五股杵、蓮華刀、三
股戟等なり、不動明王は劍、
寶生如來は寶珠、藥師如來の
藥壺の如きは是れなり。諸佛菩
薩の出生を觀する時は、種字
より三摩耶形を顯現すとす
耶形より尊形を顯現すとす
を以て、同一尊にても四種法
によりて同じからず。

維那寫して之れを讀む、重ねて擧するに勞せず。香華燈燭茶果珍饈の化儀を虔備し、供佛唄僧の大會を設く。仍つて現前の清淨衆清淨尼を拜屈して、大佛頂光聚悉怛多般怛羅無上神咒を諷演するの次で、手を花園の体上座に借つて、兜樓一瓣、寶爐に熱向して、本師釋迦牟尼善逝、濡首徧吉の左輔右弼、當來補處の慈氏尊、西方無量壽佛、世音勢至二脇士、六道能化の願王佛、當忌の至尊香集世界の能滿、虚空藏菩薩、三世歷代の乃佛乃祖、或は天或は鬼、一切の含識等に供養し奉る。郁郁乎として黄泉に徹するときは、則ち沈水よりも清し、靄靄然として碧落を穿つときは、則ち紅霞よりも濃なり。伏して願はくは覺靈斯の薰力に憑つて、五百由旬の險道を歷すして、一乘の寶所に至り、頓に四倒八苦の火宅を出でて、三種の寶車に駕せんことを。娑婆即ち是れ華藏寂光、豈に伽耶を離れんや、則ち箇。夫れ惟れば華屋宗榮尼首座、榮、閭里に輝き、富、屋家を潤す。逆行順行、鉞鋒世界に入つて、足を翹て佛境魔境、蒲團庵内に坐して結跏す。其の徳也、燕金の價あり、其の名也、趙璧瑕無し。雲は北嶺、梅は南枝、再び曹溪の宗を興して、八十生の大鑑祖を瞞す。朝に西天、暮に東土、重ねて兜率の夢を續いで、第二位の小釋迦と稱す。閣下の紅線を截斷し、頂上の鐵枷を脱卻す。清風起つて、忽

- ①首楞嚴神呪の異名。
- ②兜樓は細香と譯す、香を云ふなり。
- ③地藏菩薩をいふ、地藏を供養するものは一切の願を成就すと、故に地藏願王菩薩といふ。
- ④虚空藏菩薩、梵には阿迦拈揭婆耶といひ、虚空藏と譯す。一切の香集世界にあり、實相の智慧虚空の如く、虚空法界に於て、事として悟り得ずといふことなしと。
- ⑤牛羊鹿の三車をいふ、前に見ゆ。

然忽然。①韓に投じ葉を送る、殘暑去つて、端的端的。箔を捲いて茶を煎す、萬機休罷、生涯を喪盡す。三十年前、凡を轉じて聖と成し、聖を轉じて凡と成す。涅槃を雙樹に證して、五蘊の漏質を示す。三十年後、教を離れて禪無く、禪を離れて教無し。大藏を少林に開いて、四卷の楞伽を傳ふ。解脱の毒海を踏翻し、無明の塵沙を淘汰す。時節因縁廣寒の桂、半輪は圓に、半輪は缺く。當陽直指多福の竹、一莖は曲り一莖は斜なり、黒漫漫地強ひて些些を納る。香を以て指して云く、「老牯牛汝來也、甚麼としてか巴鼻沒き、他の苗稼を犯さず、他の木叉を受けず、左旋右轉、犁を牽き把を拽く。叱。今日臺山の大齋會、香嚴童子無遮と叫ぶ。」

大藏住持明室宗玖尼首座三十三忌 預修供養の語

「刹那三十有三霜、不動尊に始つて菊光に終ふ。老婆心切の處を識らんと欲せば、炎天の梅葉一爐の香。薩訶世界南瞻部洲、大日本國河州路茨田郡大藏禪寺住持明室宗玖尼首座、預め三十三回忌の冥福を修す。仍つて當忌の尊虚空藏菩薩の像を彫刻するもの一軀、圓通妙懺を修禮すること一座、供佛齋僧、善を盡せり矣。天文五年丙申六月初吉、宗休小比丘に命じて、

- ①單のたれぬの、單張をいふ。
- ②正宗記によれば、二祖慧可、得法の後、達磨は楞伽經を彼に付囑したとある、其の文にいふ、「復た慧可に謂ふて曰く、此に楞伽經四卷なるものあり、蓋し如來極めて法要を説す、亦以て世の興に開示悟了せしむべし、今就に汝に付す」と、達磨禪なるものは全く此の經から來たものと言はれて居る程、達磨と密接の關係を有するものである。
- ③月宮殿の桂の木を云ふ、傳説によるなり。
- ④鴻山下の老尼、劉鐵磨を云ふ、即ち宗榮に比するなり。
- ⑤鐵磨牯牛の公案に、「鐵磨、鴻山に至る、山曰く、老牯牛汝

香語を唱へて供養の始終を以てす焉。其の功德不可説、三寶證明、諸天洞鑑。願はくは此の香雲に乗じて、永く本有の故郷に歸らんことを。夫れ惟れば、某名輓頭の手段、鐵作の心腸、預め世壽の限り有ることを知り、願に諸行の無常を了す。菩薩誓言を作す、我れ衆生に代つて地獄に墮せんと。諸佛妄語せず、汝九族をして天堂に生せしむと。五濁曇華、瑞を現じ、二株の楨桂芳を聯ぬ、大愛道を靈山會中に度す。戒乘俱に急なり、尼總持を少林門下に接す、皮髓分張す。八九年の面壁を打して、三百餘の會場を開く。水を借つて花を獻す、昨日の供養今日の供養。沙を淘つて米を去る、佛法商量、世法商量。無著、線路を放開し、普化飯牀を踏倒す。施者受者、瞎漢免れず、齋に因つて贊揚することを。香を挿んで云く、「人は皆炎熱に苦む、吾れは夏日の長きを愛す。」

駿陽藤氏庵原世順良朝庵主四十年忌拈香の語

「無明を父と爲す大いなる哉。乾、檢束して恩に酬ゆ四十年、業債重重士峯の雪、拈じて沈水一爐の烟と成す。茲に駿州の僧宗孚といふ者有り、天文甲辰仲春二十四日、伏して先考庵原氏世順良朝庵主四十年の遠忌に

値ふ。得得として西京の花園に來り、衡梅禪院に就いて齋筵を設く。蓋し、椿府罔極の恩に報すとなり。仍つて六和の衆を集めて、諷經一上の次で、手を休上座に借つて、這の沈願香を焚いて、三世の佛、六代の祖、乃至日域大小の神祇、一切の含識等に供養し奉る。冀ふ所は頓に凡骨を脱して、特地に登仙し去らんことを。夫れ惟れば、庵主、國國の好駿、江湖の横鱸、剃髮染衣、僧にして僧に非ず、俗にして俗に非ず、出群拔萃、聖は聖を續ぎ、賢は賢を續ぐ。將に謂へり、川黨輓語の魯直と。元來、丘徒、短命の顏淵、長歌短歌、唐詩に擬するときは、則ち香象河を渡り、金翅海を劈く。大篆小篆、晋帖を臨するときは、則ち怒猊石を扶り、渴驥泉に奔る。春樹暮雲、千里、繾綣、風花雪

來や、磨曰く、來日台山に大會齊あり、和尚還つて去らんや、山身を放つて臥す、磨便ち出で去るし。

預修。當事預修の佛事流行す、徳川時代には極めて稀なり、足利時代に盛に行はる、將軍義政の如きは、三年、七年、十三年、二十五年、五十年と約一年に渡りて逆修の佛事を修したるものなり。

漢の註に「高祖より、玄孫に至る親族を云ふ」と、即ち一は高祖、二は曾祖、三は祖、四は父、五は己、六は子、七は孫、八は曾孫、九は玄孫なり」と、又一説に父族四、母族三、妻族二とあり。

尼總持は達磨門下の尼僧にして、達磨の肉を得たりと、即ち道の深淺を皮肉骨髓に譬へて之れをいふなり。

如著文喜、仰山慧寂の法嗣なり。

り。

盤山、寶の法嗣、鎮州普化禪師なり、嘗て暮に臨濟院に入り、生菜飯を喫す、臨濟曰く、此の漢大いに一頭の驢に似たり、師即ち驢鳴をなすと。

唐書柳公權傳に「文宗夏日學士と聯句す、帝曰く、人皆炎熱に苦む、我は夏日の永きを愛すと、公權續いで曰く、薰風南より來る、殿閣微涼を生ず」と。

乾は天なり、之れを父とし、坤は地なり、之を母として、衆德備はる、易に乾は元亨利貞と、元は萬物の始め、亨は萬物の長するなり、利は萬物の遂、貞は萬物の成なりと。徳の最も大なるものなり、今無明を以て之れに比す、無明なるが故に、眞如の實現を見る、恰も無明は眞如の父の如きものか、所謂大疑の下に大悟あり。

りと云ふ標の意なるべきか。

父をいふ、又椿堂とも云ふ、莊子の椿樹八千歳の壽といふより、長壽の義より來る。

六和の集は衆僧をいふ、僧伽は和合衆也、其の和して恭敬するに六種あり、一に身相して同じく住す、二に口相して諍ふことなし、三に意相して違ふことなし、四に見相して同じく解す、五に戒相して同じく遵ふ、六に利相して同じく均しうすと、又一に同戒相敬、二に同見相敬、三に同行相敬、四に身慈相敬、五に口慈相敬、六に意慈相敬をいふと、蓋し此等によるもの也。

國國は全國、國中のこらずなると云ふ意。

月、萬古流傳。或時は客路西遊して津を問ふ、老生涯、漫種を得たり。或時は故國東に歸つて室を掩ふ、順現業、夙縁を感ず。乃翁、驕屑に與して、而して本貫を失す、此の郎菴裘を營みて終焉を卜す。加之清淨法身、堅固法身、螺甲崑崙の耳を割く。分段生死、變易生死、龍光斗牛の躡を射る。理窟勃窣、意氣凜然、時其れ至れる哉。烏鉢曇華、偶々一佛の出世に値ふ、道尙ほ存せり矣。燈籠露柱高く、九族生天と叫ぶ。入涅槃兮春迦の後、成正覺兮威音の前、桃李言はず、三會の春を奉陀宮裏に待つ。芭蕉耳無し、五逆の雷を濟水那邊に聞く。力因希、咄咄、妙難思、玄玄玄。端的を識らんと要すや廢や。不可以言宣。香を擧して、「看よ看よ、歸り來つて虚空に坐すれば、夕陽は我が西に在り。」

無礙妙心禪尼の香語

香を擧して、「妙妙妙妙今思量に非ず、心心心也た不可得、此れは是れ蓮生の本來の香、十月花に勝る丹楓の色。夫れ以れば、無礙妙心禪尼、内に慈仁を懷き、外に縁飾少し、忽爾として雙趺を棺槨の側に示す。竺土の仙、日日涅槃、依然として三昧を寶鏡の前に證す。曹家の女、時時に拂拭す、

何の處か風流ならざらん。大地消息を絶す、然も恁麼なりと雖も、向上圓極の龍門に到つて、別に公案一則有り。他の兒孫に代つて恩に報い徳に酬い去らん。閻浮樹下笑呵呵、舜若多神面皮黒し。香を挿んで、「露。」

文苑理總大姉の香語

永正第四三月侍史某、老拙に啓して云く、「當三十日は祖母文苑理總大姉。小祥の辰なり。於戲、吾れに卓錫の地無し、何を以てか老婆心切の恩に報せん乎。」老拙云く、「淨名居士道はず乎、其れ汝に施す者は、福田と名けず、汝を供養する者は、三惡道に墮すと。其の義如何。汝只だ這箇を將つて如法に恩に報じ去れ。縦ひ從來の習氣、五無間の業有るも、盡く解脱の大海と成らん。豈に快ならざらん哉。侍史覺えず點頭一笑す。仍つて祇夜一篇を作つて、以て香語に代ふと云ふ。八十の婆婆養子の縁、鶯語を聽いて啼鶯と作すこと莫れ、此の中限り無き春を傷む意、錦上に花を添ふ又一年。」

松巖大姉一周忌の香語

雲山南源首座、休に告げて云く、「臘旦は吾が先妣松巖大姉小祥忌な

①孔子の徒を云ふ、弟子といふ程の意。

②涅槃經に「香象深河を渡る、地に付いて行く、故に聲なし、之れより徹底の語出づ」と。

③大篆小篆。何れも書體なり、大篆は周の宣王の時、史籀の作る處、小篆は始皇の時、李斯が作る所、小篆は大篆の文を省きて作りしものなり、新井白石の同文通考に詳説あり。

④晋代の王羲之、王獻之等晋代の書聖の書を集めたるもの、其の書に於ける筆力の勇健なるをいふ。

⑤情厚くしてはなれざるをいふ。

⑥羅厝は風の音、劉向の賦に「風羅厝として木を搖かす」と。

⑦本貫は本籍に同じ。

⑧螺甲は螺髪(もとより)をいふ。

⑨龍光は風彩の義に用ふ、高麗傳に「彪馬龍に書を遺して、風向を承服する、從來年あり、故に介者を待たずして大君子の門に謁見し、一度龍光を見て、以て眞心の願を敘せん」とを覽ふ」と。

⑩徳あれば自ら降ある、桃李言散ざれども下自ら道を成すが如く、釋迦佛の後に世に降臨して衆生を濟度し給ふ彌勒菩薩の説法の會座に三ある如く、率陀宮で待つて御座るとたらうと。

⑪齋直に名字を打するなり。

⑫小祥。一週忌なり、禮記喪禮に「三期にして大祥し期にして小祥す」と、皆祭の名なり、凶を去り吉に従ふの意なり。

⑬從來の習はしなり。

⑭子として子たらざるに非ず、母として母たらざるにあらずんばとの意なり。

り。然れども炷くに香無く、奠るに茶無し、何を以てか恩乳に酬いん乎。休咄して云く、「香無く茶無し、已に酬了れり。」音座揖して云く、「供養を謝す。」休云く、「蒼天蒼天。」若し南源、不子の子に非ず、松巖不母の母に非ずんば、慈明の銀盆、睦州の蒲鞵、當つ可からず焉。別に香語有り、一回拈出し去らん。

端的恩に酬ゆ其の難きことか有らん、黄金の義也た鐵心肝、黑崑崙蛾眉を畫き出す、雪裏の芭蕉冬牡丹。

德雲院殿前の刑部通叟普公大禪定門 畫七日の香語

香を舉して、「本來の香本來の人に屬す、鼻孔依然として上唇に挂く、七七光陰底物をか消す、薔薇露重し一枝の春。薩訶世界南瞻部洲、大日本國山城州平城居住の奉三寶弟子孝男士佐法師、大永三年孟夏十有五日、家門伏して先考德雲院殿前の刑部通叟普公大禪定門、畫七の辰に値ふ。每忌私第に就いて道場を莊嚴し、緇倫を延請す。晝に經し、夜に禪し、夕に燈し、晨に香し、諸般の白業を勤修す。白業とは何ぞや、大乘妙典、頓寫、漸寫、印寫、各若干部、水陸妙供、兩會圓通、懺儀二座。夫れ法華は、當

慈明楚圓師、母賢にして慈明を助めて出家せしむと、遂に汾陽善昭に法嗣す、師室中に劍を挿んで、草鞋一對水一盆を以て劍邊に置き、入室を見る毎に曰く、見よ見よと、劍邊に至りて擬議するものあれば、師曰く、險、喪身失身し了れりといつて、便ち喝して出すと。

睦州道慶の蒲鞋、前に見ゆ。

時十二月一日なれば時候に就いて云ふなり。

七七四十九日のことなればなり。

緇倫は僧侶をいふ。

水陸會なり、施餓鬼と略同じ、諸仙は食を流水にいたし、鬼は食を淨地にいたすと、これによるなり。

梁武帝嘗て一神僧を夢む、告げて曰く、六道四生苦を受くると無量、何ぞ水陸會をな

體蓮華有り、譬喻蓮華有り、異にして不異、均にして不均。此の方に在り、則ち纒に是れ七軸。西方に在るときは、則ち布くこと一由旬。長者門外に三種の車を駕し、信樂衣裏に無價の珍を繫ぐ。寶處近に在り、維れ德隣有り。夫れ 水陸勝會は過去青提、岷に濫觴す。四倒八苦の業火を滅して、三有九界の沈淪を救ふ。梁武金山の會を設けて、以て塗炭の民を慰む。今日の施主も亦復是の如し。上先考岡極の恩義に報じ、下群生無量の苦辛を資く。其餘波は普天の下、率土の濱に及ぶ。夫れ圓通懺儀は、慈雲懺主の修撰する所なり。抑 觀音大士の應化は、刹として臻らすといふこと無し。小白花 大白花、亂墜紛纒たり。柳枝を借つて水を獻じ、草座を鋪いて茵と爲す。弘誓の海、好し 津を問ふに。特に當忌の尊醫王善逝の聖像一軀を彫刻す。夫れ藥師は乃ち是れ東方滿月世界の教主、廣嚴城中の醫王なり。昔十二の大願を發して、不死還年の妙藥を示す。是の故に寶號一たび耳に經るときは、則ち衆病悉く除き、身心安樂なり。作麼生か是れ安樂の處、請ふ身心を放下して看よ。佛病の蘇す可き無く、祖病の療す可き無し。更に一粒の還丹を假らす、凡を轉じて聖と成し、聖を轉じて凡と成す。千年の桃核、甚の舊時の仁をか討ねん。預め今月今日に於て、散筵、

して群靈を普濟せざる、諸功德の内最も第一なりと、依つて阿難、而然鬼王に遇ひ平等斛食を建立するの意を詳かにするに及んで、儀文を製し遂に潤の金山寺に於て修設し、帝躬ら地席に臨み、祐律師に詔して文を宣せしむとあり。

觀音の圖に、水瓶に楊柳の枝を挿むものを楊柳觀音といふ、これ楊柳の春風になびき應ぜざるものなきが如く、その衆生の願樂する所に應同して化益する意にとるなり。

津は渡場なり。

古人が妙藥と傳ふる回生起死の丹藥をいふ。

伊蒲の淨膳を營辨して、以て采蘋に擬す。仍つて現前の苾芻衆に命じて、同音に白傘蓋無上神呪を諷演するの次で、手を龍安の小比丘宗休に借つて、此の爛枯薪を焚いて、三世十方の薄伽世尊、當忌の醫王善逝、現座道場の無量壽佛、微塵刹土の諸の賢聖等に供養す。萃むる所の殊勳、神儀の爲に、報土を資嚴し奉る。願はくは此の「開薰力に憑つて、頓に解脫の毒海を出で、速に無上の法輪に乗せんことを。共しく惟れば、大禪定門、籌を帷幄に運し、位を縉紳に列ぬ。晉帖を學んで虻蚓を縈らし、和歌を詠じて鬼神を感す。弟を封じて桐を剪る。冕旒を清和天子に拜す、姓を賜うて采を食む。箕裘を滿仲朝臣に續ぐ、源深く流遠し、其の命維れ新なり。徳雲、別峰に相見す、雜華の春を驅つて遊轡を試む。達磨此土に來らず、普通の雪に和して假銀を賣る。鐵笛千古の恨み、燈花十年の親み、この野狐精を喚醒し、楊柳綠暗し、他の村獺猿に參得して、黃梅月新なり。恁麼不恁麼、全真全俗、不恁麼恁麼、全俗全真、飛花二十五の圓通を開くときは、則ち直に香嚴の本寂を印す。餘薰八百の功德を證するときは、則ち忽ち金仙の前因を了す。正知見力、塵に入り細に入る、大丈夫の心、縑ます磷かす、這裏に到つて、什麼の自受用・他受

② 報地に同じ、善業を修せし因によつて生ずる果報の土地、寂光淨土のこと。
③ 香の薰する力にてとの意なり。
④ 書道の妙をいふ。
⑤ 晉世家に、「成王叔虞と戯る、桐葉を削りて珪と爲し、以て叔虞に與へて曰く、之れを以て若を封せんと、史佚、日を擇んで之れを立てんことを請ふ、成王曰く、吾れ之れと戯るのみと、史佚曰く、天子に戲言なしといふ、遂に叔虞を唐に封す」と。柳子厚の桐葉弟を封するの辭あり、參照すべし。同氏弟に對し封を與ふることあるが。

⑥ 冠の飾なり、源氏は清和天皇より出づる故にしか云ふ。
⑦ 朱元晦が鐵笛亭の序に、「胡朋中、嘗て武夷山の隱者劉兼道と遊ぶ、劉能く鐵笛を吹く、雲を裂き石を穿つの聲あり」と。又兀庵の拈香法語に、「倒に鐵笛を拈じて逆風に吹く」の語あり、又玄樞の鐵笛倒吹序に曰く、「今我れ古人の公案を庸つて鐵笛と爲す、乃至所謂倒吹とは、曲もと無韻を以てするときは、則ち弄所も亦常に異なるを表す」と。以て略其の意を知るべし。

用とか説かん、什麼の理法身・智法身をか論せん。淨裸裸地、寸土無し、清寥寥の地、纖塵を絶す。然も與麼なりと雖も、後昆を覆蔭する底の一句、即今如何が指陳せん。草木山河瑞氣を増す、虚空産出す。玉麒麟。東漸寺殿光翁巨公大禪定門七年忌拈香の語
香を擧げて、「這の七梅花、太極に始つて無根を長ず、之れを心に得れば、則ち忽ち梅檀樹と作り、之れを旨に失すれば、則ち便ち蕤藜園と變す。前釋迦前ならず、日日成道、後彌勒後ならず、處處尊と稱す。龜毛葉を抽んで、三千世界に布き、兎角花を開いて二十四番に魁たり。花光老盡けども成らず、孤芳皎潔、林逋仙吟未了、暗香黃昏、昨夜三更、邯鄲道上の夢に和卻す。今朝九日、羅浮山中の村に拾ひ得たり。一と去卻し七と拈得す、以て返魂と作す。我れ佛祖に供養せんと欲すれば、佛祖我れと生冤、若かす寶爐下に挿向して、光翁大禪定門に供養せんには、且く道へ、寶爐下、是れ什麼ぞ、元來一箇の鐵崑崙。鐵崑崙跨跳して、三十三天に上つて、帝釋の鼻孔に築著す。山僧打つこと一棒すれば、百雜碎、雨盆を傾く。薩訶世界南瞻部洲日東城州平安城居住の大功德主源朝臣虎増、明

年甲申春王正月 初九、伏して先考東漸寺殿、贈從四位下前の房州太守光翁
巨公大禪定門、七周忌の辰に値ふ。預め今茲大永三天臘月今日に於て、佛
に供し僧に齋して菓茗を陳ね、終を慎み遠を追ふて、蘋蘩を羞む。庚に
先つこと七日、道場を本寺に設けて、晨夕香莊嚴・華莊嚴、晝夜經三昧・禪
三昧、其の志敦し矣。中に就いて當忌東方無動佛の尊像を彫刻するもの一
軀、薩芸妙芬陀利頓漸印讀如干、茲に總管府君右京兆、特に丹悃を抽んで、
本門の壽量親書する者一品、一品の中に權大乘・實大乘を該ぬ、淺深測る
こと莫し。一毫端に本壽量・跡壽量を現す。短長論じ難し、多少支を談じ
妙を説く。十分徳に酬い恩に報ゆ。圓通懺儀一座、^①水陸妙供一會、諸經
の來由、諸佛の事迹、枚擧するに遑あらず。住持事繁し、今散筵に臨んで、
六和の苾芻衆を鳩めて、萬行楞嚴咒を誦演するの次で、手を龍安の休上
座に借りて、這の小兒樓を焚いて三世の覺皇、十方の薩埵、西天東土の列祖
師、天界世界の諸神仙、日域大小の神祇、^②冥府十殿王等に供養し奉る。
伏して奠はくは、檀越這の聞薰力に憑つて、直に毘盧頂上を踏んで、行い
て他の脚跟に隨ふこと莫からんことを。共しく惟れば、大禪定門、威雄霜

瑠璃中、白と曰はすや、混すれども縹緗す」と。蓮の淤泥に染まぬ如きをいふなり。
① 善業功德によりて後昆の英俊を見るをいふ、又名を麟閣に留めて譽を後昆に流へ、一段の精彩を添ふるものか。又杜甫の徐卿二子を見る歌に「並びに之れ天上の麒麟兒」と。
② 龜毛兔角は假有、非有に比するなり。
③ 西湖の處士林和靖をいふ。
④ 盧生が邯鄲道上に生涯の經歷を夢みたること、人生夢の如きをいふ。
⑤ 錦字箋に、隋の趙師雄羅浮に遷る、一日天寒し、日暮松林旁舍の邊に於て美人の淡粧素服出でて迎ふるを見る、師雄共に語言す、極めて清麗にして芳香人を襲ふ、よりに共に酒家を叩きて與に飲む、師雄醉臥し、覺むるに及び、起ち

冷しく、談笑春温なり。聖は聖を續ぎ、賢は賢を續ぐ。四位に北闕に拜す、
兄は兄たり、弟は弟たり。長老を東軒に接す、梧桐名上鸞翔り鳳舞ふ。藕
絲窠裏鯉化し鵬驚る。胸中數萬の甲兵、^①熙寧・元豐の餘黨を掃除し、門
下三千の賓客は、文徳・清和の末孫を扶起す。蓋し王侯將相種無しと雖も、
江河淮濟の源有るが如し、畫堂晝閑なり。雲を愛し僧を愛して、青山に榻
を下す、朱欄日に轉す。花に酌み鳥に酌んで、^②石塹を樽と爲す。翅だ法社
に金湯たるのみにあらず、矧んや復た諫垣に黼黻たるをや。其の諱に觸る
る者は、^③王老庭前、天地同根の陸大夫、^④空華何ぞ把捉に勞せん。其の機
を具する者は、馬祖庵畔、萬法不侶の龐居士、江水豈に平吞するに足らん
や。將に謂へり、小睡語大睡語と、已に是れ禪狀元、儒狀元、玉鏡金鞭、
臨濟の大龍に跨り得ず。皮履直覆、投子の俊鷹を夢みて、以て原ぬ。君臣
道合す、宇宙名喧し。或時は知見の戸牖を開いて、知見香を薫じて、同參
夜雨の句を記す。或時は解脫國土に入つて、解脫服を著けて、杜多風露の
殘を甘んず。進退前佛の模範を學び、殺活外道の赤幡を奪ふ。曉鶯を武
侯祠堂に聽いて、騎を漢巴に出し、長く八陣の磧を留む。群鶴を房公の

て見れば、大梅樹下にあり、翠羽啼啣す、相顧みれば月落ちて參横す、惆悵してやます」と。
① 水草にして其の清きを神に薦むるなり。
② 水陸會をいふ。
③ 冥府十王とは秦廣王、初江王、宗帝王、五官王、琰魔王、變成王、泰山王、平等王、都市王、轉輪王これなり、而して死して冥府に赴くものは、七日毎にこれ等各王の下に至りて、其の聽断を經となす、十王經は十王のことを説ける經なり、世俗に此の經により十王を祭供すれども、この經は先哲の例じて僞妄とするところにして、藏經中にも見えず、想ふにこれ勸善懲惡の方便に、後世の僞作に用でしものなるべし。
④ 熙寧元豐は支那宋神宗の年號

池館に詠じて、君を堯舜に致して、再び大雅の轅を回す。喜氣雪消し氷解く、號令電卷き雷奔る。何物か恁麼に來る。雲は嶺頭に在つて間不徹、何物か恁麼に去る。月潭底を穿つて水に痕無し、鑊湯爐炭、一吹に吹滅し、銀山鐵壁、一踢に踢翻す。洒洒地落落地、窠臼を離れ籠樊を絶す。者箇の時節、甚の香嚴の本寂をか印せん。甚の閻羅の平反をか管せん。然も與廢なりと雖も、來年更に新條の在る有り、如何が後昆を覆蔭し去らん。諸の仁者、試みに山僧が重説偈言を聴け。吹毛動せず乾坤を定む、生氣凜然として今尚ほ存す、眞照無邊大人の相、扶桑樹上朝暾を挂く。喝一喝す。

德雲院殿小祥忌の香語

三月正當春一回、一回花落ちて又花開く、鼻孔指南の旨を知らんと欲せば、門前の下馬臺を拈卻せよ。薩訶世界南瞻部洲、豐華原山城州平安城居住の大功德主源五郎、大永四年三月二十六日、家門伏して先考德雲院殿前の刑部通叟普公大禪定門、小祥忌の辰に値ふ。仍つて供佛齋僧の舊例を攀ち、期に先つて私第に就いて梵筵を莊嚴す。一香一燈、晨夕を廢せず。誰れ誦雜禪、晝夜を舍てす。善因を勤修し、冥福を資助するもの七日、

石のくぼみなり、莊子に「蓋水を埒堂に覆せば、芥之れが船となる」と。

① 王老は南泉普願禪師をいふ、姓王氏なるが故に云ふのみ、陸大夫は陸亘大夫のこと、字は景山、唐の至徳元年宣州觀察使となり、後に御史大夫となる、夙に坐禪を好み、初め南泉に謁して即ち問ふ、古人瓶中に一鵝を養ふ、鵝漸く長じて、瓶を出すこと能はず、鵝を損することを得ず、和尚作麼生か出さんと、泉、大夫と召す、陸、應語す、泉曰く、出せりと、大夫茲に於て省あり。

② 諸法實體の非有、假有、假有なる道理の譬、空に現する花鬘の如しとの意。

③ 諸葛亮、字を孔明、昭烈帝に仕へ、丞相となり、武備後に

特に當忌の尊、無邊光佛の慈容を彫刻するもの一軀、水陸無遮の勝會施設するもの一場。今散忌に當つて、淨饗を營辨し、緇侶を延請して、首楞嚴神咒を誦演するの次で、龍安の小比丘宗休に命じて、這の一瓣香を炷いて、本師釋迦牟尼善逝、濡首徧吉の二菩薩、現座道場の無量壽佛、觀音勢至の二脇士、三世十方の諸大薩埵、西來東土の諸大祖師、天仙地神日域の諸神、冥府の鬼主鬼官、三有九界の群生等に供養し奉る。伏して冀はくは、神儀這の知見方に憑つて、無數劫來生死の淪溺を脱し、四十九重摩尼殿駭に昇らんことを。桃花色の民、傳翁の慈氏と號するに同じと雖も、華嚴法界、何ぞ德雲の善財を接するに異ならん。共しく惟れば、大禪定門、荆岫の美璞、鄧林の奇材、孝を北堂の、諫草に致し、興を東閣の官梅に動す。圮上に書を傳へて、黃石に一隻の履を進む。江南に策を定めて、普第に兩三杯を付す、典刑存せり矣、晚節難い哉。兵衛畫戟、燕寢清香、朱簾暮に捲く。歌臺の、暖響、舞殿の冷袖、急管畫催す。紅顏昨日、丹心寒灰、道根を心地の初に托す。蘇端明、香山居士を慕ふ、天花を丈室の内に散す。維摩詰、金粟如來と稱す。千載、英靈の氣を回し、四海、王佐の才を仰ぐ。

封せらる、忠武と諡す、即ち孔明を祠りし堂をいふ。

④ 孔明の作りし陣形の名、三國志蜀志諸葛亮傳に「亮思に長ず、損益運籌、木牛流馬、皆其の意に出づ、兵法を推演して八陣圖を作る、皆其の要を得」と、また水經注に「諸葛亮作る所の八陣圖、東故壘に跨り皆細石を連れて之れを作る、壘より西去る石を聚むる八行、行相去る二丈、四つて八陣といふ。」

⑤ かくの如くと同じ。

⑥ 千文を動かさずして天下を定むとなり。

⑦ 彌勒菩薩の居所兜率天上の内院をいふ、内院には中央に彌勒菩薩の大摩尼寶殿、東西南北の四方に各十二天宮あり、合して四十九となる。

⑧ 荆山下の璞、所謂趙氏連城の玉なり。

日午に更を打す、増上慢人、鷲嶺に席を退く。上巳の餘景、積行の菩薩、龍門に頭を暈す。甚の已説、今説、當説をか認めん、甚の火災、水災、風災をか管せん。聖に在つては聖に同じ、凡に在つては凡に同す。誰が家にか明月無からん。佛に逢ふては佛を殺し、祖に逢ふては祖を殺す。何の處にか塵埃有らん、休休休。乾坤窄く、星辰黒し、莫莫莫。虚空消し鐵山摧く。與廢の時節、金剛王氣凛々たり、昆侖兒笑哈哈たり。此れは是れ通叟三十八年、横拈倒用底の問事、山僧別に一道の咒有り、後胤を保祐し、聖胎を長養し去らん。哈蘇嚕哈蘇嚕。兎角龜毛眼裏に裁う。

珠溪宗輝禪定尼三十三年忌の香語

一片の孝心心字の香、消し來る三十有餘霜、分明に呈露す孃生の面、秋日花開く紅海棠。大日本國山城州平安城、居住の奉三寶弟子孝男源の政眞、大永五年九月二十有三日、家門伏して先妣某三十三白遠忌の辰に値ふ。期に先つて第に就いて梵筵を莊嚴す。一華一香、供佛齋僧、七晝七夜、誦經習定、諸般の良因、之を修し之を勤む。仍つて工に命じて、當忌の尊虚空藏の慈容一軀を彫刻し、七軸の蓮經、頓寫漸寫印寫若干部、圓通懺儀、水陸妙供各一會。今散忌に當つて、淨饗を營辨し、緇郎を拜屈して、白傘蓋神咒を諷演するの次で、手を龍安の小比丘宗休に借つて、此の小兜樓を焚いて、本

- ① わすれ草、又宜男草ともいふ、婦人此の花を帯ぶれば男子を生むと。
- ② 張真曾て圯上に履を老者に遺む、よつて書一巻を授けらる、即ち太公の兵法なり、真之れによりて遂に高祖を助けて天下を定む。
- ③ 普賢は諸第に同じ、世統をいふ、系譜の義なり。
- ④ 安寝する義なり。
- ⑤ 暖響冷補、冷暖只だ相對するのみ。

師釋迦牟尼善逝、當忌の虚空藏菩薩、當來補處慈氏尊、西方無量壽佛、彌首徧吉の二大士、觀音持地の兩薩埵、三世十方の諸の賢聖、西天東土の列祖師、天衆地神冥主冥官、一切の含識等に供養し奉る。伏して希はくは、淑靈、這の薰力に憑つて、速かに覺場に登らんことを。夫れ惟れば、珠溪宗輝禪定尼、雲路の翡翠、丹山の鳳凰、機を斷つて曾て軻親を學ぶ。善隣維れ寶、髮を截つて、或は陶母に効ふ。夙債償ひ難し、仁澤を林野に施し、生涯を洞房に寄す。遠を追ひ終を慎む、花を左にし竹を右にす。昭穆廟を列ぬ、群を出で萃を抜く。東蘭西蕙、兄弟芳を聯ね、金屋粧成つて、門闌喜色、畫屏影冷しく、銀燭秋光、室に入つて衣を受く。秦國大洋嶼を慕ふ、空を關し夢を鎖す。普賢女、馬郎に約す、微塵を破つて經卷を出し、四大を假つて禪定と作す。加之、其の密用を論するときは、則ち法身五分、竺土の仙の香の譜を説くに依倚たり。其の家系を按ずるときは、則ち正位一色、曹山祖の商量を打するに彷彿たり。精神掬す可し、文彩已に彰る。心即ち是れ佛、佛即ち是れ心、燒葉爐中に宿火無し。寂にして常照、照にして常寂、折枝鏡裏に新粧を憶ふ、端的恩に報じ徳に

- ① 孟母三遷の故事なり。
- ② 晋書に、陶侃家甚だ貧なり、母湛氏、毎に紡績して之れに給す、侃をして交を己より勝される者に結ばしむ、醜陽の孝廉范滂來りて宿す、適々大いに雪ふる、湛氏自ら臥す所に新薦を撤して、以て其の馬に給し、又其の髮を截ち隣人に賣り、肴饌を買ひて以て供す、遠聞きて歎じて曰く、此の母に非ずんば、此の兒を生むこと能はずと、侃遂に功名を以て高く顯はる。
- ③ 宗廟の制は、中央に太祖の廟ありて、左に二代目、右に三代目、また左四代目、右に五代目と、此の如くいりちがへて左を昭といひ右を穆といふ、又祭る人の座位にも昭穆の序ありて、此の次序に隨ひて坐するを禮とするなり。

報す。畢竟存に非ず亡に非ず。是の故に三十三年前、逆順縦横、天堂を變じて地獄と作すも也た得たり。三十三年後、隱顯自在地獄を變じて天堂と作すも妨げず。事事無礙、法界刹利、本有の故郷、金雞、鐵卵を啄破し、石虎、木羊を吞卻す。正與慶の時、淑靈、光耀土より起つて、八吉祥を現じ、甚深般若を唱へて曰く、「昔護國の珠有り、仁王と名く、是れ乃も後昆を覆蔭する底の要訣、即今如何が承當し去らん。」大唐國裏に鼓を打てば、新羅の人舞袖長し。

見室妙性禪定尼二七日忌の拈香

「金香爐下の鐵崑崙、擊碎し將ち來つて直に恩に報す、指點す轉身の那一路、淡烟翠竹江村を繞る。薩訶世界南瞻部洲、大日本國河州茨田郡中振郷、今月二十有九日、伏して見室妙性禪定尼二七日忌の辰に値ふ。吾が徒園也來つて老拙に告げて云く、「見室平生博愛の仁有つて、某に於て一子の如し、某也た見室に於て阿母の如し。厥の德報じ難く、厥の恩忘れ難し。故を以て菲薄の奠を設く」と。仍つて供佛齋僧の次で、手を老拙に借つて一片の妙兜樓を焚いて、以て供養を伸ぶ。伏して希はくは、禪尼、這箇の薰力

積古略に馬郎婦、元和年中陝右を化せんとす、美人となりて其の所に示現す、人其の姿貌風韻を見て配たらんことを欲す、女曰く、我れ能く一夕に普門品を誦するあらんには、之れに歸がん、黎明廿聖微誦す、女曰く、一身豈に衆に配せんや、金剛經を誦すべし、且に至つて誦者十數人女更に授くるに法華七卷を以てし、三日夜を約す、期に至つて馬氏の子のみ能く誦す、女、禮を具して如を成さしむ、馬氏之れを迎ふ、女曰く、適々體中不安、少焉あつて客未だ散ぜざるに、女已に死爛して葬る、後老僧あり來つて女の所由を問ふ、馬氏相引いて葬所に至る、僧錫を以て之を掘く、尸化して唯だ黄金骨のみ存せり、僧衆に謂つて曰く、此れは聖者汝等の障重

に憑つて、頓に九十億劫の生死を超えて、速かに無上正等の覺園に到らんことを。夫れ惟れば、見室妙性禪定尼、標格雪潔く、襟懷春温なり。藉藉たる家聲、梅は是れ兄、馨は是れ弟。昭昭たる淑德、蘭の子、蕙の孫。項上三百の鐵枷、人天の果福を脱卻す。脚下一條の紅線、佛祖の命根を截斷す。赤洒洒、窠臼没し、淨裸裸、籠樊を絶す。這裏に到つて、全く彌陀の念す可き無く、更に能仁の尊と稱す可き無し。然も恁麼地なりと雖も、如上許多の陳葛藤は、猶ほ是れ生死岸頭の事、別に向上圓極の法門あり、如何が後昆を覆蔭し去らん。」香を挿んで、「暮樓の鐘鼓月黄昏。」喝一喝す。

清泰院殿常春宗榮大禪定尼一周忌の香語

香を舉して、「這の常春木、朝菌の晦朔を知らず、何ぞ著草の陰陽に屬せん。靈鳥巖前に華さくときは、則ち邪氣妖氛、諸聖の鼻孔を穿破す。野狐窟裏に根するときは、則ち毒芽惡孽、列祖の肝腸を爛殺す。螺甲沈水よりも薰しく、甚ぞ烏頭砒霜に似かん。枝を得るものは枝を貴ぶ。多羅八萬藏、錯つて月を標す。葉を得る者は葉を貴ぶ。好堅四十圍、猶ほ霜を

を憫むが故に、方便を垂れて化するのみ、宜しく善く思ふ思ひ、苦海に墮するを免るべしと、語り已りて空に飛び去る、此れより陝西佛を信する者多しと、此の因縁によるなり。
⑤ 涅槃の岸にいたるなどに同じ。
⑥ 山響をいふ、和名とちしば、高さ數尺、葉密にして枝肥え、冬凋ます、花白くして香ばし、故に梅と並べ稱するなり。
⑦ いづれも「かこなり、淨世種の繫縛をいふ。
⑧ 能仁は即ち釋迦牟尼佛をいふ。
⑨ 樺花、あまがほをいふ。
⑩ 著草、蒿の一種、古は之れを以て五十本の占具を作れり。
⑪ 道術者の用ひる毒藥の名なり。

帶ぶ。葱葱鬱鬱、久久昌昌、手に信せて拈出して、聊か小祥に酬ゆ。看よ、凝つて岐陽九月の微雪と爲り、散じて濟北一株の蔭涼と作る。咄。香嚴童子來也、淑靈に對して重ねて祕章を唱ふるを聽け。女中の堯舜、萱堂を仰ぐ、寵雨恩烟解脫香、珠簾を捲起して高く眼を著けよ。青山改めず舊時の粧。大日本國云云。大功徳主。三寶受戒の弟子源の朝臣六郎、

⑤ 堯の殿堂、土塔三段、葦葉剪らず、采椽新らず、庭前に蕤英を生ず、十五日以前は一日一葉を生じ、十五日以後は日に一葉を落とすと、只だ殿堂の質素なるをいふのみ。
⑥ 佛法僧を三寶といふ。

享祿二年太歳己丑九月二十九日は、先妣清泰院殿常春宗榮大禪定尼小祥忌の辰なり。預め般舟三昧道場に就いて、十員の緇侶を集めて、諸般の白業を修するもの七晝夜、大勢至菩薩の尊像一軀を彫造し、醍醐味の經王、頓漸印讀若干部、圓通妙懺一座、水陸淨供一會、茲に一件の奇事有り。大孝男源府君、經王二十八品の内より、提婆の一品を抽んで、手づから謄寫す。紅心心裏の紅心、一乘無價の珠、繋けて祕在す。好手中の好手、五百塵點の墨、磨するも何ぞ消亡せん。妙義不可説、功徳不可量、諸仁未だ信せずんば阿嬢に問取せよ。自餘の善利忌佛の事迹、眞詮秘呪の功驗、縷陳するに遑あらず。他の央庠底の座主に還す。今日正當散忌、虔んで須彌の香華、海水の燈燭、鬼搗穀佛跳牆を備へて、以て廣大の供養を伸ぶ。仍つて赤鬚白足、圓頂方袍の輩を延請して、異口同音に大佛頂光聚心佛所説無上神呪を諷演するの次で、妙心の小比丘宗休に命じて、此の畢力迦を焚いて、三世歴代の乃佛乃祖、上界下地、或は天或は鬼、一切の含識等に供養し奉る。伏して願はくは、淑靈這箇の薰力

に憑つて、慧海の慈航を借らず、諸種の苦類を提誘して、同じく虚空の場に登らんことを。共しく惟れば、清泰院殿常春宗榮大禪定尼、天曆の末裔、具平の餘芳、芳聲美譽、坤軸式で載す、淡粧抹、湖鏡藏さず。祠院を創めて清泰と號す。譬へば、韋提希の七重の寶樹を觀するが如し。温泉を賜ふて膏沐と爲す、恰も太眞妃が一門の諸楊を起すに似たり。龍舒居士、樂邦文類に記す。龜臺の金母、家運の延長を祝す、山河始終、桐葉を剪つて小弟を封す。風流蘊藉、蓮花を愛して、六郎と稱す。蓋し源深きときは則ち流遠し、矧んや時至つて理彰るゝをや。今碧落の天に歸つて薬を搗く、嫦娥を后羿に失す。昔赤松の地に遊んで梅を詠す、婦人を張良に比す、群臣策を獻じて勝つことを千里に決し、二豎鬼を作して化を他方に戦む。長夜漫漫、蕙帳の猿鶴、且つ驚き且つ怨む。涼颯颯、金籠の蟋蟀、悲むに堪へ傷むに堪へたり。政徳國を治む、任姒に同じと雖も、壽夭天に在り、彭殤を異にせず。其の來るや、線路を放開し、其の去るや、封疆を把定す。難難。佛界を出で、魔界に入ることは難し。摩登伽の慶喜を誰かすを冷笑す。易々。女相を變じて男相と成ることは易し、妙徳尊の勝光を度するを熱瞞す。盤根錯節に逢はず

⑦ 第六十二代村上天皇の年號、即ち村上天皇を申し奉る。
⑧ 韋提希、又は毘提希、或提希とも記し、或は單に提希とも記す、思惟と譯す、摩訶陀國、頻婆娑羅王の后妃にして、阿闍世王の母なり、后妃太子の爲に牢獄に幽閉せられ、深く厭世の念を起し法を求む、釋尊乃ち靈山の會座を設けて、王宮に降臨し、韋提の爲に説法したまへり、觀無量壽經即ち之れなり、委しくは本經に出づ。
⑨ 舊唐書楊再思傳に、楊昌宗姿貌を以て寵倖せらる、再思又之れに諷ひて曰く、人は言ふ、六郎の面蕤華に似たりと、再思以爲らく、蓮華、六郎

んば、争か鈍鐵の利鋒を辨せん。百億分身、高蒲、釋師子を現す。五逆消滅、芭蕉、香象王に觸る。箇箇圓成、實性、塵塵本有の家郷。然も此の如くなりと雖も、後昆を保祐する那一句、只麼に擧揚し去らん。臥龍機かに奮迅すれば、丹鳳も亦翱翔す。」

逆卷前の雲州の太守春谷永源禪定門盡七日忌の香語

「吾に本來の香一瓣有り、無陰陽の地無根を長す、烟に非ず火に非ず又木に非ず、此の深心を將つて佛恩を報す。大日本國河内州茨田郡居住の奉三寶戒の弟子孝男源の朝臣宗綱、天文五年六月初二日、伏して先考前の雲州の太守春谷永源禪定門盡七日忌の辰に値ふ。今月今日、預め盛和精舎に就いて梵筵を莊嚴し、伊蒲の淨饗を營辨して、佛に供し僧に齋す。蓋し椿府罔極の恩に酬ゆとなり。當忌醫王善逝の尊像、彫刻する者一軀、七軸の妙蓮、漸寫する者二部、孝男宗綱、自書する所の本門の壽量一品、水陸妙供、施設する者一會、三摩耶形造立するもの一基、仍つて六和の苾芻衆苾芻尼を集めて、異口同音に白傘蓋神咒を誦演するの次で、雲雲の小比丘宗休に命じて、斯の小兜樓を焚いて、以て三世十方の諸佛、西天東土

に似たり、六郎、蓮華に似たるに非ずと。」
③淮南子に「羿不死の薬を西王母に請ふ、嫦娥竊みて月に走る」と、註に「嫦娥は羿の妻なり」とあり。

④張良狀觀婦人に似たりしといふ、故にしかいふか。沛公に事へて其の壽略を以て天下を定め留侯に封ぜらる、次いで世事を棄て赤松子に従ひて遊ぶと。

⑤彭は彭祖、先きに見ゆ、八百歳の壽を保つと、病は未成人にして死するをいふ、禮記喪服傳に「年十六より十九に至る迄に死したるを長壽となし、十二より十五に至る迄に死したるを中壽となし、八歳より十一歳に至る迄死したるを下壽となし、七歳以下を無服の痛となし、生れて未だ三月ならざるは痛となさす。」

の列祖、天衆地神、冥主冥官、三有九界の苦類、依草附木の精魂等に供養し奉る。伏して願はくは、尊靈這箇の薰力に憑つて、頓に生死の大海を超え、永く自性の本源に歸せんことを。共しく惟れば、某名、威烈霜冷じく、笑談春温なり。之れを姚黄魏紫に譬ふれば、則ち且つ富み且つ貴し、之れを召棠萊柏に仰げば、則ち且つ存するが如し。阿育の塔を建て給孤の園を開く、積善の餘慶、必ず兒孫に及ぶ。①名翼空に搏つ九萬里の風、北溟鯢化す、夢魂曉に驚く、五十三年、南柯蟻屯す。久しく青苗の新法に苦む、毎に稼穡の艱難を憂ふ。文王は仁義の釋迦、卑小丈六の相を現す。維摩は再生の金粟、眞俗不二の門に入る。瞬息星移り斗轉す、默處電卷き雷奔る。淨裸裸、承當を絶す、佛界魔宮を合して生擒活捉す。赤洒酒、窠臼没し、鶴樓鵝洲に和して、拳倒踢躑す。直に香嚴の本寂を印す、豈に瑣羅の平反を待たんや。故家の喬木後昆を覆蔭す。「香を擧して、看よ看よ、何ぞ料らん平生鷹を臂にする手、黄金鑄出す鐵崑崙。」

芳室妙薰禪定尼七周忌の香語

「千佛の母と稱す老摩耶、未だ恩に酬ゆるに足らず前釋迦、黄泉に薰徹

①阿羅尊者をいふ、佛成道の日に至る、故にしか名付くと。
②法華經中如来壽量品をいふ。
③并に牡丹の異名、牡丹譜に「鐵思公曰く、人牡丹を謂ふて花王となす、今の姚黄は眞に花王たり、魏紫は後の美」と。
④召棠は召公の甘棠、萊柏は孔明廟前の柏をいふか。
⑤祇園精舎のこと、この精舎は須達長者、祇陀太子と共に建立する所のものなり。
⑥大翼をいふ。
⑦鯢は大魚、又は小魚と。莊子に「北溟に魚あり、其の名を鯢と爲す、鯢の大なること其の幾千里なるかを知らず、化して鳥となる、其の名を鵬と爲す」と。
⑧宋の王安石の作りし新法の一なり、即ち挿苗の時期に政府より資金を百姓に貸し、秋熟に至りて資金に二割若しくは

し碧落を穿つ、一爐の沈水七梅花。大日本國河州路茨田郡高瀬村富春院守
塔宗仙、天文六年龍丁酉に集る三月十二日、伏して先妣芳室妙薰禪定尼七
周忌の辰に値ふ。靈雲禪院に就いて、虔んで香華燈燭茶菓珍味を備へ、伊
蒲の淨鱒を營辨して、以て佛に供し僧に齋するの次で、小比丘宗休に命じ
て、斯の爛枯柴を焚いて、三世十方の諸佛、西竺東震の列祖、鬼畜人天、
一切の群迷等に供養し奉る。伏して願はくは、淑靈這箇の妙薰力に憑つて、
諸趣の苦類を提誘して、俱に眞如の海涯に到らんことを。夫れ惟れば、
某名、蟠桃實を結び、紫蘭芽を苗む。蘇内翰の間富貴を感ずと雖も、
靈照女の無賴植を奈ともせず。群機を超越す、佛界魔界衆生界、諸子を誘引
す。羊車鹿車大牛車、脚下紅線を斷じ、項上鐵枷を脱す。休休休、修多
羅の教は月を標す、咄々々、金剛の眼睛は沙を撒す。薰風徐ろに來る、珠簾
半は捲いて瑤璃滑なり。紅雨亂れ落つ、宮扇始めて開いて翡翠斜なり。法に
二法無し、是れ正是れ邪、香嚴の本寂、誰れか誦詈を定めん。香を挿んで、
「看よ看よ、東海の 赤梢鯉、 南山の鼈鼻蛇を吞卻す。」

壽陽宗祝信女法華千部を誦する供養拈香の語

「古來錯つて法華に轉せらる、轉得すれば文文句句新なり、大藏五千餘
卷の外、君が爲に拈出す一枝の春。」散説録せず。「夫れ以れば、誦經功德主
壽陽宗祝信女、昔法席を退き、今願輪に乗す。復講を 十六王子に聽き、
化城を三百由旬に立す。當體蓮譬喻蓮、天台一夏妙を談す。無憂樹菩提
樹、瞿曇九劫倫を超ゆ。鍼鋒に向つて足を翹て、醍醐を飲んで唇を沾す。
至聖の命脈、列祖の大機、之れを悟る者は解脱を得。諸佛の本懷、衆生の
直道、之れに迷ふ者は沈淪を受く。鷲子、靈山の記を受け、龍兒、滄海
の珠を獻す。正宗流通銀世界、普賢長男の相を示す、方便濟度金沙灘、
觀音婦女の身を現す。誦經の聲 洋洋乎として耳に盈つ、權鏡の光 熒熒
然として觀に効ふ。門を出づる三種の寶車、慧苴諷多し。空に書する七
軸の文字、棘木眞ならず。或時は寶所を踢倒し、或時は要津を把定す。雪
嶺草香し、生蘇味熟蘇味、兜率花發く、此岸の人彼岸の人、圓頓速疾、迹
を開き本を顯す。漸次修行、果を結び因を收む。然も與麼なりと雖も、言
前の旨如何が指陳せん。「香を挿んで、爐中に蕪向す果して何物ぞ、白
灰撥出す玉麒麟。」

三割の利子を添へて還納せしむる法なり。
③ 維摩居士の一默雷の如しといふより來る。
④ 圓魔王をいふ。
⑤ 西王母が漢帝に獻せしといへる不老長壽の桃をいふ。
⑥ 蘇内翰は蘇老泉をいふ、内翰は翰林學士をいふ。
⑦ 十二部經の一なり、又佛聖經の總稱。
⑧ 鯉、禹門三教の浪を鉤ゆる時、電火の爲に尾を燒かると、遂に化して龍となる。
⑨ 蟠桃養存の看蛇の公案中にある語なり、南山は假定の語、鼈鼻蛇は赤小豆の如き斑點ある蛇のこと、蛇は毒熱毒氣を吐くもの故、觸るるも背くもならぬもの故、宗門にては本來の面目などに喩へていふことあり。
⑩ 大通智勝佛の十六王子にし

て、釋尊はこの佛の未だ出家せざる以前の第十六番目の子なりと。
⑪ 鷲子は舍利弗をいふ、梵音、シヤリヲブトラ、舊譯に身子、新譯に鷲子、又は鷲鷲子と譯す、佛十大弟子の一、名は優波衣沙、もと目連と共に六師外道の一人、沙然に従ひ各々一百の弟子を有せしが、釋尊成道の後、幾もならずして共に弟子となる、智慧第一と稱せらる。
⑫ 流動充滿の意。
⑬ 後漢書馬援傳に「授交趾にあり、嘗て蕞苴の實を餌し、用て能く身を軽くし、慾を奢き以て瘴氣に勝つ、南土の蕞苴實大なり、援、以て爲に種ふんと欲し、軍還る時、之れを一車に載す、時人、以て南土の珍怪と爲す、權貴皆之れを望む、卒後に及び上書して證

壽陽宗祝信女逆修三十三白忌の香語

「咄箇の幻人幻縁を修す、初七より卅三年に到る、爐香鑄出す崑崙の鐵、散じて江南白鷗の烟と作る。薩訶世界南瞻部洲、大日本國河州路茨田郡功德主、奉三寶戒の弟子宗祝、天文八祀龍己亥に集るの歳、早に當來の苦報を懼れて、逆め現在の善因を修す。初七忌に始つて三十三白忌に終る。淨財を捨て、手を靈雲の小比丘宗休に借つて、供佛齋僧の次で、小兜樓一片を拈じて、以て三世十方の諸如來諸菩薩埵、西天東土歷代の諸祖師、天衆地神、日域六十六州の大小の神祇、鬼主鬼官、六趣四生一切の群類等に供養し奉る。伏して冀はくは、這の妙薰力に憑つて、上青霄に透り下黄泉に徹せん。加之、現に安寧を得て、後に觀史天に生せん、旃を記せよ。夫れ惟れば、預修功德主壽陽宗祝信女、邪を捨て正に歸し、實を顯し權を開く。其の功名を身後に留めんよりは、如かじ冥福を生前に修せんには。百陋一姝、壽陽公主の梅花の粧を學んで、含章の面を呈す。三從五障、秦國夫人の竹篋債を償つて洋嶼の禪を慕ふ。藥爐・經卷・活計・荆釵・布裙・家傳・戒香・定香・解脫香・報土を莊嚴し、見濁・命濁・煩惱濁・心田を

する者あり、以爲らく、前に載せ還る所のもの、皆明珠文障なりと、帝益怒る」と。
⑥六趣は六道のこと、地獄、畜生、修羅、人間、天上の六世。四生は胎生、卵生、濕生、死生にて、こゝは生物一切をいふなり。
⑦兜率天に同じ。
⑧三從は幼にして親に従ひ、長じて夫に従ひ、老いて子に従ふ、これ男子になき所、又女人は男子と異なりて、本來五種の障有す、故に女子を呼びて五障の女人といふ、五障とは一に梵天王、二に帝釋天王、三に魔王、四に轉輪聖王、五に佛身となるを得ざるをいふ、これ印度の古説によれるものなり、此の五障は尙ほ月の雲を蔽ふが如きもの故、之れを五障の雲ともいふ。
⑨反魂香ともいふ、洪蜀の香語

汚染す。眞如・自性・清淨・本然、晝は閑淨に降り、夜は率陀に歸る。廣寒宮裏桂を攀づ、朝に伽藍に入り、暮に正覺を成す。無垢世界、蓮に坐す、龜臺の金母を奴呼し、龍女の華鮮を婢視す。晝けども成らず、描すれども就らず、妙又妙、玄又玄。然も恁麼なりと雖も、吾が家、別に長壽の曲有り、燃膠を把つて斷絃を續ぎ去らん。香を以て爐に挿んで云く、「法身無相の相を見んと欲せば、門前改めず舊山川。」

義峰宗卓禪定門十三回忌の香語

「曾て華屋より泉臺に落つ、露結んで霜と爲る秋幾回ぞ、春風を回幹す天八月、返魂香は一枝の梅に屬す。大日本國攝津路三島江村居住の奉三寶戒の弟子功德主大江長能、天文十二年八月十有九日、家門伏して前の左金吾義峰宗卓禪定門十三白の忌辰に値ふ。甲に先つこと三日、私第に就いて梵筵を莊嚴す。一花一燈、一香一茶、供佛齋僧、諸般の白業を修す。中に就いて、當忌の尊大日覺王の像、彫刻するもの一軀、山頂經漸寫する者一部、圓通妙懺修禮するもの一座、這の外作善の品目、載せて僧官舉唱の中に在り。今散筵に臨んで伊蒲塞の淨膳を營辨し、南僧諷經の次で、靈雲の休上座に命じて、這の結願香を焚いて、當忌の尊大日覺王、三世十方の諸佛、

に「司天主薄徐肇、蘇氏の千德哥といふものに遇ふ、自ら善く返魂香を作ると、手に香爐を持ち、懷中より一貼の白檀香をとりて、爐中に挿す、煙氣臭々として直ちに上る、龍騰よりも甚だし、德哥微吟して曰く、東海の徐肇先靈を見んとす、願はくは此の香煙、用ひて引道を爲せよと、盡く其の父母曾高を見る、德哥曰く、但だ死して八十年以上を経るは、則ち返すべからず」と。
⑩大日如來は一切諸佛の王なるが故に、大日如來を稱して大日覺王如來といふ。

西天東土の列祖師、天界地界水界大小の明靈、日域大小の神祇、冥府の鬼主
鬼官、三界二十五有の苦衆生等に供養し奉る。伏して希はくは、この聞薫力
に憑つて、五百由旬嶮難の惡道を超え、四十二重の摩尼殿に登らん。共し
く惟れば、禪定門、道根熟せり矣、晚節難い哉。右京兆の尹に任するときは則
ち百八の珠を大顛に争ふ、露柱歌ひ燈籠舞ふ。左衛門の尉に任するときは則
ち一條の棒を德嶠に奪ふ。虚空消し鐵山摧く、大乘の器有りと雖も直指の才
に逢ふこと罕なり。淵明が風流、黃菊猶ほ存す、今故物と作る、田眞兄弟、
紫荆復た茂す。昔賢材を用ふ、蝴蝶空しく殘夢を續ぎ、蟋蟀暗に餘哀を助
く。十劫波の前、智勝佛の道場に坐す。盡く是れ時の人の窠窟、一炷
烟中、香嚴童の本寂を印す、寧ろ世俗の塵埃を受けんや。須彌鼻孔を穿ち
去り、舜若面皮を劈き來る。社燕秋鴻雲は淡し、渭北春樹の暮、甲鷗
乙鷺天は碧なり、江南野水の隈、圓通の境漸く入り、解脫の門頓に開く。
千佛の廣額屠刀を抛下す、豈に涅槃の摺拾を待たん。五逆の違多、記前
を授與す、法華の付財を貪ること莫し。香を擧げて、這箇磨すれども磷か
ず、涅にすれども縞まず、之れを潤すに雨を以てし、之れを鼓するに雷を

①大通智勝佛をいふ。釋尊はこの佛未だ出家せざる以前、有せし十六王子中の第十六番日の子なりとぞ、句解に大通智勝を譯して、佛の神通は横に十方に遍し、聖に三際を窮めて、悉く知り悉く見て、通徹せざることなし、ゆゑに大通といふ、この佛の智、究竟覺了にして、三惑淨盡し、二死俱に亡し、彼の三乘に勝れたり、故に智勝といへり、此の佛十劫間、道場に坐して佛道を成じ、法華經を講じ、十六王子に聽かしめ、のち入定すること八萬四千劫に及ぶ、この間彼の十六王子、各法華經を復講したりといふ。
②舜若、梵音「シシュメヤ」、涅と譯す、空たること。
③格物論に「燕は春社に來り、秋社に去る、故に之れを社燕

以てす。全く他力に依る、長く聖胎を養ふ。看よ看よ、摩訶般若波羅蜜、
兔角龜毛眼裏に栽う。咄。

心源宗清禪定門二十五年忌の香語

「地獄天堂夢蝶の牀、覺め來る二十五の年光、香消して金鴨何ぞ飛び
去らん、鐵崑崙の鼻梁を扭住す。大日本國山城州洛陽の居住、功德主
孝女妙泉、天文甲辰二月十有五日、伏して先考心源宗清禪定門二十五遠忌
の辰に値ふ。靈雲精舍に就いて法筵を資嚴し、香華燈燭、茶菓珍饈を備へ
て以て供養を伸ぶ。大乘妙典頓寫一部、圓通懺摩一座、水陸供一會、仍つ
て苾芻衆を集めて首楞嚴神咒を誦誦するの次で、休上座に命じて、這の妙
兜棲を焚いて、當忌の尊虛空藏菩薩、三世十方の諸佛、西天東土の諸祖、
日域大小の諸神、六趣四生一切の群類等に供養し奉る。仰ぎ冀はくは、者
箇の薰力に憑つて、速に解脫の航に乗せんことを。夫れ惟れば、禪定門は
器之。珊瑚、材也檉樟、南陽の慮より起つものは、孔明臥龍奮迅、吸ふに
西江の水を以てする底は、龐老丹鳳翱翔、翅た出師の表を進むるのみに
あらず、直に選佛場に登ることを得たり。高義、層雲に薄る、松下に陶

といふ、秋鴻は、鴻雁秋に鳴いて南地に歸る故に云ふ。
④提婆達多、斛飯王の子、釋尊の從兄弟、或は善覺長者の子なりともいふ、釋尊成道の後、出家して弟子となる、然れども佛の夢成を嫉み、五百の衆を率ゐて別立し、阿闍世王と結びて佛を亡し、摩訶陀國の教權を握らんと企てて成らず、阿闍世王改悔するに及び、事益々非にして遂に病死せり、佛傳によれば、その逆罪によりて生きながら墮獄せりといふ、法華經には釋尊は豫言して未來には天王如來たるべしといふ。
⑤太陽をいふ、金鳥に同じ、日月をいふなり。
⑥おさへとむむること、こらまへること。
⑦珊瑚は宗廟に黍稷を盛る器にして、飾るに玉を以てす、夏

令を見るが如し。聲價寰宇を動す、花中に孟嘗有るに似たり。將に謂へり、魯に君子多しと、元來晋に文章無し。五陰の山を踢倒するときは、則ち策を涅槃の後陣に定む、三界の獄を打破するときは、則ち迹を本覺の故郷に掃ふ。恁麼不恁麼、活饒饒、拘束没し、不恁麼恁麼、淨裸裸、承當を絶す。然も是の如くなりと雖も、後昆を保祐する一句、若何が商量せん。香を擧して、海國乾坤潤く、蓬萊日月長し。」

月江宗光禪定門小祥忌の香語

香を擧して、晚梅二月折り残す枝、手に信せて今朝拈出し來る、風笛一聲花落ち盡す、三千世界暗香吹く。扶桑國山城州洛陽居住の功德主宗清信女、天文甲辰初秋十三日、伏して月江宗光禪定門小祥忌の辰に値ふ。預め今月今日に於て、梵筵を飾つて清衆を集め、白傘蓋を諷演するの次で、手を休上座に借つて、這の小柴片を焚いて、諸佛諸祖諸の衆生等に供養し奉る。希ふ所は、頓に苦海を超えて、速に彼岸に到らんことを。夫れ惟れば、某名、一棚の俊鶴、千里の鳥驪、宋先生曾て日本の歌を作る、今尚ほ存せり。融の大臣始めて源氏の姓を賜ふ、民と具に之れを瞻る。翅だ

に礎といひ、股に瑚といふ、器の貴くして美なるものなり、以て人の才器のすぐれたるに比す、論語に「子貢問ふて曰く、賜は如何、子曰く、女は器なり、曰く、何の器ぞ、曰く、瑚璉なり」と。

孔明、諸葛武侯が蜀の相たりし時、誠心を開き公道を布き、衆思を集め、忠誠を盡して以て政を爲せり、其の節を出して魏を伐つとき、表を後主に上る、中に言あり、曰く、「臣鞠躬して力を盡し、死して而たりては臣の逆め觀る所に非ず」と。

陶淵明、彭澤の令となる、故にその故郷に歸るに及び、歸去來の辭を賦して其の志を表す。

斥鹵桑田變するのみにあらず、矧んや復た夕陽花増進きをや。生死の魔を降すときは則ち竺乾の猛將を指麾し、煩惱の賊を殺すときは則ち棘門の戲兒を鼻笑す。家業、書を學び劍を學ぶ、虛名、斗の如く箕の如し。槁木死灰、或時は莊座主を呵して羅漢と稱す、桂を聞いて悟道し、或時は黃詩祖に逼つて泥犂に陷る。吾れ汝に隠すこと無し、君誰れにか説向せん。南海の沈檀、一爐に蒸卻す、其の功德不可説不可説。西方の法華頓寫七軸、其の妙理、也太奇也太奇。山此の郎の面目を露し、天阿母の慈悲を感ず。若し聲色を認めば、甚の了期か有らん。這裏面目無く、又慈悲無し。香を擧して、看よ看よ、金鳥飛んで、陽谷を出づ、鐵馬跳つて須彌に上る。」

宗璣禪定門一周忌の香語

落葉兩三片、拈じて本來の香と作す、八百の鼻功德、遍界曾て藏さす。臨濟寺殿用山玄公大禪定門十三回忌陞座 駿州大龍山臨濟寺に於て之れを修す

「大龍再現す大人の身。」香を擧して、這の香雲に乗じて忽ち脱鱗、吞卻す十三の華藏海、吐いて臨濟

徳政を布く、民之れを神明と仰ぐ、微し還さるゝや、吏民車を攀ぢ、之れを請ふ、乃ち夜逃れ還り、隠所して自ら耕す。

① はやぶさのすぐれたるもの。

② 項羽垓下に破るる時、歌つて曰く、「力山を抜き氣世を盡ふ、時利あらず難行かず、難の行かざるは奈何ともしすべし、虞や虞や汝を奈何せん」と、驪は項羽の乗りし千里の馬。

③ 臨濟をいふ、然れども只だ海と見てよし、桑田變じて海となり、海變じて桑田となるといふ意なり。

④ 黃庭堅、山谷と號す、詩に於て一派を成す、歐陽修の友。

⑤ 東方、日の出づる方ないふ。

⑥ 時の風物を叙するなり。

百花の春と成す。」

垂語、「祖師甚に因つてか西來、蕉葉雷を聴いて展ぶ、佛法甚に因つてか東漸、葵花日に向つて傾く。

小玉小玉、只だ要す檀郎が聲を認得せんことを。參。」僧有り（梅室座元）、衆を出でて問うて云く、

「正法輪轉す、芳草に隨ひ落花を逐ふ、大施門開く。檀林に入り荆棘を出づ、更に密旨を示して、願

はくは來機に應せよ。」師云く、「天鑑私無し。」進んで云く、「洛陽の牡丹、新に葉を吐く。」師云く、「大

いに春意に似たり。」進んで云く、「大功德主源府君、今月十七日、伏して臨濟寺殿用山玄公大禪定門十

三回の忌景に値ふ。大和尚を拜屈して、陸座說法、未審し什麼の法をか説く。」師云く、「今日好晴。」僧

云く、「記得す、鎮州の府主王常侍、臨濟慧照禪師を請じて、陸座して即ち

云く、「此の日常侍の堅請を以て、那ぞ綱宗を隠さん」と。如何なるか是れ

隠さざる底の綱宗。」師云く、「吾が宗に語句無く、又一法の人に與ふる無

し。」進んで云く、「大和尚、今日吾が源府君の請を受けて、臨濟寺殿の爲に陸

座す、之れを賓主互換と謂はん乎。」師云く、「戲海の猛龍、摩霄の俊鶴。」

進んで云く、「與麼ならば則ち彼の久遠を観ると猶ほ今日の如し。」師云く、

「日月秦樹に垂れ、乾坤漢宮を繞る。」進んで云く、「三尺の吹毛、寰宇を定む。」師云く、「阿刺刺。」進

んで云く、「四叢圍繞、問世の優曇、謹んで答話を謝す。」師云く、「月は雪後より皆奇夜、天は梅邊に到

つて別春有り。」

提綱、「元亨利貞は一氣に始り、常樂我淨は一心に本づく。心法無形、

蕩蕩乎として宇宙に充塞す。面前物有り、昭昭爾として古今に輝騰す。乾

馬坤牛猶ほ覆載せず。坎鳥離兔、何ぞ敢て照臨せん。是れに縁つて 毘盧、

天に先ち、善財、天に後る、空裏に紐を結ぶ。靈山に月を指し、曹溪に月

を語る、海底に鍼を摸る。六白冷坐佇思に勞す、百城の煙水參尋を費す。

爾より來 少林の響に効ふて、石女無孔笛を吹く。靖節の趣を識つて

木人沒絃琴を奏す。露柱歌ひ燈籠舞ふ、山花笑み野鳥吟す。未だ妙旨に逢

はず、全く知音を絶す。正與麼の時、杖を拈じて、牀角に拄杖子有り、

他の保社に入らず。忍俊不禁、驀路に出で來つて、吧吧地に道ふ、能殺能

活能縱能擒と。遠法師、甚に因つてか虎溪を過ぎざる、山僧に撈著せら

れて、目 瞠し口暗す、雨池蓮を打つ。十緇八素、無繩自縛、風岸柳を吹

く。六凡四生、鐵に點じて金と成す。畢竟空に非ず色に非ず、元來陽無く

陰無し。正に好し、葛藤窟を打破して、荆棘林を 剷除するに。」卓一下し

て、「若し樓に登つて望ますんば、争か滄海の深きことを知らん。」

①天道といふが如し。

②主人主位に執せず、來賓々位を守らず、主賓となり、賓主となりて、回互宛轉するの靈機をいふ。

③漢の高祖、能く三尺の劍を以つて天下を定むと、これに比するものか。

④易に乾は元亨利貞とある、傳に、元亨利貞は之れを四徳といふ、元とは萬物の始め、亨とは萬物の長、利とは萬物の遂、貞とは萬物の成なり。惟だ乾坤に此の四徳あり、元は春に屬し仁と爲す、亨は夏に屬し禮となし、利は秋に屬し義となす、貞は冬に屬し智となす。

⑤如來をいふ、毘盧遮那佛、又は毘盧遮那、盧遮那、遮那ともいふ、光明遍照と譯す、善財は善財童子をいふ。

⑥西施の聲にならふより、達磨の坐禪を下手に眞似するをいふ。

⑦靖節は陶淵明をいふ、沒絃琴は絃のなき琴をいふ。

⑧惠遠法師、蓮社十八賢の一、虎溪三笑の事、前に見ゆ。

⑨瞠着など熟字して驚きみつむ

散説、大日本國駿州路居住、大功徳主源の朝臣義元、天文十七年三月十七日、伏して先君臨濟寺殿用山玄公大禪定門、十三白の遠忌の辰に値ふ。本寺に就いて道場を莊嚴し、甲に先つこと七日、十員の緇侶に命じて、晨香夕燈、晝經夜禪、諸般の白業を修して、以て供養を伸ぶ。當忌の尊大日如來の像彫刻する者一軀、圓通懺摩修禮する者一座、水陸妙供施設する者一會、法華經王頓漸書寫する者如干、大功徳主本門の壽量自ら書する者一品。今散筵に當つて伊蒲塞の淨膳を營辨して、謹んで清淨衆を集め、白傘蓋無上神咒を諷演するの次で、雲居天上の三秀堂頭和尚を拜請して、鷓斑を焼き鯨吼を發す。野桃花下の靈雲比丘宗休に副命して、塵拂を乗り驢嘶を作す、檀命に因つてなり。共しく以れば、大禪定門、人中の杞梓、名上の梧桐、水尾の流、源姓を賜ふて、多田滿仲に承く。淺間の雪、和歌を詠じて普廣相公に獻す。此の郎、武門の閥閱、其の先、亂世の英雄、仁義の裳を褰げて、吾が堂に升り、吾が室に入る。箕裘の業を續いで、父書を讀んで父の風有り。駿州の太守を領取して、鴻溝以東を割據す。魯直鰲騎碧瞳、鳥跋千年の瑞を現す。馬溫瑠璃皎佛、牡丹一日の紅に比

る様子ないふ。
① かりけづるないふ。
② 二木とも良材、資治通鑑に、杞梓連抱にして、而も數尺の朽有るも、良工は棄てず」と。
③ 鴻は大なり、大なる溝なり、史記項羽記に、項王乃ち漢と約し、天下を中分し、鴻溝以西のものを割きて漢となし、鴻溝以東を楚となすと、これより轉じて分界を畫すること、鴻溝を畫すといふ。
④ 笑ひて齒の現はるゝを、齒といひ、虫ばむを齧といふ。
⑤ 司馬溫公、自ら瑠璃光佛と號す。
⑥ 汴は州の名、一、二、三、四に深き意なし、近きより遠きを示すものか。
⑦ 古の弓の達人なり。
⑧ 唐の高祖の子元嬰、洪州を都督するとき關を營む、之れを滕王閣となす。

す。膝を王侯貴介に屈し、名を走卒兒童に誦す。貧しうして詔はず、富んで奢らす。一揚二益、三京、四汗、近き者は來り遠き者は服す。南嶺北狄、東夷西戎、宣が幕下に坐し、羿が穀中に遊ぶ。滕王の蛺蝶花を穿つ、依倚として相似たり。張顛が驚蛇草に入る、彷彿として同じからず。心正しきときは則ち筆正し、畫工なる者は詩工なり。春陰十萬營、細柳の圈を透る。雲夢八九澤、栗棘蓬を呑む。胸襟洒洒落落、佳氣鬱鬱葱葱たり。加之、連聲兄と叫ぶ。鼇山昔時成道、他方に化を成む、雄峯同日終を示す、雙履地に瘞め、雙劍空に飛ぶ。活鱖鰐拘束没し、淨裸羅籠を絶す。此れは是れ大禪定門、從前の間絡索、茲に四事の筆供養有り、一一擧揚し去らん。其の第一に云く、「即身大日法中の王、朝に扶桑を照し暮に落棠、信せずんば天外に出頭して看よ。人人脚下の一靈光、是れを阿字の筆供養と謂はん乎。」其の第二に云く、「過去の如來正法明、耳根清淨眼根清し。楊枝酒水兩三點、饒舌の黃鸞懺悔の聲、是れを音聲の筆供養と謂はん乎。」其の第三に云く、「大地廣く開く甘露門、風に和して供上に黃旛を挿む。冤親平等曲終つて後、十恒河を倒して一口に呑む。是れを大盆小盆の筆供養と謂はん乎。」其の第四に云く、「虚空は是れ紙月は毛錐、無字の經王錯つて寫し來る。笑ふ可し、秀能の頓漸を分つことを。南枝は春早く北枝は遅し、是れを頓漸書の筆供養と謂はん乎。」更に那一事の筆供

養有り、三世の佛に供養するに、三世の佛敢て受けず。六代の祖に供養するに、六代の祖敢て受けず。三十三天の衆仙に供養するに、衆仙亦受けず。六十六州の諸神に供養するに、諸神亦受けず。未審し大禪定門、卻つて受けんや。別別金剛の眼睛、源公の筆頭に在り。拂を收めて又手して、「謹んで供養を謝す。」

自序、「宗休、樗櫟の遺韻、蒲柳の衰容、笑を傍人に取る。千里を凌いで蠅驥に附す。位を流輩に越え、三級に登つて魚龍と化す。豈に大士講經の内證に合せんや。叨りに世尊陸座の前蹤を攀づ、枉げて恕宥を賜へ、愚恣を罪すること莫れ。忸怩忸怩。」

檀謝、「陸座の次で、共しく惟れば、大功徳主、海壇の馬子、砥柱の鳳雛、薔薇の古洞春を留む。蚤に、謝傳を慕ひ、梅花の門戸雪に掩ふ。晚に林逋を訪ふ、彼の蒼生黔首を奈せん、他の白足赤鬚を拜す。一卷の兵書、善を盡し矣、美を盡せり矣。半部の論語、御を執らんか、射を執らんか、必ず八州の都督と稱せん。況んや三世の相樞を乗るをや。法門の英檀、匿王の佛敕を受くるが如し。在家の菩薩、大帝の吾が徒を護するに似たり。願はくは華甲を保ちて、仰いで蘿圖を祝せよ。」

① 自己の不才を鄙下していふこと、莊子に樗櫟の語あり。

② 禹門三級の波をいふ、前に見ゆ。

③ 恣は愚なり。

④ 謝安、字は安石、陳國陽夏の人、年四歳、桓彝嘆じて曰く、「此の兒風神秀徹なり」と、年四十一にして始めて仕ふるの志あり、其の司馬となるや、朝士咸送る、中丞高嶽之れに戯れて曰く、「卿曷日朝旨に違ひ東山に高臥す、諸人毎に相與にいふ、安石出ずんば將に蒼生を如何にせん」と、安愧色ありと、忠誠を盡して匡翼し、遂に太保に進み、薨じて太傅

總謝、「又惟れば、四來の高賓、一會の海衆、諸位禪師、文經武緯の諸尊官、得得來也の貫休、三千指、花に酔ふ、堂堂去也の雙徑、五百衆、樹を繞る。之れを仰げば御前の山よりも高く、之れを譬ふれば僧中の月よりも清し。若し褒讃を罄さば、恐らくは尊聽を瀆さん。各乞ふ昭亮せよ。」拈提、「記得す、僧、雲門に問ふ、「不起一念の時、卻つて過有りや也た否や。」門云く、「須彌山子細に點檢すれば、兩箇の胡猴水月を探る。」休上座亦管中に豹を窺つて其の一斑を得たり。百億の迷盧一念の間、等間に踢倒して東關に入る。呵呵として手を拍して初めて相見すれば、富士彌々高し吾が用山。久立珍重。」

斑秀才一周忌の香話

一庵の衆に命じて、斑秀才が爲に誦經す。山僧一香を擧して云く、「這箇は是れ人人具足本來圓成底、喚んで什麼とか作さん。」衆下語す、山僧、咄して云く、「不是。」遂に偈して小祥の供に充つと云ふ。

風前の柳は去年の恨を惹く、雨後の花は今日の腸を摧く、柳に非ず花に非ず果して何の恨ぞ、本来の鼻孔本來の香。

① 論語に「蓬荜蕭人曰く、大なる哉孔子、博學にして名を成す所なしと、子之れを聞いて門弟子に謂ひて曰く、吾れ何を執らん、御を執らんか、射を執らんか、吾れ御を執らんと、蓋し人の己を譽むるをきて之れをうるに誰を以てするなり。

② 文をたてとし、武を横とするをいふ、文武のことをいふ。

③ 五代の僧、聲を長くす、禪月大師と號す、詩名高節字内成知ると。

④ 須彌山なり、蘇迷盧、須彌樓ともいふ。

秉炬

月巢初公座元の下火

「龜哥報じて道ふ八月吉なりと、吾が首座行脚了畢す、惜む可し一朵の玉芙蓉、秋風吹いて紅爐の雪と作る。夫れ惟れば、新圓寂月巢座元、籌室の先登、風塵の表物、臂を折つて醫を學ぶ、願神術を得たり。二株の檟桂、地を下するときは、則ち後昆を覆蔭す。一杯の紅杏、春に酌むときは、則ち前葩を追慕す。翅た徳香を發し道香を發するのみに弗す、矧んや復た初節を保ち晩節を保つをや。或時は眞珠を衣裏に繋ぐ、凡に在つては凡に同じ、或時は寶劍を眉間に按ず、佛に逢ふては佛を殺す。願頂備伺、

①下火に同じ、炬火を来つて茶毘する意、葬式の際、眞の炬火を以てするを本意とすれども、早く燒盡するを慮り、木炬に朱をぬり、又は赤紙を以て火の狀に擬したるものを代用す、秉炬の佛事は羹湯、羹茶の二佛事訖りたる時、喪司進んで主喪の前に到り、展具三拜して佛事を請す、主喪立ちて中央に到るを見て、直歲、炬火を進む、主喪之れを受け、拈じ、法語了つて放下し、燒香歸位するなり、主喪炬を秉つて拈するが故に、之れを秉炬師と稱す。

②新に死亡したるとの意である。
③住持人の居室、方丈に同じ。
④葩は昔に同じ、賢哲の人などと熟字して、すぐれて才徳のある人といふ。
⑤願頂は大面の貌、備伺は無知の貌、即ち尊大無知の貌をいふ。
⑥支那の俗語、鳥は黒のこと、律々は詩經小雅に「南山律々」とありて、高大の貌なり、鳥律律とは黒くして高大なるをいふ、寶林傳に「眼晴鳥律々」とあり、開善錄には拄杖を形容して鳥律々といふ。今律と

眼睛 烏律。加之、鉢囊を掛け拄杖を拈す。之れを鑽れば彌く堅く、之れを仰げば彌く高し、金圈を透り栗蓬を呑む。涅を不生と言ひ、槃を不滅と言ふ。咄咄、馬面夜叉を籠絡す、玄玄玄、牛頭獄卒を鞭笞す、畢竟如何。萬法一に歸す、一も亦守ること莫し。首座還つて委悉すや麼や。「火把を抛つて、摩訶般若波羅蜜、甚深般若波羅蜜。」喝一喝す。

季友契公首座の下火 二月六日

「涅槃の活路晴驢邊、老瞿曇に先ちて一鞭を著く、七十六年率陀の夢、春禽聲裏夕陽遷る。夫れ惟れば、某名、胸に雲澤を呑み、姓は芥川に出づ、全機覆藏せず。或時は石頭の參同契を繚案す、内外瑕翳無し。或時は圓鑑の九帶禪を觀破す。這箇の消息那裏よりか傳ふ。加之、聖に在つては聖に同じ、凡に在りては凡に同す。秋菊春蘭、寧ろ其れ地を易へんや。佛に逢ふては佛を殺し、祖に逢ふては祖を殺す。清風明月、元是れ天を同じうす。歩歩踏斷す毘盧頂、明明に透脱す威音の前。色即ち是れ空、什麼の鍍湯爐炭とか説かん。空即ち是れ色、甚麼の清淨本然をか論せん。契首座契首座、行脚の事は且く置く、如何なるか是れ汝が生縁。倘し復た

①いふは律々を約するのみ、雲夢の澤をいふ、其の廣大をいふ。
②石頭希運禪師、青原行思禪師の法嗣、端州高要の人、俗姓は陳、諱見夙に人に秀づ、後曹溪に至つて薙髮し、未具戒にして六祖の示寂に會ふ、其の遺命を受けて、青原山の行思禪師に謁して嗣法す、唐の天寶の始め衡山の南寺に往く、寺の東の石臺上に結庵す、時人稱して石頭和尚と號す、江西の馬祖と相對して宗風甚だ盛なり、著す所參同契、草庵歌あり、參同契は五言十四句二百二十二言より成る長篇の古詩なり、初心晚學共に參禪の龜鑑とす。
③觀破。うかまひやぶるなり。
④梵音シューメヤター、空性と譯す、空無の性をいふ、碧岩集第六則の頌に「空性若畔花

未だ會せずんば、試みに山僧が敷宣を聴け。火把を抛つて、「舜若多神希有と叫ぶ、火蛇吐出す盡三千。」

玉照寶公首座の下火

「形山の一寶鐵團圓、鷲巖に回光返照して看よ、千秋西嶺の雪を鍊出して、丙丁童子面門寒し。夫れ惟れば、某名、林間の蘆旬、夜裏の栴檀、文武の爐を開いて、徑山一粒の鳥喙を爆す。生死の窟を破つて、佛日三尺の黒虻を拈す。禪板を過與し、刹竿を倒却す。淨裸承當を絶す、破戒の比丘地獄に墮せず。赤洒洒拘束没し、清淨の行者涅槃に入らず。向上に轉じ去れ、多端に涉ること莫れ。會す麼。火把を抛つて、「妙處言はんと欲するに言ひ及ばず、月光影を移して欄干に上る。」喝一喝す。

酒龍看公首座の下火

昨夜酒龍窟を起つて蟠る、青天霹靂波瀾惡し、端無く乾坤を吞卻し去つて、吐いて十三紅の牡丹と作す。

慧曇都寺の下火

雙林樹下の老瞿曇、生死根無し胡亂に談す、八十餘年春一夢、巖花地に落ちて雨 毳毼。

松壽茂公藏主の乗炬

「吾が臨濟の正宗を扶起す、清陰繁茂す一株の松、夜來風雷の力を借らす、乾坤を吞卻して火龍と化す。夫れ惟れば、某名、輓頰の手段、廓落の心胸、急管晝催す。花を宜春苑下に賞す、珠簾暮に捲く、月を大雲山中に翫ぶ。一生何物をか消す、自由渠儂に任す。加之四十一年、温にして厲し、恭にして安し。鍵鑰大藏小藏を掌る、三祇百劫、呼べども回らず、留むれども住らず。柳樛千峯萬峰に入る。且く道へ、藏主畢、竟何の處にか落在する。」火把を抛つて、「生死涅槃猶ほ昨夢の如し、城樓の殘角寺樓の鐘。」

娛岳歡公藏主の下火

「歡喜地を踏躡し、涅槃城を打破す、轉身的那一句、月白く又風清し。夫れ惟れば、某名、峻機電卷き、淵默雷轟く。知見即無明、安楞嚴の句讀を看過す。世間相常住、言法華の虛名を惹き得たり。流水廣長舌、大地活眼睛。父母未生已前、只だ恁麼、落花三片五片、百年壽盡きて已後、只だ恁麼、脩竹一莖兩莖、藏主藏主、會せば便ち會せよ、多程に涉るこ

狼籍、彈指悲しむに堪へたり舜若多」とあり。

①蘆旬は花の名。

②刹竿。或は寺塔の居所を標示する爲に樹つる柱のこと、無門關第二十二に迦葉刹竿の公案あり、「迦葉因に阿難問ふ、世尊金襴の袈裟を傳ふるの外、別に何物を傳ふ、葉喚んで、阿難と、難應諾す、葉云く、門前の刹竿を倒却し著せよと。」

③釋迦一代即ち三十成道、四十九年說法、聖壽實に八十歳、周の敬王三十四年乙卯年、我が懿德天皇二十五年二月十五日夜半、拘尸那揭羅城外に入涅槃し給ふ。

④敷き連る鏡。

①荆楚歲時記に、「立春に宜春の二字を帖す」と。

②杖の材にする一種の木なり。③淨行、淨裔と譯す、印度四姓の最高位に位する種族、又僧侶の階級、又波羅門教の時、又外道の總稱、佛教中、僧侶の淨梵行を修する人の意。傳燈錄に「嵩山の少林寺に寓止して面壁して坐す、終日默然たり、人之れを測ることなし、之れを壁觀婆羅門といへり」とあり。

④巖は傳舎の如し、莊子に「仁義は先王の遺徳なり、止だ以て一宿すべくして、久しく居るべからず」と、天地は萬物の逆旅など、云ふに等しく、やどやと見てよし。

⑤法社の棟梁にて佛教界の中堅なるをいふ。

⑥蕞冬はふき。又款冬とも書く、

と莫れ。然も是の如くなりと雖も、別に向上の關縁子有り。且く山僧が施呈し去るを待て。火把を抛つて、「勝熱 婆羅門手を拍して、驚倒す鳥有の老先生。」

雲峯宗潘藏主の秉炬

古今天地一 蓬廬、生死涅槃總に是れ虚、華山千萬朶を劈破して、任他あれ潘閻が 倒に驢に騎ることを。藏主藏主、歸らめ歎、歸らめ歎。若し未だ眞の歸處を知らずんば、枯腸底を盡して渠に説向し去らん。殘鶯を認めて杜宇と成すこと莫れ、江城五月月の昇る初め。

不昧宗光藏主の下火 少林派

「萬里雲無きも三十棒、千江に月を印す一靈光、少林別に春の消息有り、火裏の梅花遍界香し。夫れ 惟れば、不昧宗光藏主、釋門の釋種、法社の法梁、四十七年前、僧房に在つて、 蕞冬瓜の發くに逢著す。四十七年後、禪林に入つて、蔭涼樹の偃るるを扶起す。或時は 伽耶寂光穩坐地、或時は兜率閻浮遊戯場。之れを鑽れば堅く之れを仰げば高し。金剛の眼睛鳥律律。描すれども成らず畫けども就らず。本來の面目露堂堂。生死海を

陽爨し、菩提坊を打破す。然も恁麼なりと雖も、這裏停住の處に非ず。且く那邊に向つてか商量せん。火把を抛つて、「演若何ぞ曾て影を認めん、善財南方に行かず。」喝一喝す。

宗柔上座の下火 大永壬午仲冬十四日

「剛柔に勝ち今柔剛に勝つ、剛柔總べて陰陽に屬せず、一場の富貴一場の夢、覺めて後牡丹冬日香し。宗柔宗柔、一切善惡都べて思量すること莫れ。汝若し思量に涉らば、天堂有り地獄有り。非思量の處地獄無く天堂無し。何物か恁麼に來り、何物か恁麼に去る。畢竟是れ存に非ず畢竟是れ亡に非ず。木馬雪に嘶いて、華鯨霜に吼ゆ。還つて會す麼。」炬を擲つて、「安禪は未だ必ずしも山水を須ひず、心頭を滅卻すれば火も自ら涼し。」喝一喝す。

無性能聖 淨人の下火

「夫れ 以れば、眞如法界無性を性と爲す、實際理地不來にして而も來る。是の故に三世了達の能仁、鶴樹に滅を示す、七地積行の菩薩、龍門に頤を曝す。或時は鐘樓上に念誦し、或時は僧堂前に牌を挂く。一夢一場、電轉じ星飛んで、已事を究明す。六十六年、霜辛雪苦、聖胎を長養す。蕭寺の秋風、弊皮履を曳いて月に歩し、林丘の斜日、塗毒鼓を撃つて雷を轟す。火首金剛怒發すれば、晴燈

嚴冬に凍氷を款(た)いて生ずる故に云ふ。

①伽耶山をいふ、中印度摩揭陀國伽耶市の西南一哩、鷲峰山の北二三哩の地にある山の名、昔如来此に於て寶雲等の經を演説すと。只だその境をいふのみ。

②演若達多、延若達多、耶若達多に作る、譯して阿授といふ、天に祭祀して授りたる子の意。首楞嚴經卷の四に「室羅城中の演若達多、晨朝に於て鏡を以て面を照して、鏡中の頭の眉目見るべきを愛し、己が頭の面目を見ざるを嗔り責め、以て魘魅と爲し無狀に狂走す」とあり、疎忽輕卒にして、自らの有するものを他に向つて求むる例に用ふ。

③此の一段名字を打するなり、而して剛の柔に勝つは表面にして、その究竟する所柔、剛に

勝つをいふなり。

④此の偈快川紹喜禪師が信長に惠林寺を燒かるゝ時、山門火中に坐して唱へしものなり。

⑤釋尊の涅槃を示し給ふないふ。

⑥佛教修行者の五十二の階級のうち、第四十七番目の階級に當るものなり。

能笑哈哈たり。正與廢の時、能聖淨人焼いて一堆の灰と作す。灰身滅し已つて何の處にか安排す。倘し復た未だ委悉せずんば、山僧渠が爲に舉哀せん。火把を抛つて、廓然無聖の位を振轉して、山河大地纖埃を絶す、即今若し冷相看を要せば、曹溪の明鏡臺を打破せよ。喝一喝す。

能久淨人の下火 永明院

「久遠劫來只だ這れ是れ、金鳥玉兔曾て移らず、如今枕上に間夢無し、大小の梅花吹くに一任す。夫れ以れば、某名、常住を護惜して、天鑑私無し。密付傳衣、嶺南の村獠を瞞卻す。禮拜茶席、百丈の野鴨兒を曳回す。機輪轉する處、魔外も窺ひ難し。風流ならざる處也た風流、銀山鐵壁百雜碎、意氣有る時意氣を添ふ。鏝湯爐炭清涼池、臘月三十日、眼光落地の時、還つて會すや麼や。什麼の會不會とか説かん、還つて知るや麼や。什麼の知不知をか論せん。然も恁麼なりと雖も、更に行に餞する一句有り、如何が指塵せん。」炬を抛つて、「永明門前湖水漫たり、慧日峯頭夕陽遲し。」咄咄。

月意玄清庵主の乗炬

「清寥寥地纖塵を絶す、活路通する時急に身を轉す、七十餘年吟未了、風花雪月本來の人。夫れ惟れば、月意玄清庵主、幻生幻滅、全假全眞。歌を山邊赤人に續ぐときは、則ち風流種有り。姓を水尾の天子に賜ふときは、則ち意氣倫を絶す。有時は松下に喝道を應き、有時は梅邊に別春を置く。加之、庵主の

無門關第十一、州勘庵主の公案に曰く、趙州一庵主の處に至る、問ふ、有り麼有り麼、主拳頭を擧起す、州云く、水

毒拳、趙州強ひて深淺を辨す。宗師の玄妙、洞山誤つて君臣を分つ。窮して堅し老いて壯なり。涅にすれども細ます、磨すれども磷かす。與廢の時節、諸人試みに看よ。月意庵主、火焰裏に向つて大法輪を轉すること。火把を擲つて、「白灰撥ひ出す紅麒麟。」喝一喝す。

觀禪人の下火

夢幻空華如是觀、身を活路に轉す太だ端無し、山僧別に送行の句有り、十日の菊花折り残さす。

道空禪人の下火

筋斗を倒翻す太虚空、生死涅槃路通せず、別に送行の那一句有り、梅花舊に依つて春風に笑む。

大藏寺主宗玖尼首座の下火

「大藏五千餘卷の經、涅槃生死説くこと叮嚀、南方の佛法多子無し、火は自ら紅分柴は自ら青し。夫れ惟れば、大藏寺主宗玖尼、竹晚節を持ち、菊頰齡を制す。雙放雙收、劉鐵磨の手段を具し、三歸三聚、大愛道の典刑を存す。法身を咄し、正覺を喝す。雨師を罵り、雷霆を叱す。蝶は

淺く缸を泊むる處あらすと云ふて行く、又一庵主の所に到つて云ふ、有り麼有り麼、主も亦拳頭を擧起す、州云く、能縱能奪、能殺能活と云ひて、便ち作禮すと、その無門の章に曰く、眼は流星、機擘電、殺人刀、活人劍と。

洞山の君臣五位頌あり、これをいふものならん。 ① 鄭谷の十菊の詩に、節去り蜂愁ふれども蜂知らず、曉庭還つて轉る折殘の枝、自ら今日人心の別なるによる、未だ必ずしも秋香一夜に衰へずと、今觀禪人の行く、坐に寂莫を感ずるものならん、觀禪者は人中の菊なりし。

② 倒にもんどりをうつことなり、大智佛頰偶作に、殿殿鳥龜倒に天に上る、須彌山頂筋斗を踏すと、煩惱即菩提、生死即涅槃と轉轉する義に

舞ふ海棠の風、佛界魔宮半醉の裏、鷄聲茅店の月、地獄天堂一旅亭。了了了の時、諸聖を慕はず、玄玄玄の處、己靈を重んぜず。石女、業鏡を打破し、木人、淨瓶を踢倒す。大姉若し向上の事を知らんと要せば、耳根を截斷して、諦聽せよ諦聽せよ。火把を抛つて、帝釋の鼻孔を築著し去つて、輕羅の小扇流螢を撲つ。喝一喝す。

密中祥聖禪尼の下火

「大地都盧堅密身、本然清淨緇磷を絶す、紅爐一點寒巖の雪、熱鐵花開く四月の春。夫れ惟れば、某名、袈裟勃窣、標格精神、牡丹を吉祥寺前に愛す、夢の如く相似たり。法華を兜率天上に期す、厥の命維れ新たり。生死涅槃、線路を放開す、迷悟凡聖、要津を把定す。加之、婆子勘破、恁麼に便ち去る。倩女離魂、那箇か是れ眞。長天分疎雨濛濛、漆桶光歴歴。大野分涼颼颼、燈籠笑閨々。快活自在、機輪を撥轉す。此れは是れ祥聖禪尼六十二年、受用不盡底の、間絡索なり。別に向上圓極の法門有り。山僧が指陳せんを聴け。」炬を抛つて、「鴛鴦繡出して君が看るに任す、金鍼を把つて人に度與すること莫れ。」

妙意禪尼の下火

「都盧大地涅槃門、線路通する時意根を絶す、鴛鴦を繡出して君自ら看よ、元來無縫の鐵崑崙。夫れ惟れば、妙意禪尼、出生入死、子を顧み孫を思ふ。南は天台、北は五臺、慕直に轉じ去れ。婆子勘破、晝は閻浮、夜は兜率、那箇か眞底。倩女離魂、彌陀佛。乾屎橛。正法眼破沙盆、洒洒落落、何の處にか尊と稱せざる。」火把を抛つて喝一喝す、「諸佛出身の處を知らんと欲せば、月潭底を穿つて水に痕無し。」

古帆性順禪尼の下火

「順縁と逆縁とに涉らず、春閨夢裏百年遷る、生と説き死と説く都來錯、舊に依つて斜陽我が西に在り。夫れ惟れば、古帆性順禪尼、性地平等、心月孤圓、默處に雷を藏す。毘耶口

③三歸戒、三聚淨戒をいふ、三歸戒、佛法僧に歸依するをいひ、三聚淨戒とは、大乘の菩薩戒をいふ、此の三聚淨戒は一切の大乘の戒を攝する大乘の戒なるが故に名く、一攝律儀戒(自行)、二攝善法戒(化他)、三攝衆生戒(自他圓滿)故に三聚淨戒といふ。
④趙州勘婆の公案、前に見ゆ。
⑤無門圓三十五に見ゆ、曰く、「五祖僧に問うて云く、倩女離魂那箇か是れ眞底。無門云く、若し者裏に向つて眞底を悟り得ば、便ち殻を出てで殻に入ることは旅舎に宿するが如きを知らん、其れ或は未だ然らずんば、切に亂走するな、其れ、慕然として地水火風一散すれば、湯に落ちる螃蟹七手八脚なるが如し、那時言ふこと莫れ、道はず」と。

②間は無用、絡索は即ち纏きれること、何の役にもたゝぬ繩きれること。
③列異傳に「宋の康王韓憑、婦人を埋む、宿夕文梓生ず、鴛鴦雌各一あり、恒に樹上に棲む、晨夕頭を交へ、音聲人を感ぜしむ。夫妻の相親しむ情の切なるに比す。」
④無門圓三十三、趙州勘婆の公案に見ゆ。
⑤雲門文偃公案、「因みに僧問ふ、如何なるか是れ佛、云く、乾屎橛」と、佛の尊貴を問ふに、雲門乾屎橛と對ふ、乾屎橛は不淨をめぐふ毘にして、落し紙の代用をなすものなれば、尿の乾いた楯、或は乾いた屎橛等の説をなせども乾屎橛其の物に用なし、只だ雲門の眞意を會得するにあり。
⑥縁は因縁助縁などと熟して、事物を構成し、若しくは破壊する補助的原因なり、其の構成に積極的與件となるものを順縁と名づけ、消極的與件を逆縁と名づく。
⑦多寶如來所從の智積菩薩、將に本土に歸らんことを多寶如來に申す、釋迦牟尼佛之れを留め、文殊師利菩薩ありて相見て妙法を論説して、而して後に還るべしと告げ給ふ、時に文殊師利菩薩、千葉の蓮華に坐して、大海の沙彌羅龍宮より自然に湧出し、多寶、釋迦兩如來に敬禮して智積菩薩の所に往いて坐す、智積、文殊に問ふ、汝龍宮にて教化せし衆生幾何、釋迦、文殊師利曰く、沙彌羅龍王の女、年甫めて八歳なれども、智慧利根にして、能く菩薩にいたると、智積菩薩之れを信せず、時に龍女現前して佛を讚し、寶珠を獻じて我が成佛の速なる

を杜ちて、花を散する天女を退く。智海底無し、^①文殊法を説いて、珠を獻する華鮮を度す。涅にすれども縋まず、之れを鑽れば彌々堅し。清淨法身、奇石に漱ぎ流水に枕す。成等正覺、白雲を喝し青天を棒す。與麼の時節、什麼の七回八凸とか論せん、甚麼の五蓋十纏とか説かん。淨躰躰赤洒洒。妙又妙、玄又玄、者箇を認ること莫れ、那邊に轉過せよ。向上事有り汝が爲に敷宣し去らん。火把を擲つて、「臨濟の命根元不斷、一條の紅線手中に牽く。」

芳心禪尼の下火

「芳心芳心、過去心も不可得、現在心も不可得、未來心も不可得。祇だ箇の不可得の心、不可得の中、只麼に得たり。去れ去れ、本來東西無し、何の處にか南北有らん。若し眞の歸處を識らんと欲せば、山僧が一句を看取せよ。」花を移しては蝶の到るを兼ね、達磨も不識と道ふ。「咄一咄す。」

了善禪尼の下火

「了善了善、^②諸惡莫作、衆善奉行、^③鍔鋒頭上筋斗を翻す。衆善莫作、諸惡奉行、吹毛匣裏冷光を發す。畢竟什麼の諸惡とか説き、什麼の衆善と

こと此の珠を受け給ふよりも早からんと言ひ畢るや、忽然として男子に變成して、南方無垢世界に成佛して説法すと。

①晉書に「孫楚は十荆、操、卓絶爽邁、不群陸傲する所多し、羈曲の譽をわく、年四十餘、始めて鎮東軍事に坐じ、靈囀の太守に終りぬ、初め楚小時隱居せんと欲し、王濟に謂ひて、枕石漱流といふべきを誤りて、淋石枕泥といふ、王濟曰く、流れば枕すべきに非ず、石は漱ぐべきに非ずと、楚曰く、枕流は其の耳を洗はんとし、漱石は齒を嚙かん、欲するなり」と、故に之れを隱逸の意に用ふ。

②水を擲すれば月手に在り、梁の武帝三寶に供養して其の功德を問へば、達磨答へて不羈と、不羈の所又無量の功德あり、

か論せん。正與麼の時、變じて男子と成つて、^④即ち南方に往く、何を以てか驗と爲さん。火把を抛つて、「火裏の蓮華過界香し。」喝一喝す。

妙善禪尼の下火

「妙善妙善、呼喚すれども回らず、燈籠昨夜跳つて天台に上る。快活快活、奇なる哉奇なる哉。出生入死、放去收來、月白く風清し、鏡湯爐炭も吹いて滅せしむ。電卷き雷走る、劍樹刀山も喝して便ち摧く。大地寸土無し、何の處にか塵埃を惹かん。」火把を抛つて喝一喝す。

芳溪宗基禪尼の下火

芳溪露に和して秋風に碎く、我れは説く因縁の諸法空なりと、從來する所無く所去する無し、天に透る活路君が爲に通す。

石雲庵主太玄宗白居士の下火

「洞然明白の境に住せず、太虚空の外機輪を轉ず、天堂地獄鐵爐歩、火裏の梅花春を陶鑄す。夫れ惟れば、石雲庵主、晋後の徴士、周餘の黎民、一杯兩杯の春風、桃暗李明の麤俗を消す。二升三升の野水、草頭木脚底の人を愛す。目を間雲幽石に遊ばしめて、跡を柴陌紅塵に混す。或時は龐慧の亭に登つて、^⑤箴離の價を酬い、或時は遠公の社に入つて、香火の因を修す。西方界を念じて合掌し、北斗裏に向つて身を藏す。截鐵斬釘、昔生に非ず今滅に非ず。鍊金鍛玉、涅にすれども縋まず、磨すれど

るや、夢。

④烏塞禪師、白樂天に答ふる佛法の眞諦なり。

⑤龍女八歲成道、前に見ゆ。

⑥靈照女の因縁。

も磷かす。玄玄玄、佛を罵り祖を呵す。咄咄、比を絶し倫を超ゆ。金剛王光燦爛、昆侖奴黑鱗。然も恁麼なりと雖も、後昆を保祐する那一句、休上座爾が爲に指陳せん。火把を抛つて、「提不起今拈不出、山風溪月自家の珍。」

玉浦宗琳居士の下火

「湘中曾て這の琳琅を産す、烈焰堆頭忽ち光を現す、今日一錠に錠碎して看れば、嵩嶺雨過ぎて微涼を送る。夫れ惟れば、玉浦宗琳居士、心金石の如く、材棟梁を得たり。全機藏し難し、三尺の劍四海を清む、孤帆未だ挂けず、一葉の舟大唐を載す。南は其れ貧、北は其れ富。昔生せず、今亡せず。五十四年前、逆行順行、天堂を以て地獄と作す。五十四年後、左轉右轉、地獄を以て天堂と作す。加之、洋嶼祖翁の禪を扣いて、蚯蚓の毒に觸著す。維摩居士の病を示して、獅子の牀を掀倒す。默雷柱を破り、威風霜を掬す。活鱖鱖拘束無し、淨裸承當を絶す。此れは是れ宗琳居士、尋常受用底、別に新調有り、何ぞ宮商に落ちん。火把を擧して、「聞く麼、木人高く奏す還郷の曲、百億の須彌舞袖長し。」喝一喝す。

前の越州の太守西河梵照居士の下火

「吹毛雪を照して、勢凜然、生死元來兩邊を絶す、倒に西河の獅子に跨つて、一聲吼破す率陀天。」

共しく惟れば、前の越州の太守、名下の士と稱し、教外の禪に參す。兄弟田眞が家を興す、紫荆花發く、父子源君の府に侍す、碧梧枝連る。三玄の戈甲、齊しく照用を行じ、五位の槍旗、正偏を回互す。錯錯錯、猶ほ錯に就く。玄玄玄、玄と認ること莫れ。端的底、會す耶會せず耶。這箇の事傳か不傳か。向上の那一句、山僧が敷宣を聴け。火把を抛つて、「鐵蛇鑽れども入らず、木馬走つて煙の如し。」

壽岳宗永信男の下火

「百年三萬六千日、空空に合する時空空ならず、從來する所無く所去するなし、頭を擧すれば西畔夕陽紅なり。夫れ惟れば、壽岳宗永信男、桃花を見て靈雲の勤老に參じ、蓮社に入つて廬山の遠公を慕ふ。生也、寒雲幽石を抱き、死也、明月清風を拂ふ。轉身の一路吾れ他の爲に通せん。」火把を抛つて、「上攀仰無く、下己躬を絶す。」

義峯宗卓禪定門の下火

「卓然たる忠義層雲に薄る、魔宮百萬の軍を一掃す、從來する所無く所去する無し、頭を擧すれば西嶺又斜曛。夫れ惟れば、新物故、義峯宗卓

①臨濟の三玄三要をいふ。
②洞山良价禪師の五位頌の中、正偏五位頌をいふ、正中偏、偏中正、正中來、偏中至、兼中到をいふ、正偏五位、外君臣五位、功勳五位、王子五位之れを合せて五種、皆學人修行の階梯を示す、五つの機關なり。
③名字を打す。
④無寧、元豐、宋神宗の年號。
⑤匠石揮斤、斤を使ひし古の名人、莊子徐無鬼篇に見ゆ、郢人壘を其の鼻端に埒り、匠石をして之れを斲らしむるに、匠石斤を揮つて風をなし、隨して之れを斲らしむ、目を瞑にして手を恣にして、壘を盡して鼻傷はず、郢人立つて容を失はずと。
⑥楚氣は楚氣などと同じく亂るるをいふ、左傳に出づる故事

禪定門、武門の閥閥、蓋代の功勳、青苗法新なり。熙豐の末の争黨を厭ふ、丹心灰冷、唐虞の上に君を致さんことを願ふ。百年の榮を蟻垤に付し、千里の材を馬群に失す。加之、意氣堂堂、佛を殺し祖を殺す。趙王劍を好む、威風凜凜、凡を轉じ聖を轉す。郢匠斤を運らす、管に濟北の宗旨を滅するのみに匪ず、矧んや復た江南の楚氛を靜むるをや。如幻即空、芭蕉樹堅實無し。當位即妙、蔭荷林餘動を絶す。龐老の江水吸盡に和卻して、摩詰の雨華繽紛を靠倒す。眞俗不二、邪正分たす。然も恁麼なりと雖も、大休歇の田地に到らんと要せば、耳根を塞斷して汝試みに聞け。火把を抛つて、「夜來何の處の火ぞ、古人の墳を焼出す。」喝一喝す。

月心安生禪定門の下火

「生死涅槃大虚空、佛界と魔宮とを踢翻す、歸らめ歟臘月三十日、火裏の蓮華雪を帯びて紅なり。共しく惟れば、心月心安生禪定門、風流の太守、亂代の英雄、法社の金湯に因つて鷲嶺の付屬を忘れず。正傳の衣鉢を受けて、久しく龍安の祖風を慕ふ。其の父資つて始む、是の子終を慎む。自性本源、之れを清むれども激ます、之れを潤せども濁らす。平生の事業、入つては則ち孝有り、出でては則ち忠有り。黄巢過ぎて後、還つて劍を收得す。扶桑那畔高く弓を挂く、這裏に到つて什麼の眞諦俗

① 維摩經、入不二法門品第九に

見ゆ、文殊師利菩薩曰く、我が意の如きは、一切の法に於て、言も無く説もなく、示もなく識もなく、諸の問答を離る、是れを不二法門に入ると爲すと、於是、維摩詰默然として言無し、文殊師利菩薩歎じく曰く、善哉々々、乃至文字言語あるなし、是れ眞に不二法門に入るなり」と。

② 龍安寺の開山義天和尙なり。

諦とか説かん。什麼の有功無功をか論せん。羅籠すれども住まらず、電光も通すること罔し。然も與麼なりと雖も、頑石未だ點頭せざる以前の那一著有り。即今生公に呈示し去らん。炬を抛つて、「看よ、夜來金烏海東に出づ。」

德雲院殿通叟宗普大禪定門の下火

「功名四海の一英雄、今日看來れば春夢の中、最後の牢關留むれども住まらず、馬蹄去つて落花の風を逐ふ。共しく惟れば、德雲院殿、襟胸洒落、機智玲瓏、南昌禪兄に參得して倒に無孔笛を拈す。西の岡の凶賊を追討して、高く一張の弓を挂く、文を克し武を克す。孝有り忠有り。煩惱菩提、黄庭堅が泥犂獄に墮するを笑ふ。眞如解脱、白居易が兜率宮に歸るを欺く。忽ち邪正の途轍を離れ、頓に生死の羅籠を出づ。心觀通じ鼻觀通す。蟾桂三月の雪を吹く。佛見盡き法見盡く。牡丹閨年の紅を著く。了了了、了す可き無く、空空空、空に屬せず。然も與麼なりと雖も、向上宗乗の事、作廢生か研窮せん。火把を抛つて、「崑崙夜裏に走つて、丙丁童を驚起す。」

春谷永源禪定門の秉炬 逆卷氏

「無生の一大縁を了却して、本源自性曾て遷らす、臘人鍊出す安居の雪、熱鐵花開く火裏の蓮。夫

① 字は魯直、山谷と號す、秦觀、張來、晁補之と共に蘇門の四學士と稱せらる、宋の紹聖の初め、鄂州に知たり、章惇蔡京等の惡む所となり、謫せられて涪州別駕を授けられ、黔州に安置せられ、戎州に移され、尋いで坐せられて宜州に謫せらる、時に巧にして江西派の祖と稱す。
② 莊子にいふ混沌の意なり。眞黒闇なり。

れ惟れば、某名、常光寂爾、和氣溫然、文經武緯、才名を以て稱せらる。詞華言葉、和歌をして連ねしむ、綠蕪霜を吹く。或時は鷹を臂にし、犬を牽いて原野を愛す、青萍水に浮ぶ。或時は蝦を撈し、蜆を撈して深淵に臨む。世間の相を觀じて教外の禪に參す、生死の流を截つて寶劍匣を出づ。群魔の境を破つて聖箭、弦を離る。①有餘涅槃、無餘涅槃、波瀾を平地に起す。棒下の正覺、喝下の正覺、霹靂を早天に轟かす、成佛豈に靈運が後を待たんや。行道已に威音の前に在り、呼喚すれども回らず、泥牛戰つて海に入る。羅籠すれども住らず、木馬走つて煙の如し。逆順縱橫、卷舒自在、之れを仰げば彌高く、之れを鑽れば彌堅し。然も恁麼なりと雖も、後昆を保祐する底の一道の神咒、丙丁童子如何が敷宣し去らん。火把を抛つて、

①四涅槃の一、具には有餘依涅槃といふ、小乗行者、已に見思の二惑を斷盡すと雖も、尙ほ所依の肉身、殘餘して、未だ灰身滅智するに到らざるの位をいふ、無餘涅槃は之れに對して灰身滅智の極所に到達し、痕跡をとどめぬ境界をいふなり。

「揭諦波羅揭諦、夕陽は長く海棠の西に在り。」喝一喝す。

清源院殿了然廓公大禪定門の乘矩 大永乙酉仲冬九日

「少年四海英雄と稱す、今代麒麟第一の功、太虛空の地に落つるを待たず、倒に鐵馬に鞭つ月明の中。共しく惟れば、新捐館清源院殿了然廓公大禪定門、疾蹄未だ試みず、名狹高く沖る。其の源や水尾に濫觴し、其の府や日東を惣管す。張無盡末後の事を龍安に決す、連牀の夜話機相合す。鄭了然本來の面を洋嶼に呈す。入室暮請毒毒以て攻む。丈夫の出處異なりと雖も、大人の境界維れ同

じ。去年梅を探つて策を江南に定む、身黃瘴に染む。今歲柳を折つて別を洛北に惜む、聲蒼穹に哭す。象に騎つて鷓鴣の袴を脱し、犬を追ふて兎角の弓を押す。煩惱菩提、花を掃つて涼に坐し、井を汲んで醉を消す。眞如實相、根を尋ねて電を種ゑ、影を求めて風を栽う。此錯彼錯、錯錯錯、是空非空、空空空。白拈の金剛王意氣冷じ、青林の丙丁童子面門紅なり。從前の間絡索は、佗の廓公に還す、即今清源の那一滴、如何が君が爲に通せん。」火把を抛つて、「色色元來只だ舊に仍る、曉霜染め出す満山の楓。」喝一喝す。

龜策宗壽禪定門の下火

「幻生幻滅本來空、二十餘年春夢の中、鐵馬等間に鞭を著け去る、須彌百億落花の風。夫れ惟れば、龜策宗壽禪定門、塵霄の俊鶴、亂世の英雄、入江の家業を續いで細川の源公に奉す。佛魔を殺し盡して、青萍三尺の刃を淬ぐ。文武を學び得て、扶桑一張の弓を挂く。淨裸承當を絶す、玄沙阿鼻獄を破る。赤洒酒窠白沒し、白傳兜率宮に歸る。塵塵解脱、法々圓融。然も恁麼なりと雖も、向上の那一句、端的如何が通せん。」火把を抛つて、「尺二の眉毛燒卻了、丙丁童子面門紅。」喝一喝す。

溫室淨球禪定門の下火

「天球球せず本來圓なり、一段の靈光大千に輝く、七十二年間受用、風

①柳枝を折るは別れを惜み、後會を期するなり。
②白傳は白樂天をいふ、白樂天開成の初め太子太傅となる、故にいふ。
③漢土、進士の試験に及第して一番となりたるものいふ、

に和して吹き落す火中の蓮。夫れ以れば、某名、功名已に遂げ、徳齒兼
ね全し。忠孝の状元、父父たれば子子たり。騎射要術、妙の妙、玄の玄。
僉曰ふ、稼穡民種と、箕裘家傳と稱するに足れり。倒に三尺の吹毛を提げ
て眼四海を空す。高く六字の密號を唱へて舌梵天を挂ふ。蓋し淵明、遠公
の社を辭すと雖も、遂に韓愈が 大顛の禪に參することを得たり。是の故
に聖に在つても増さず、小樹は小皮裹む。凡に在つても減せず、大樹は大
皮纏ふ。威音の外に突出す、何ぞ法身邊に墮せん。與慶の時節、生死涅槃、
芭蕉葉上に愁雨無し。菩提煩惱、夜合花前日又西。燈籠跳つて露柱に入り、
虚空走つて鐵船に駕す。快活自在意氣凜然たり。這箇は是れ淨珠禪門、眞
履實踐の處、別に向上の一竅有り。山僧急に霹靂の鞭を著けん。火把、地
を打つて、叱、泥牛耕破す瑠璃の地、木馬飲乾す明月の泉。」

妙法寺殿前の豊州の太守義海超公大禪定門の秉炬

「一起直入す涅槃城、鐵馬金鞭太平を致す、滴り盡す袈裟限り無き涙、
花に感じ鳥に驚く兩三聲。夫れ惟れば、新捐館妙法寺殿、葛原の枝蔓芥
河の茂英、其の祖昔東關に軍す。名下に虛士無し。此の郎今西塞に屯す、

胸中に甲兵有り。將に謂へり、化蝶の莊子と。何ぞ 臥龍の孔明を事とし、丹心一寸の灰、葵花の影
日に随つて轉す。吹毛三尺の劍、珊瑚の枝月に和して棲ふ。塵塵解脫、箇箇圓成、畢竟如何。空に非
す假に非ず、元來只だ寧し。滅無く生無し、青混沌鼻孔を穿つ、火金剛眼睛を怒らす。前件は是れ妙
法寺殿、三十七年眞履實踐の處、枯腸、底を盡して傾け、重ねて秘密神咒を説いて、香孩兒營を保護
せんと欲す。火把を抛つて、力団希、咄咄、虎山色に逢ふて威憐を長す。」

宗得禪定門の下火

「生也不可得、何物か恁麼に來る、死也不可得、何物か恁麼に去る。宗得宗得、四大分離して何の
處に向つてか去る。若し復た未だ會せずんば、且く山僧が恁麼に擧するを聴け。月落ちて元來天を離
れず、花外敲き残す鐘數杵。喝一喝す。」

柏堂常盛禪定門の下火

「涅槃の明鏡臺を打破して、清寥寥地纖埃を絶す、消息無き處消息有り、佛法南方一點の梅。夫れ
惟れば、常盛禪定門、進退禮を以てし、短長材を掄ぶ。國家全盛の日に在つて、人間殘夢の纒なる
ことを了る。是の故に栖雲の禪を扣いて柏堂と號す。雪消して山骨露る。惠遠師を慕ふて蓮社を修す、
池成つて月自ら來る。情泯し識盡く、形枯れ心灰す。朝三千暮三千、喝轟棒打つ。春六十秋六十、
葉飛び花開く。忽ち眼光落地に當つて、直に得たり意氣雷を走らしむることを。常盛常盛、恁麼に去

宋史に三揚に狀元たり。此の
處秀でたるをいふなり。
①念佛を唱ふるをいふ、これ白
蓮社の惠遠法師のはじむる所
のものなり、然れども現今の
他力教の念佛と稍其の趣を異
にす。
②菅原下二世石頭希運禪師の法
嗣、初め石頭に啓發せられて
心要を得、後潮州の靈山に住
す、韓退之、唐の元和十四年、
潮州の刺史に貶せられ、靈山
の廬に造り、問ふ、弟子軍州
事繁し、省要の所師に一句を
乞ふ、師良久して顧みず、時
に三平侍者たり、乃ち師牀を
叩くこと三下、門風甚だ高俊
なり。
③名士の下なり。
④孔明もと南陽の草廬に臥し、
人之れを臥龍といふ、他日雲
を得、正に昇天すべきを云ひ
たるなり。

れ、慙麼に去れ。呼べども回らず、呼べども回らず。何ぞ回らざるや。喝。
「更に山僧が舉哀を聴け。」火把を抛つて、「臘月の扇子跨跳を打す、燈籠壁に沿うて天台に上る。」

徳叟全勝禪定門の下火

「百勝百戰一英雄、收め得たり従前汗馬の功、汗馬功成つて追へども及ばず、涅槃城破る落花の風。夫れ以れば、全勝禪定門、胸次、礪腕心内玲瓏。受衣安名、蚤に相國の王和尚に參見す。秉炬說法、晩に松源の岳贖翁に逢著す。芭蕉意外の雨を罵り、牡丹庭前の紅を指す。三世の諸佛を呑んで、龐居士が江を吸ふを屑とせず、口尚ほ乳臭。百萬の魔軍を降して、曾て馬伏波が虜を破るを輕んず、代異に名同じ。地獄を怕れず、何ぞ天宮を愛せん。目を捏して花を生ず。生也錯、死也錯、錯を以て錯に就く、都來錯。吹毛雪を照し、人已に空す、法已に空す。空を以て空を遣る、畢竟空。燈籠跳つて露柱に入り、石女仰いで蒼穹に哭す。然も慙麼なりと雖も、後昆を保祐する底の活句、如何が他の爲に通せん。」火把を抛つて、「丙丁童子來つて火を求む、夜半金鳥海東より出づ。」

天屋淨幸禪定門の下火

「不幸の顔淵、三十四年、轉身の一路、臘雪天に連る。夫れ以れば、某名、天下の奇士、區中の良賢、三十四年前、不生を以て生の義と爲す、寒雲幽石を抱く。三十四年後、不死を以て死の義と爲す、火裏に清泉を汲む。快活自在、頓に塵縁を離る。鐵雞追へども及ばず、木馬奔つて煙の如し。淨幸淨幸、末後の一句、錯つて果然。」炬を抛つて、「呈露す梅花眞の面目、夜來の月は屋頭の邊に在り。」

南叟宗參禪定門の下火

「佛法元來參す可き無し、善財何事を強ひて南を尋ぬ、非を知る四十餘年の後、錦は是れ山花水は是れ藍。夫れ以れば、某名、久しく禪旨に參じ、俗談を打せず。四十餘年前、佛を罵り祖を呵す。四十餘年後、女を育し男を生ず。生死の陣を破つて、周宋が鐔を試む。雪裏の芭蕉樹に依倚として、火中の優鉢曇に彷彿たり。這裏に到つて什の無明煩惱とか説かん、什の劍樹刀山喝して則ち碎き、饒湯爐炭吹くに則ち堪へたり。黒漫漫、白漫漫。前三三、後三三。更に眞の歸處有り、即今甘はんや甘はざらんや。」炬を抛つて、「當頭霜夜の月、任運澄潭に落つ。」

①臘扇は冬月の扇、夏日に其の使命を全うし、時のよろしきに相休歇するなり。雲門の語に、「扇子跨跳して三十三天に登り、帝釋の鼻孔に築着す」とあり。

②大にして高きをいふ。

③馬援、字は文淵、後漢の茂陸の人、少くして大志あり、嘗て賓客に謂つて曰く、丈夫志を立つる、窮しては當に益々堅かるべく、老いては當に益々壯なるべしと、建武中拜して、伏波將軍となる、交趾を撃ちて還る、曰く、男子、要は當に邊野に死し、馬革を以て屍を裹むべきのみと、武陵五溪蠻反す、援、年八十餘、自ら行かんと言ひ、鞍に據り顯厲して以て用ふべきを示す、帝笑つて曰く、嬰饑たるかな、此の翁やと、進んで壺頭に警す、利を失ひて病みて卒す。

④顔淵年二十九、髮盡く白し、三十二にして卒す、有徳短命、顔淵に比するなり。

⑤孔徳章が北山移文に曰く、「列嶽争ひ譁り、攢峰竦聳す、游子の我を欺くを悔み、人の以つて赴甲する無きを悲む、故に林壑を盡くなく、澗壑をて欺ます云々。」之れ周産倫なるもの、北山に隠れ、後に又詔に應じ、海鹽縣の令となり、此の山を過ぎんとすると、孔生之れを鄙みて山壘の意を假りて之れを移したる文なり。

⑥黒白、明暗、智愚、迷悟などに同じ。

禪寶禪定門の下火

「這箇の一寶形山に秘す、乾坤大地載せ起さず、^①百雜碎矣鐵團圓、火裏の牡丹新に葉に吐く。禪寶禪門、還つて這箇の一寶を識るや麼や。吾れ爾に隠すこと無し、本來圓成、豈に直指を假らんや。是の故に凡に在つても滅せず、涅槃會上の廣額兒、屠刀を抛つ。聖に在つても増さず、^②普通年中の赤鬚胡、隻履を失ふ。大藏小藏虛空に逼塞す、有利無利行市を離れず。木人歌を唱ふれば石女耳を側つ。快哉快哉、已まなん矣已まなん矣。禪寶禪寶、生より死に到るまで只だ是是。」炬を抛つて、「不是不是、露、春風桃李、^③一以て之れを貫せり。曾子の曰く、唯唯と。」

蘭庭常秀禪定門の下火

「苗にして秀です一庭の蘭、初節は移り易く晩節は難し、生鐵の崑崙空裏に走る、青天白日黒漫漫。夫れ惟れば、蘭庭常秀禪定門、黃金鑊を出でて白玉盤に點す、霹靂空に當る、兎角の弓を石鞏に學ぶ。清風月を拂ひ、犀牛扇を鹽官に還す。眞俗諦を超え、佛祖の瞞を絶す。觀面提持、梨花溶溶、柳絮淡淡、皆證圓覺。菱角尖尖、荷葉團團。龍山頻に成道と叫ぶ。鶴林假に涅槃を示す。轉身の一路多端に涉ること

① 鐵團圓の如く粉碎して、其の數無量なること、粉碎又は饒多の意を示す、會元九、鴻山の章に、「支沙曰く、大小の鴻山、那裏に一間せられて、直に得たり百雜碎。」
② 普通は梁の武帝の年號、こゝは達磨をいふ。
③ 論語里仁爲美に曰く、「子曰く、參乎、吾が道一以て之れを貫く、曾子曰く、唯と、子曰づ、門人問ふて曰く、何の謂ぞや、曾子曰く、夫子の道は思想のみ」と。
④ 犀牛扇、前に見ゆ。

莫れ。」火把を抛つて、「五月紅爐落梅の雪、丙丁童子面門寒し。」喝一喝す。

金溪久玉居士の下火

黃金擊碎して玉團圓、鈍未だ拈せざる先隻を著けて看よ、看よ看よ歸り來つて一事無し、遠山雨過ぎて夕陽殘る。

蘭谷宗秀禪門の下火

春蘭秋菊秀でて芳を聯ぬ、惡芽根を長す七十霜、今日他の爲に意氣を添ふ、地獄と天堂とを^①掀翻す。

趙于禪門の下火

大千世界壞して空と成る、此れより泥洹一路通す、花落ち花開く是れ常の事、杜鵑誤つて恨む^②五更の風。

月江宗光禪定門の下火

一刀兩段太虛空、閃電光の中己躬を絶す、到り得歸り來つて別事無し、荷花水を照して夕陽紅なり。

悟岳宗徹禪門の下火

本來自性本來無、大徹は他の大丈夫に還す、三尺の吹毛會て動せず、月明掛けて碧珊瑚に在り。

宗祐禪門の下火

① 掀翻はひつくりかへすことな
いふ。
② 五更は夜中を五分して最後の一分を五更と名づく、夜明け頃なり。

瀉山靈祐一頭の牛、鼻繩を脱却して高く^①牟と叫ぶ、石火電光追へども及ばず、乾坤處として蹤由を覓むべき無し。

某甲の下火

百年壽盡くる底の時節、即ち是れ金剛不壞の身、丙丁童子を蹈倒して看よ、野花啼鳥一般の春。

禪珍の下火 鼓を拍する藝士

須彌の槌虚空の鼓を撃つ、白日青天吼えて雷の若し、翻して無生の那一曲と作る、木人火裏に^②三臺を舞ふ。

高仲宗功禪門の下火

従前汗馬の功を用ひ盡して、佛界と魔宮とを平げ来る、凱歌一曲還郷の路、雨過ぎて芙蓉朶朶紅なり。

宗玉禪定門の下火

一顆の白玉、價直三千、磨せず琢せず、元自ら天然。

古雲慈心大姉の下火

「刹那^③三萬六千日、身心を放下して君自ら看よ、觸著すれば紅爐雪一點、丙丁童子面門寒し。夫

れ以れば、古雲慈心大姉、不來の相にして来る、鐵壁透開す雪片片。不見の相にして見る、黒山^④輾出す月團團。地獄天堂間家具、生死涅槃相干らず、向上に轉じ去れ、多端に涉ること莫れ。正與麼の時、畢竟如何が平安を得去らん。火把を抛つて、十洲春盡きて花凋殘。」

梅屋理常大姉の下火

「堅固法身常住の相、旋嵐嶽を倒にすれども曾て遷らず、擊香遍界斯れより起る、紅白花開く火裏の蓮。夫れ惟れば、梅屋理常大姉、旨を言外に領じ、手を那邊に撒す。

活捉生擒、無著、洋喚の室を敲く。戒皮定肉、總持、少林の禪に參す。千萬劫の羈鎖を脱し、一大事因縁を了す。淨裸承當を絶す、泥牛耕破す瑠璃の地。赤洒酒拘束没し、木馬飲乾す明月の泉。向上の一路佛祖不傳、然も恁麼なりと雖も、別に眞の歸處有り。試みに山僧が敷宣を聴け。火把を抛つて、「露堂堂活鱖鱖、鍼眼の魚跳つて天に上る。」喝。

春溪智雲大姉の下火

六十九年世紛を忘る、珠簾玉案醉つて^⑤醺醺、轉身自在寔白没し、喝散す率陀青色の雲。夫れ惟れば、春溪智雲大姉、始從貞節、末後感懃、則天萬乘の尊、大雲山中眞彌勒と稱す。摩耶千佛の母、毘藍園裏老迦文を産す。元來生死に干らず、歷劫何ぞ功勳を論せん。處處眞處處眞、前臺花發

① 牟は牛の聲なり。
② 三十拍の曲の名、劉公が嘉話錄に曰く、三臺に須を送るは蓋し北齊の文宣、銅雀臺を殿つて別に二箇の臺を築くに依り、宮人手を拍つて呼んで臺に上り、因つて須を送るしと、我が國に傳はれる樂に三臺臺といふものあり。
③ よし一白歳生き延びた所で、三萬六千日、一寸の間である。

④ 輾出はめぐりいだしなり。
⑤ 醉ひ心地よきこと。
⑥ 藍毘尼園のこと、又降誕會に用ひる花見堂のこと。

いて後臺に見る。刹刹爾り刹刹爾り。上界鐘清うして下界に聞く。聞く麼、十方薄伽梵、一路涅槃門。

瀉山理祐大姉の下火

「百歲一場の春夢婆、聲前に薦得するも竟に如何、諸佛出身の路を豁開して、生鐵の崑崙雲外に過ぐ。夫れ以れば、某名、身を烏有と觀じ、口に貝多を誦す。電光根無し、牢關の句を末後に透る。空華實を結ぶ、阿鼻の業を刹那に滅す。休休休、涅槃の鏡重ねて照さず。咄咄咄、吹毛の劍急に須らく磨す可し。正與麼の時、大姉還つて聞く麼。」炬を抛つて、「丙丁童子摩訶を念す。露。」

雲峯宗秀禪定尼の下炬

「孤峯高く秀で、勢崔嵬、六月火雲雪を吹き來る、若し無寒暑の處を知らんと欲せば、炎天白からず一枝の梅。夫れ惟れば、雲峯宗秀禪定尼、自性を識得して、聖胎を長養す、月白く風清し。有佛の處留むれども住まらず、山長く水遠し。無佛の處、喚べども回らず、曹溪の鏡を打破して、大地纖埃を絶す。別に還郷の那一曲有り。」火把を抛つて、「崑崙象に騎つて三臺を舞ふ。」咄一咄す。

桃岳慈緣禪定尼の下火

「一夢三生石上の縁、風花二十有餘年、限り無き春を傷ましむる意を傾けんと欲すれば、小玉聲の中月西に落つ。夫れ惟れば、桃岳慈緣禪定尼、丈夫の氣を負ひ、新婦の禪を瞞す。摩耶竺土の仙を産す。風無きに波を起す、鹽官檀林后を接す。山を隔てて煙を見る、兎子懷胎月を望み、犀牛躑躅して天に上る。生死即涅槃、毛端巨海を呑む。涅槃即生死、火裏に清泉を汲む。與麼の時、龍女珠を獻す。鄉關萬里、閻老棒を喫す。朝打三千、混沌の眉、兩ノを掃ひ、崑崙の鼻、半邊を失す。然も恁麼地なりと雖も、後昆を覆蔭する底の一句、試みに山僧が敷宣を聽け。」火把を抛つて、「楊柳絲絲收不得、煙に和して染め出す。玉欄の前。」喝一喝す。

月溪妙光禪定尼の下火

「靈光不昧古來今、龍女の寶珠滄海の琛、南方の無垢界を照破す、曉天の殘月西岑に落つ。夫れ惟れば、月溪妙光禪定尼、臺に當る明鏡、鏡を出づる精金、物有り天に先つ、男相に非ず女相に非ず、根を尋ねて電を種る、佛心を傳へ祖心を傳ふ。當陽直指、鉢水に鉢を投す。加之、三界火宅の中を出でて、羊鹿に駕せず、三種の滲漏底に徹して、何ぞ商參を隔てん。洒々地落落地、自己の胸襟を豁開す。然も恁麼なりと雖も、向上の一著、如何が參尋せん。」火把を抛つて、「石女舞成す長壽の曲、三

①薄伽梵。世尊と譯す、佛の敬稱、衆徳を總攝し、有を有する至尊の義なり、此の語元來多義あり、或は有徳に名づけ、或は巧に諸法を分別するに名づく、或は名聲あるに名づけ、或は能く淫怒癡を破るに名づく、斯の如く多義なるが故に、古來之れを譯せずして原音の儘用ひらる、五種不翻の一なり。

②經をいふ、印度にて昔時貝多羅樹の葉に經文を書せり、故に之れを經に代名するなり。
③背觸に涉らざる中の不犯の當體、即ち本分の安住所なり、陰陽不到の處、生死邊邊の境といふに同じ。

④もくれんげをいふ。

⑤洞山三滲漏ともいふ、滲漏は煩悩の換語、一には見滲漏、二には情滲漏、三には語滲漏、是なり。

千里外知音を絶す。喝一喝す。

桂巖宗林禪定尼の下火

「少林の尼總持を瞞御して、鐵鉢頭上身を轉じ來る、紅粉を塗らず娘生の面、露は白し芙蓉八月の枝。夫れ以れば、某名、秀でて實らず、逝く者は斯の如し。夢幻空花卅四歳、工夫綿密二六時、繡口錦心、遠録公の九帶集を著すを嫌ふ。檀郎玉女、勤蕪苴の小豔の詩に參するを笑ふ。生死を截斷して寸絲を挂けず。甚だ希有甚だ希有。也太奇也太奇。自性圓成、荷葉團團鏡似も圍く。全機顯脱、菱角尖尖錐如も尖きなり。恁麼に看取して、多岐に涉ること莫れ。別に向上の事を知らんと要すや、火把子の重ねて之れを説くを聽け。炬を抛つて、
●火簀なり。

月江永秋信女の下火

「露柱懷胎果して何物ぞ、黄金鑄出す鐵牛の機、秋風吹いて無生國に入る、地獄天堂一葉飛ぶ。夫れ以れば、某名、鴛鴦の社を結び翡翠の幃を擁す。晚參を許さず、老婆楊岐の笠を戴く。已に夜半を過ぐ。石女黃梅の衣を裁す、大人の相を具し、丈夫の威を逞しうす。菩提の因菩提の果、明明歷歷。法身の用法身の體、堂堂巍巍。江月照し、松風吹く。標格瀟灑暮鐘の聲、秋樹の色彷彿依倚たり。把住するときは、則ち乾坤震裂し、觸著するときは、則ち崑崙光輝く。是の故に鬼官冥主、倒退三千里。

加之、文殊普賢二鐵圍に貶向す。這裏に到つて、什麼の幻生幻滅とか説かん。什麼の眞是眞非をか論せん。然も恁麼地なりと雖も、高山流水知音の者稀なり。永秋信女、還つて會す麼。若し未だ會せずんば、試みに山僧が指揮を看よ。」炬を抛つて、「江上晚來晝くに堪へたる處、漁人一蓑を披し得て歸る。」咄。

榮中常盛信女の下火

「人間の盛事夢中の花、白日青天眼花すること莫れ、限り無き春風吹けども入らず、一枝の混沌未開の花。夫れ以れば、某名、心貞節を存し、富雜華を闘はしむ。洞水の流を汲んで、黒漆桶裏に墨汁を盛る。林際の境を奪つて、瑠璃階上に赤沙を布く。無生の話を打して、靈照女を欺き、活手段を具して、慈明婆を笑ふ。奇なる哉奇なる哉。圓覺の梅一枝兩枝早し。會すや會すや。眞如の竹三莖四莖斜なり。這箇の時節、丙丁童舌を吐き、虚空神牙を咬む。若し寸歩を動せば、萬里天涯。」炬を抛つて、「看よ看よ、一把の骨頭挑げ去つて後、知らず明月誰が家にか落つ。」咄一咄す。

受溪理粟大姉の下火

「氣生する時稟くる所異なり、百年滅後本來空、空空に非ず也た色色に非ず、礪水藍の如くにして花自ら紅なり。」

朝光妙權信女の下火

萬事人間權花の如し、朝榮暮辱本來空、端無く拈出す。還郷の錦、七月青楓半葉紅なり。

了わう一大姉いっだいの下火げか

了わう一切了いっさい、大地黒漫漫たいちくくまんまん、心頭の火しんとうのひを滅めつ卻きやくすれば、舊ふるに依よつて孟春寒まうしゅんさむし。

宗照童女そうせうどうにょの下火げか

「涅槃生死ねはんしんじを離はなれ、煩惱菩提ぼんぷだいを絶せつす、頭かうべを擧あげれば殘照有ざんせうあり、元是れ住居ぢゆうきよの西にし」咄とつ。

二五二

錦にしんを着て故郷こきやうに歸る、即ち九品の安養界あんやうがいに生なるのである。

掩 壙

攝州普門せつしゅうふもんの住持明巖永公座元ぢゆうぢいめいがんえいこうざげんの掩土えんど 正月四日しやうげつにっか

「花前拂袖けのまひらきそでして春風はるかぜに別わかる、行脚あんぎやく今年八十翁ことしはちじふさう、趙州てうしゅうの關候くわんこう子を撥轉はつてんして、涅槃ねはんの路みちは普門ふもんより通とす。夫れ惟ただれば、明巖永公座元めいがんえいこうざげん、後學こうがくの甘露かんろ、先宗せんしゅうの巨叢きよそう、幽谷蘭芳ゆうこくらんぱうは、遙はるかに金地こんぢの派下はかに列らる。舊房松偃きゅうぼうまつえんす、間に慈雲じゆんの山中さんちゆうを愛あいす。客作かくさくの漢かんを接せつして、主人公しゆじんこうと稱しょうす。一段いちだんの風光ふうくわう、是日ぜじつと説とき非日ひじつと説とく。三應さんおうの侍者じしや、大空たいくうと喚よび小空せうくうと喚よぶ。依倚いゐとして相似あひにたり、彷彿はうふつとして同じからす。加之か、行ぎやうも亦禪またぜん、坐ざも亦禪またぜん、胡孫布袋こそんぶたいに入る。生しやうも也た錯しやく、死しも也た錯しやく、石馬紗籠せきばしやろうを出いづ。這裏しやうりに到いたつて、什麼なんの欲界色界よくがいしきがいをか論ろんせん。什麼なんの佛宮魔宮ぶつきやうまきやうをか管くわんせん。天てんに倚よる長劍ちやうけん、磨礪まろに勞らうせず。此これは是れ明巖座元めいがんざげんの活機雄くわつきゆう。」
① 鏝子くわくしを以て地ちを打うつこと一いち下げして、「山僧別さんじゆうべつに龜毛きまうの箭せんを架かし、兎角とかくの弓ゆみを拈つし去さらん。」鏝子くわくしを抛なつて、「鏝頭邊くわくとうへんの事直じぢきに看取かんしゆせよ、正月木犀雪げつもくせいゆきを吹ふいて濃こまなり。」

① 掩土に同じ、死體の全身を埋葬すること、土葬ともいふ、龜を甕中に投じ、石蓋を以て覆ひ、其の罅隙を粉し、土を掩ふて深く埋むるを法とす。

② 關候子、具には向上の關候子といふ、門のこと、佛祖屋裡の要機をさす、關と同意に用ふ。

③ 三應、又は三喚、侍者の別稱なり。

④ 鏝子は鉄なり。

宗泉大徳の掩土

七星光 冷じ一龍泉、魔壘平げ來つて凱旋と叫ぶ、最後の牢關留むれども住まらず、須彌跳り上る率陀天。夫れ惟れば、宗泉大徳、常に阿字を觀じて、獨り法筵に坐す。清淨の行者涅槃に入らず、翡翠踏翻す荷葉の雨。破戒の比丘地獄に墮せず、鷲鷲衝破す竹林の煙。心を金胎界に印し、身を鑽頭邊に轉す。如何が是れ轉身の處。生に生無く、滅に滅せず。是、是ならず、然、然ならず。眞歸の那一句有り、山僧が布宣を聽取せよ。頭を擧すれば殘照在り、元是れ住居の西。

顯徳院文伯祐豐法印の掩土

十方一路涅槃門、足を擧すれば機前忽ち踢翻す、試みに看よ龍圖龜易の外、曉來雪ならんと欲す早梅の村。夫れ以れば、顯徳院文伯祐豐法印、古器墨洗、天球粹温。禪祠 蒸嘗鬼神に賽す、官、尸祝を設く。高僧祖禰、昭穆を排す、徳兒孫に及ぶ。百王百代の廟を守り、八雲の八重垣を詠す。黃石書を授く、兵を莽草の野に伏す。青海箭を傳へて弓を扶桑の暎に挂く。翅だ六藝の芳潤に漱、のみに弗す、況んや復た萬物の根

①梵語、字母の第一字母にして、秘密佛敎にては一一の梵字音につき、特殊の玄理を説き、一切萬有は本來不生のものなるが故に、また不滅のものなりといふ。阿字不生の深理を顯示するは、阿字なりとす、この本不生の阿字を觀する觀法を阿字觀といふ、法隆寺古契體の梵字は乳の如く記せり。

②蒸嘗は冬夏に天神地祇を祭ることなり。

③尸祝、尸は神主(かたしろ)なり、祝(はふり)は祭時に辭を讀む者なをいふ、轉じて又崇拜の義ともなる。莊子に「子胡ぞ相與に之れを尸して祝し、之れを社して稷せざるか」とあり。

④素兼男尊の御詠歌なり、八雲たつ出雲八重垣妻こめ八重垣つくる此の八重垣を。」

①圓鏡は羅紗などに同じ、生髮煩惱をいふ。

②昨、昨、又はグと發音す、昨は吼に同じく怒聲、又牛の鳴聲を現すに用ふ、多くは二字續けて昨々とす、臨濟錄に「如何なるか、是れ露地の白牛、杏山曰く、昨々」とあり。

③天地四方之れを六合といふ。

④又は轉風、轉婆娑、吠藍婆、迅猛風と譯す、速力迅急にして至るところ皆悉く壞散する風、鐵圍山外に吹き、鐵圍山之れを防ぎて須彌四洲に來らしめずといふ。

⑤椿、莊子にある八千歳を一春とすといふ椿樹、名字によりて打出するなり。

⑥昔公の時に「桃李もの言はず昔誰か栖む」と、また康頰が父親頼が舊居を訪ふ歌に「ふるさとの花のものいふ世なりせば、いかに昔のこととは

源を窮むるをや。加之、龐老の機關を具するときは、則ち西江水、四海の禪流を合して吸盡す。思大の ① 罔繒を出づるときは、則ち南嶽峯、三世の諸佛に和して平吞す。來時口無し、葉落ちて根に歸す。然も恁麼なりと雖も、更に向上の一竅有り。山僧、行に贈るに言を以てせん。② 鎌子を劃一劃して、「③ 昨々、黃金鑄出す鐵崑崙。」

紹歡上座の掩土

「聖電一獻五十年、本來の眞相曾て遷らず、等間に歸り去る長空の外、黃鶯を聽いて杜鵑と作すこと莫れ。夫れ以れば、某名、全機穎脫、本體如然。菩薩の初地に居らず、威音以前に超越す。恁麼不恁麼、展ぶるときは則ち ④ 六合に充塞す。不恁麼恁麼、收むるときは則ち大千を控聚す。生死即ち涅槃、紅蕉雨に敗る。無明即ち佛性、綠竹煙を含む。了了、玄玄。試みに看よ崑崙鐵船に駕することを。」棺を打して、「水流れて元海に入り、月落ちて天を離れず。」

太年妙椿の掩土

般若房

毘嵐昨夜、莊椿を倒す、一夢人生七十の春、桃李若し言はば吾れ即

ち問はん、誰れか能く北斗裏に身を藏すと。

見宗上座の掩土

正宗滅して晴驢邊に向ふ、意を得て春風に鐵鞭を著く、涅槃眞の妙相と認ること莫れ、梅梢月白し屋頭の天。

永高上座の掩土

鐵山萬仞 太高生、一脚機前に踢倒して行く、別に眞歸の條活路有り、綠陰月は暗し杜鵑の聲。

雪巖瑞書記の掩土

喚び起す瑞巖の公主人、杜鵑枝上數聲頻なり、分明に喚び得て那の處にか歸る、一問花開く四月の春。

菊仙宗英藏主の掩土

宗門騰茂す富英の聲、二十四年都べて旅程、本有の家郷好し歸り去れ、雲老樹を埋めて杜鵑鳴く。

前住繼孝高軸壽尊尼藏主の掩土

「元是れ吾が宗の妙摠持、少林の皮髓忽ち分離す、珠簾玉案綠陰の雨、杜宇一聲歸去來。夫れ惟れば、前住繼孝高軸壽尊尼、蓮華色を慕うて蕊菝尼と作る。錦繡の光閭里を照し、袈裟の影 禁池に映す。未だ先宗を忘れず、蚤に西源の室に入つて、受戒屢隣好を修す。晩に東海の門を扣いて機を

① 甚だ高慢の意にて、高く止つて居る、高い、高いなどと云ふ意である。
② 禁裡の池なり、御所の池なり、御殿に出入するをいふ。

投す。大丈夫の志氣を具して、新婦子の禪師を罵る。涅槃、般涅槃を雙林に示す、薪盡きて火滅す。文殊、夏安居を三處に度る。舟行けば岸移る。莖草上に梵刹を現じ、鉞鋒頭に須彌を走らしむ。夢幻空華、雪裏の芭蕉、摩詰が畫、錢湯爐炭、炎天の梅葉、簡齋が詩。玄玄の處に住まらず、了了の時を認むること莫れ。咄。鐵子、地を割して、活埋了也、滿地の蒺藜。」

永昌開基寶聚榮珍大師の掩土

七十四年般涅槃、鏝頭邊冷にして相看を打す、虚空骨碎く夜來の雪、埋没す梅花玉一團。

春庵妙榮禪定尼の掩土

「一榮春夢老婆心、六十五年刹那に同じ、隻履前村西畔の路、等間に雪花を踏碎して過ぐ。夫れ惟れば、春庵妙榮禪定尼、機を斷つ孟母、竹に泣く湘娥、工夫密密綿綿、倒に金鉞を把つて佛を繡にす。胸襟洒洒落落、高く明鏡を掛けて魔を降す、室内に病を示す、杯中蛇に非ず。或時は大雲山に入つて大雲經を誦す、則天后の慈氏と稱するが如し。或時は淨土宗を慕うて淨土の教を學ぶ、韋提希の彌陀を唱ふるに似たり。鹿麀解脫國、

① 鐵泉、女英、舜の九嬖に崩じ給ふを慕ひ、又湘水の邊に至りて逝くと、涙、竹に灑いで竹皆斑となると。
② 晉の樂廣、河南に守たりし時、客ありて共に呑む、以來久しく來らず、其の故を問へば、嘗て共に酌みし時、盃中蛇あり、心之れを惡む、遂に病むと、乃ち先に酒を餐せし所に於て、又飲ましむ、蛇ありやと、曰く、あり、即ち角弓の蛇影なるを語れば、病立ちどころに癒ゆと。
③ 則天武后、姓は武、名は曩、もと唐の太宗の才人なりしが、後高宗の后となり、政權を專にす、高宗崩じて中宗立つに及び、遂に中宗を廢して其の弟睿宗を立て、益々權を擅にし、遂に睿宗を廢し、自ら帝位に即き、則天皇帝と稱し、國を周と號す、在位十

處處安樂窩。生死無根、梅瘦せて春を占むること少し。真如不變、庭寛く月を得ること多し。明白裏に留むれども住まらず、窮玄の處也た須らく呵すべし。妙榮妙榮、鏝頭邊の事は君が會するに任す、後昆家を興す端的如何。鏝を抛つて、「喬木依然として今尚ほ在り、風石白を吹いて摩訶を念す。」喝一喝す。

前の武庫德叟宗澤禪定門の掩土 淡路の島田氏

「澤廣くして山を藏す也太奇、大機大用現前の時。鏝を擧げて、鏝頭未だ擧せざるに活埋し了る、一片の落梧雨と爲つて吹く。夫れ以れば、某名、胸武庫を開き、策雄基を定む。業を小笠原に繼ぐときは、則ち箭新羅國を過ぐ。迹を淡山巖に託するときは、則ち弓、扶桑の枝に挂く。才名惜む可し、逝く者は斯の如し。菩提涅槃、是れ什麼の繫驢橛ぞ。真如解脱、更に亡羊の岐を認ること莫れ。石火も及ばず、閃電も猶ほ遅し。鏝子、地を打つこと一下して、「叱、倒に鐵馬に騎つて須彌に上る。」

香林紹覺禪定門の掩土

「大覺の涅槃場を掀翻して、凜凜たる威風當る可からず、太虛空に和して埋卻し了る、一犁雨過ぎて暑花香し。夫れ惟れば、香林紹覺禪定門、脚實地を踏み、氣諸方を壓す。三十四年前勇を好むときは、則ち

鴻門樊噲が盾を砥る。三十四年後病を示すときは、則ち獅窟維摩の牀に臥す。直に生死の縛を截斷して、倒に金剛王を提起す。教を離れて禪無し、昨日法華の遺徳を拾ふ。禪を離れて教無し、今朝煨桂の餘芳を傳ふ。密密密、凡聖を通せず。玄玄玄、封疆を把定す。木人屈と叫び、石女腸を回す。這箇は且く措く、更に還郷の那一曲有り。來れ吾れ汝が與に商量し去らん。鏝子、地を打つこと一下して、「扶桑國に大唐の鼓を撃てば、百億の須彌舞袖長し。」咄一咄す。

二品前の亞相天覺雄公大禪定門の掩土

「高山流水沒絃琴、宮商角徵の音と作すこと莫れ、試みに聽け無生の那一曲、秋風月を拂つて松陰に落つ。共しく惟れば、二品前の亞相天覺雄公大禪定門、樂花禮葉、談藪詞林、書諫言を納る。五雲の上、堯天の日を仰ぐ。才衰職を補ふ、九野の外、傳岩の霖を洒ぐ。在家の菩薩、無相に相を現じ、儒門の知識、以心傳心、生死即ち涅槃。長河を攪いて酥酪と成す。涅槃即ち生死、大地を變じて黄金と作す。石虎頻に哮吼し、木馬走つて駸駸たり。會すや、喚べども回らず留むれども住まらず。萬岳千峰尋ねるに處無し。」喝一喝す。

無住善住禪定門の掩土

「生死元來住處無し、爍迦羅眼纖埃を絶す、一犁の春雨晴を吹き過ぐ、滿地の落花綠苔を埋む。夫れ惟れば、無住善住禪定門、文武の鞅を掉ひ、棟梁の材を負ふ。五十三年前、西京の牡丹、惟

六年、中宗位に復し、后を廢し、尋いで卒せり。
③ 驢を繫ぐ杖なり。
④ 樊噲は沛公の臣なり、嘗て鴻門に項王沛公と會するや、沛公の事急なるを聞き、盾を擁して軍門に入り、項王をして遂に手を出さなからしめたり、世に鴻門の會とて名高し。

れ富み惟れ貴し。五十三年後、南柯の槐樹、且つ樂み且つ哀む。假合の四大分散、涅槃の四柱忽ち摧く。靈山會上に圓頓速疾の法を説き、少林門下に單傳直指の才を用ふ。牢關破るゝ時、留むれども住まらず、機輪轉する處、喚べども回らず。然も與麼なりと雖も、別に向上の那一竅有り。百尺竿頭に歩を進め來れ。鐵子を抛つて、水底の木人鐵笛を吹けば、雲中の石女三臺を舞ふ。喝一喝す。

輝岳杲公禪定門の掩土

「名は高し亂代の一英雄、匹馬單槍戰功を立つ、兜率の泥犁春夢の裏、等間に吹き醒す落花の風。夫れ惟れば、輝岳杲公禪定門、精神矍鑠、機智玲瓏。病維摩、毘耶に臥す、花は室内に散す。死せる諸葛、仲達を走しむ、星營中に隕つ。骨を埋んで黃壤に朽つと雖も、胸を槌つて猶ほ蒼穹に哭す。竺乾の猛將五千の兵書を説く、佛界魔界を掃蕩す。林際の厮兒三玄の戈甲を施す、人空法空に逗到す。涅槃の窠窟に墮せず、忽ち無明の羅籠を出づ。與麼の時節、江月照し江風吹く。塵塵解脫、春山は青く春水は綠なり。法法圓融、赤條條、金剛圈を透過し、浮髀髀、栗棘蓬を吞卻す。此れは是れ杲公禪定門、三十三年受用底の問事なり。後昆を保祐する那一句、即今君が爲に通せん。鐵子、地を打つて、鐵子口吧吧地に説く、夕陽は長く我が西に在りて紅なり。喝一喝す。

玉室道玖禪定門の掩土

「無滅無生眞の涅槃、都盧大地黑漫漫、彌陀西方界に在らず、身心を放下して君自ら看よ。道玖道玖、恁麼に會取せよ。佗の瞞を受くること莫れ、三界火宅不樂不安。是の故に大乘の根を接して、達磨窟中に隻履を遺下す。多羅藏を翻じて、迦葉門前に刹竿を倒卻す。燈籠跳つて露柱に入り、虚空裂けて磨盤を走しむ。機關脫落底の時節、枯木龍吟消して未だ乾かず。錯錯。山僧別に好消息有り、萬古一江風月寒し。」

久芳宗椿禪定門の掩土

「大椿一萬六千秋、都べて南華夢裏の遊に付す、野外鳥啼いて人見えす、樺花半は照して夕陽收まる。夫れ惟れば、久芳宗椿禪定門、十手の指す所、一人尤を抜く。源公の幕下、勝つことを決し籌を運す。眞門俗門、蓋し蠻觸の蝸角を争ふが如し。佛界魔界、而も漢楚の鴻溝を割くに似たり。吹毛三尺太平州を定む。與麼の時節、旋嵐嶽を倒し、夜壑舟を藏す。生と説き死と説く、錯錯。玄と談じ妙と談す、休休。活埋了也。鐵子を抛つて、然も是の如くなりと雖も、法身上の事如何、他の爲に酬いん。人は橋上より過ぐ、橋は流れて水は流れず。喝一喝す。」

- ① 牡丹は花の富貴なるものと周茂叔の蓮説に出づ、取つて言なす。
- ② 常、樂、我、淨の四徳を云ふ。
- ③ 泥犁。地獄、妄落に同じ。
- ④ 諸葛亮、武侯なり。
- ⑤ 厮は、しもべ、召し使などと意なり、臨濟の法流を酌むものなす。
- ⑥ いが栗なり。

- ① 枯木は、古、靜、正位を明し、龍吟は今、動、偏位を示す、枯木龍吟は古今裂破、動靜一如、正偏互の當體を表す語、香嚴懸燈大師、因みに僧問ふ、如何なるは是れ道、師曰く、枯木龍吟と。
- ② 椿、春秋各々八千歳合せて一萬六千歳、前に見ゆ、南華は莊子なす。
- ③ 漢楚の境界を定めしこと。
- ④ 傳大士の頌に、空手助頭をとる、步行水牛に騎る、人橋上より過ぐ、橋は流れて水は流れずと、動靜の二相を超越せる上の見所なり、東山水上行、青山常運の歩等の語に同じ。

基成宗立禪定門の掩土

「坐脱立亡自由を得たり、虚空迸裂して萬機休す、送行の一句吹毛の劍、朶朶の芙蓉秋を擗著す。夫れ惟れば、基成宗立禪定門、洛陽の年少、江左の風流、金粟如來毘耶城に現す。丈室に病を示す白蓮道人、眉山の地を卜して二子尤を抜く。箕裘の業を繼いで以て末命を寄す。香火の社を結んで前修に愧づること莫し。釋迦の富、彌勒の慳、花間夢を作す碧胡蝶。徳山の棒、臨濟の喝、柳下に禪を談す黄栗留、小果を方等に呵することを笑ふ。大乘を神州に接することを瞞す。文武庫内八寶八珍、金に非ず玉に非ず、生死海中一出入。車ならず舟ならず、已に煩惱の斷すべき無し、寧ろ菩提の求む可き有らんや。諸方尋常活下火。這裏祇だ鈍鏝頭に還す。」
 ① 鎌子を擲下して、「別別、還郷の古曲如何が唱酬せん、少林の無孔笛を吹いて、陝府の鐵牛を驚走す。」

東昇宗旭禪定門の掩土

「曉旭雲を出づ桑海の東、佳城玉を埋めて響玲瓏、轉身自在通霄の路、歩歩踏蹴す兜率宮。夫れ惟れば、東昇宗旭禪定門、吳牛月に喘ぎ、燕馬風を追ふ。古の世音耶莘野の伊尹、僉曰ふ、耕叟と。今の韓愈也、應陵の歐陽自ら醉翁と號す。四海賢輔を收む、九州農功を先んず。六十餘年の先、

① 世説に「滿奮風を畏る、晉の武帝の坐にあり、北窓に瑠璃屏を作る、實は密にして疎に似たり、奮舞する色あり、帝之れを笑ふ、奮答へて曰く、臣は猶ほ吳牛の月を見て而して喘ぐが如し」とあり、吳牛は水牛なり、唯だ江淮の間に生ず、故に之れを吳牛といふ、南土暑多し、此の牛熱を畏る、月を見て是れ日かと疑ふ、故に月を見ても則ち喘ぐと、成語記に見ゆ。

淨髣髴、涅槃窠窟を離る。六十餘年の後、赤洒洒、生死の羅籠を脱す。恁麼不恁麼、靈雲老未徹在。不恁麼恁麼、龐居士心空と叫ぶ。向上還つて事有り、即今君が爲に通せん。鋤を抛つて、「一口に吸盡す西江水、洛陽の牡丹新に紅を吐く。」

桂雲昌公禪定門の掩土 三宅氏

匹馬單槍嬰鏢として輕し、當陽打破す涅槃城、君が爲に指點す轉身の路、梅雨風に和して晚晴を送る。

椿翁棟久居士の掩土

「久遠劫來生滅に亘らす、五十九年只だ一概を得たり。椿翁椿翁、得る底那箇の一概ぞ、世々家聲を傳へ、茲に晚節を保つ。維摩居士の病を示して、牀を移して雲に臥す。能因法師の風を慕うて、簾を捲き雪を哦す。花落ちて夢醒む、春鐘響絶す。只だ這の一概に憑る、心地汗馬を收む。甚麼の功無功をか論せん。袖裏青蛇を藏す、甚麼の徹未徹をか管せん。只だ箇の一概、向上の惡鉗鎚に觸る。鐵に點じて金と成し、金に點じて鐵と成す。百了千當、七回八凸。這箇は且く置く、甘蔗氏、四十九年一字不説。久椿翁五十九年、只だ一概を得たり。何か優り何か劣る。山僧今朝手に信せて拗折す、是れ同か是れ別か。」
 ① 鏝を抛つて、「別別、珊瑚枝枝月を擗著す。」

① 能因は京都の歌僧、俗名を構永愷といふ。遠江守忠望の子にして、兄、肥後守元愷に養はる、性和歌を嗜み、藤原長能に就いて歌道を學び、これに師事す、世に和歌の師あるは、蓋し師に始まるといふ。後に攝津の古曾部に居りしより、古曾部の入道の稱あり、彼の人口に膾炙する名歌「都なば置とともに出でしかど秋風ぞ吹く白河の關」は、實に師が詠にかゝる。

法雲宗護禪定門の掩土

「平生命を致して官家を護す、五十六年無賴積、色即是空空即色、活埋す雪内の牡丹花。夫れ以れば、某名、勇を以て撓むこと無かれ、富んで奢らす。閃電の機を具して、慈雲の大禪佛を拜す。甘露滅を消して、瑞泉の破袈裟を拂ぐ。水底の木人類に絶叫し、溪邊の石女暗に驚嘆す。生死涅槃、鈍鳥の蘆葦に栖むが如し。鏝湯爐炭、香象の芭蕉に觸るゝに似たり。這裏に到つて甚麼の三祇百劫とか説かん、甚麼の萬別千差をか論せん。更に末後の好消息有り。試みに鉄子の些々を著くるを聴け。鉄を抛つて、萬里の長空一聲の雁、夜來月に和して平沙に落つ。」

清芳宗源禪定門の掩土

「一踢に踢蹴す生死の源、一拳に拳倒す涅槃門、虛空地に落つる底の時節、西山を驚起して雲外に奔しむ。夫れ惟れば、清芳宗源禪定門、世縁終に没し、晩節存し難し。富貴一場、聚蚊を金谷に會す。如幻三昧、胡蝶を漆園に迷はす。無位の真人、是れ什麼の乾屎橛ぞ。正法眼藏、什麼の破沙盆にか較らん。淨裸裸、赤洒洒、明皎皎、暗昏昏。別に眞履實踐の處有り。土掘子の偈言を説くを聴け。鉄を抛つて、「扶つては斷橋の水を過ぎ、伴つては無月の村に歸る。」喝一喝す。

⑤ 積は篋に同じ、無頼積は役にたゝぬ舟といふ意。

⑥ 古語に聚蚊雷を成すの言あり、群小をいふか、金谷は、李白が桃李園序に出づる「金谷の酒數にやらんとある金谷をさすか。

⑦ 禪師自ら云ふなり。

常智禪定門の掩土

「智劍常に磨す三尺の霜、佛魔何ぞ敢て鋒銜を犯さん、涅槃城破れて後の消息、松竹山に満ちて晚涼を送る。夫れ以れば、某名、臥龍の室を扣き、群馬の場に馳す。久しく輓車に服いて、羊を懸けて狗肉を賣る。親しく鐵棒を喫して、鳴を打つて鴛鴦を驚す。滅せず生せず、芭蕉に愁雨無し。忠有り孝有り、葵花太陽に傾く。石女俄に涙を洒ぎ、木人類に腸を斷つ。六十六歳殘夢猶ほ香し、直に得たり萬劫の鎖を脱卻し、四大の牀を掀翻することを。然も是の如くなりと雖も、這裏別に轉身の路有り、試みに鉄子の擧揚するを聴け。地を打つこと一下して云く、「陰陽不到の處、一片の好風光。」

虛岳宗空童子の掩土

「空元色に非ず色空に非ず、白玉樓成る黄壤の中、啼鳥一聲春夢斷ゆ、天堂地獄落花の風。夫れ惟れば、虛岳宗空童子、字を學んで法有り、書を讀んで功無し。命也天に匪すや、顔子の尼父に先づに類す。苗にして秀です、童鳥の楊雄に於けるが如し。甘を分つて母を念ひ、血を吐いて翁を驚す。一十三年前、生死無き處に生死を示す。一十三年後、圓通を出でて又圓通に入る。淨裸裸拘束没し、赤洒洒羅籠を絶す。

⑧ 買説、風原を弔ふ文に曰く、「罷牛に驚駑し、塞驢を驂となす、驥は兩耳を垂れて輓車に服し、章甫屨に薦き漸くして久しかるべからず」と、蓋し賢愚其の位を顛倒するを云ふなり。

⑨ 圓機活法に「李長吉將に卒せん、夢に一人の一版書を持するを見る、曰く、天上の白玉樓成る、君を召して記を爲らしむと、しばらくありて氣絶す」と。よりて文人の死をしかいへども、後世一般に此の故事を用ふることなれり。

宗空宗空、別に眞歸の那一句有り、作麼生か研窮し去らん。鏝を抛つて、「昨夜金鳥飛んで海に入る、曉天舊に依つて一輪紅なり。」喝一喝す。

宗珠童子の掩土

「老蚌胎中珠を産出す、鐵鎚擊碎して形模を絶す、寒衣裏ます殘宵の夢、小朶梅の西落月孤なり。宗珠童子、墓地に歸り去れ、佗途に涉ること莫れ。尙し未だ然らすんば、善財何ぞ敢て再見に勞せん。佛法南方一點も無し。」喝一喝す。

宗田禪定門の水葬

五無間を掀翻し、一心田を耕破す。泥牛走つて海に入り、木馬躍つて天に上る。正與麼の時、宗田禪定門還つて會すや。縱然ひ一夜風吹き去るも、只だ蘆花淺水の邊に在らん。

小鳥斃る、掩土

卵生と胎生とを脱卻して、羅籠すれども住まらず飛行を得たり、間佛祖に和して活埋し了る、縁水青山嘘一聲。

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之三 終

① 司馬文明が江村即事の詩に、「釣を罷めて歸來船を繋ぐす、江村月落ち正に眠るに堪へたり、縱へ一夜風吹き去るも、只だ蘆花淺水の邊に在らん。」
② 卵、胎、濕、化之れを四生といふ。

國譯圓滿本光國師見桃錄卷之四

遠孫比丘衆等重編

預請の乗炬

西隱秦公座元、預め 百年後の乗炬の語を求む

「透過す百二十の秦關、無所從來那處にか還る、石火電光追へども及ばず、等閑に陽倒す鐵圍山。共しく惟れば、西隱秦公座元、形容枯槁、手段褻頑、大龍を滄海に制し、靈鷲を塵寰に接す。或時は孤峯頂に向つて草庵を盤結す、口三世佛を呑む。或時は一心田を開いて荆棘を剷除す、業、五無間を滅す。這裏に到つて、甚麼の徳山の棒、臨濟の喝をか用ひん、什麼の釋迦の富、彌勒の慳をか管せん。然も是の如くなりと雖も、向上の一曲子を聽かんと要すや。丙丁童子高く擊節す、虚空唱へ起す菩薩蠻。」咄。

東陽院頭月峯珠公首座の下火

預請

① 死後といふが如し、尙ほ預請なれば、百年思の意をも含む、隨分面白い流行である。人間も此の邊迄徹すればよろしいが、それに反して此の時代の天下の形勢は所謂戰國時代で我が國二千五百年の青史上、最も亂脈を極めたる時にして、君臣父子の道の棄れたること是れより甚だしきはなし、彼の春秋時代に長く相類

「一顆の明珠本自ら圓かなり。徑雲深き處龍淵を出づ、鐵鏡擊碎して後の消息、臘月花開く火裏の蓮。夫れ惟れば、東陽院殿月峯珠公首座、權有り實有り、黨も無く偏も無し。」
①東陽の清規を學ぶときは、則ち野外に綿蕝す。南方の佛法に參するときは、則ち風顛を擒住す。首座道を行す、威音已前、生死即ち涅槃、水流れて元海に入る。涅槃即ち生死、月落ちて天を離れず。正與麼の時、什麼の聲聞果、緣覺果とか説かん、什麼の如來禪、祖師禪をか論せん。若し未だ然らずんば、火把子の敷宣を聽け。火把を抛つて、「此れは是れ長生眞の秘訣、冰桃實を結ぶ歳三千。」喝一喝す。

賢仲啓聚首座預請百年後秉炬の語

「地獄天堂一聚の塵、塵塵解脱す本來人、好し西嶺千秋の雪に和して、鐵鑄の梅花火裏の春。夫れ惟れば、賢仲啓聚首座、流を截る香象、浪を衝く錦鱗、自を利し他を利す、膝下の黄金之れを用ふれども盡くる無し。佛を殺し祖を殺す、眉間の寶劍磨すれども磷かす。涅槃の明鏡を打破し、生死の苦輪を脱卻す。箇箇轉處に立在す、密密要津を把定す。舜若多神面皮黒し、燈籠口を開いて笑鬨鬨。然も恁麼なりと雖も、向上の一路如何

す、有爲轉變の世の現象として又然るべき事にや。

②大龜なり。

③釋迦の婆娑往來八千遍、四十九年の横説縱説の演法に對し、彌勒菩薩は龍華樹の下に成佛後、只だ三會の説法をなされて入滅し給ふ、故にその富と慳とを軽く言はれたるなり。

④東陽德輝禪師、元統三年秋、順宗の詔を奉じて百丈清規を修す、龍翔寺の住職大詠、又勅を奉じて之れを校正し、師又重れて命を奉じて之れを編修すといふ、今日行はる、勅修清規は即ち是れなり。

⑤梵語 Śūnyatā なり、空性と譯す、二釋あり、其の一は虚空の實體を指して空性と名づく、空即性の持業釋なり。其の二は、諸法の空無を指して空といひ、空の性を空性と名

が指陳せん。「火把を抛つて、溪聲は廣長舌、山色は清淨身。」喝一喝

鳳林超公書記の下火 預請

「泥洹の一路轉身の時、石火光も猶ほ鈍遲、地獄天堂昨宵の夢、風驚き花落つ杜鵑の枝。夫れ惟れば、鳳林超公記室禪師、濁世の鳥跋、叢林の白眉、肘後の符を懸けて禍を避くと雖も、禪本草を讀んで未だ醫することを得ず。佛日慧日頃に癡暗を破す、大藏小藏僅に瘡痕を拭ふ。積翠強ひて三關を設く、屋頭の山色豈に清淨に非ざらんや。」
①永明誤つて六字を唱ふ、門前の湖水即ち是れ寶池。凡聖朕迹を留めず、自他何ぞ毫釐を隔てん。露髀髀赤條條、全く菩提の證す可き無し。清寥寥、白的、寧ろ生死の離る應き有らんや。脚下實地に踏著す、機前須彌を踢倒す。緊要の時節、向上の鉗鎚子、如何が提持し去らん。「火把を抛つて、紅爐放出す鐵鳥龜。」喝一喝す。

秀岳梵才書記の下火 預請

「此れは是れ宗門直指の才、當機踢倒す涅槃臺、無陰陽の地春風轉ず、火裏の優曇菜葉開く。夫れ惟れば、秀岳梵才書記、翰墨の任に居して棟梁の材を負ふ。多福の語頭を提撕して、三年受用、只だ竹を栽う。少室の祖意を漏泄して、一日の工夫、半は梅と爲る。生也、石火光中留むれども住ま

づく、空三性の依主釋なり。眞如の體を指す。

②又鳥鉢に作る、優鉢羅(蓮花)の略、花の名、青蓮花、紅蓮花、鶯花などと譯す。

③永明延壽大師、六字の念佛を坐禪の一方に於て唱道す。

④朕はゆひめなどの意ありて痕跡と云ふに等し。

⑤明々了々の意なり。

らす。死也、閃電機裏喚べども回らず。向上の鉗鍵下に觸れて、虚空消し鐵山摧く。這裏に到つて何物か恁麼に去り、何物か恁麼に來る。書記、還つて會す麼。」火把を抛つて、「燈籠壁に沿うて天台に上る。」

大初最公藏主の下火 預請

「最初の一句、最後の牢關、直に透過して看れば、綠水青山 夫れ以れば、大初最公藏主、道肥えて貌瘦せ、年老いて心間なり。大小の藏鑰を掌り、東西の序班に列る。方袍の 菴菴、圓頂の梅檀、位、十地已上に超ゆ。前輩の芍藥、後生の 茉莉、時二佛の中間に丁る。因は則ち因を用ひ、果は則ち果を用ふ。愚にして愚ならず、頑にして頑ならず。破草鞵三文兩文、雲無心にして軸を出づ。折拄杖七尺八尺、鳥飛ぶに倦んで還ることを知る。此れは是れ藏主平生著力底、若し復た向上に轉せば、文殊、普賢其の境界を失し、徳山、臨濟猶ほ塵寰を隔つ。這裏に到つて妙と説くも、罪過罪過。禪と道ふも、慙顔慙顔。手を長空の外に撒す、望む可し攀づ可からず。然も恁麼なりと雖も、虎斑は見易し、誰か人斑を窺はん。」火把を抛つて、「聞くや、雪峰は南趙州は北、還郷の曲菩薩蠻。」咄一咄す。

掬月軒主徳良藏主預請秉炬の語

「良男矣。七佛の師、倒に金毛の獅子兒に跨る、忽ち轉身を解する底の時節、一聲吼裂す五須彌。夫れ惟れば、掬月軒主、先聖を重せず、何ぞ舊規に拘らん。仙山五色の瑞雲、不老の藥を鍊る。寶泉一滴の甘露、破戒の厄に洒ぐ。應變自在、殺活時に臨む。三千刹界の袈裟、横に拽き豎に拽く。十二街頭の尺八、順に吹き逆に吹く。拄杖舞を作し、燈籠眉を開く。如來禪、祖師禪、水を掬すれば月手に在り。煩惱濁、衆生濁花を弄すれば香衣に滿つ。畢竟是れ何物ぞ、端的相知らず。此れは是れ藏主平日の作略、更に格外の玄機有り、試みに山僧が提持するを看よ。」火把を抛つて、「咄咄咄、萬煖爐中の鐵蒺藜。」

迦葉佛、釋迦牟尼佛、是れ也。
①名字を騰出するなり。于良史の春山月夜の詩に曰く、春山勝事多し、賞玩して夜歸るを忘る、水を掬すれば月手にあり、花を弄すれば香衣に滿つと、自然妙得の義にたとふ。
②蒺藜ははまびし、藥草也、三角の刺ある實を結ぶ、鐵蒺藜は鐵にて其の形に作れる兵具。

慶實藏主百年後の下火

「實相眞如體本然、百年三萬六千遷る、端無く棒頭に觸著し去つて、東海の鯉魚跳つて天に上る。實藏主實藏主、涅を不生と言ふ、翡翠踏蹴す荷葉の雨。實藏主實藏主、槃を不滅と云ふ、杜鵑啼破す竹林の煙。」火把を抛つて、「向上の一路、佛祖不傳。」喝一喝す。

明谷叅公侍者預請秉炬の語

此郎廿五白雲の端、倒に驢兒に跨つて活路寛し、少林の無孔笛を吹き起して、還郷の一曲萬年

歡。夫れ惟れば、明谷叻公侍者、青燈燒き盡し、黄卷讀み残す。南山に一條の鼈鼻蛇有り、擒縦與奪。西川に八角の烏頭子を出す、甘苦辛酸。其の如來禪に參することは易く、蓋し祖師意を會することは難し。即佛即心、何を彌勒五月の降誕を待たん。生に非ず滅に非ず、疾く瞿曇雙樹の涅槃に入る。鐵團圓百雜碎、百雜碎鐵團圓。虚空筋斗を翻し、日月朱欄に轉す。火把を抛つて、會すや、叻侍者叻侍者、門前の刹竿を倒卻せん。喝一喝す。

賀屋玄慶禪人の下火 預請

「金襴傳ふる外の事如何、慶喜の間端葉波を瞞す、刹竿頭に向つて身を轉じ去る、教海と禪河とを踏躡す。慶禪人還つて會すや、若し會得すと道はゞ、達磨、禪を會せず。梅瘦せて春を占むること少し。若し不會と道はゞ、瞿曇已に成道。庭寛くして月を得ること多し。會と不會と都來是れ錯、滅と不滅と畢竟佗に非ず。淨裸裸承當を絶す、空空空の時、眞も也た立せず、赤洒酒窠白没し。玄玄玄の處、妙も也た須らく呵す可し。水は竹邊より出で、風は花裏より過ぐ。喝一喝す。石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」

三翁德惠庵主の下火 預請

「竺乾の猛將陣堂堂、惠劍光寒し三尺の霜、生死涅槃秋一夢、火中の菡萏覺めて猶ほ香し。惠庵主、惠庵に承當せよ。倘し復た未だ承當せずんば、頻に小玉と呼ぶも只だ檀郎を要す。轉語の魯直帷帳中に坐す。或時は燕寝螺甲、沈水隨身の兜率、袈裟角に裏む。或時は魚行酒肆娼坊、看るや、山色清淨、聞くや、溪聲廣長、轟直に轉じ去れ、思量に涉ること莫れ。凡聖に通せず、封疆を把定す。然も是の如くなりとも雖も、向上の田地に到らんと欲せば、山僧爲に擧揚せん。火把を擲つて、昆侖奴齊しく怒發して、門外の金剛を推倒す。」

柏庭祖永尼首座の下火 預請

「永劫の無明淨法身、法身覺了すれば卻つて塵を生ず、到頭霜夜前溪の月、龍女の寶珠磨すれども磷かす。夫れ惟れば、柏庭祖永尼、市中に隱をトし、屋裏に春を藏す。松源の餘波を海東の外に傳へ、蘭溪の剩馥を河内の民に施す。蓋し以れば、吾が首座、靈樹に到る。尼長老の聖因に住するに勝れり。有餘涅槃、無餘涅槃、花間夢を作す雙胡蝶。大善知識、小善知識、棒頭敲き出す玉麒麟。迷悟を立せず要津を把定す。慈麼の時節、慈麼の阿鼻の依正とか説かん、什麼の苦海の沈淪をか論せん。生涯洒洒落落、心地歴歴明明。此れは是れ祖永大姊、三萬日を斷送して、十二辰を使ひ得る底。別に西來意を會せんと要せば、

① 雪峰衆に示して曰く、南山に一條の鼈鼻蛇あり、汝等諸人に須らく好看すべし。長慶曰く、今日堂中大いに人有つて喪身失命す。僧支沙に舉似す、沙曰く、須らく穢兒にして始めて得べし、然も是の如くなりとも雖も、我れは即ち不恚。僧曰く、和尚作麼生。沙曰く、南山を用ひて作麼かせん。雲門拄杖を以て峰の面前に據向して怕るる勢を作すと。雪峰は南山に一條の鼈鼻蛇あり、諸人適切に看取せよといふ、長慶慧稜と支沙師備と雲門文偃師との三師玩弄して、一は蛇の全成を是認し、一は蛇の全成を併吞し、一は蛇をして活氣あらしむ、自ら心中の主人公を借りて蛇となす、心の作用一に弄するもの、活手に待つものを示す。

② 梵語「ツアツラ」の譯、金中最剛の意、堅と利との二義あり、堅は萬物能く是れを碎破し得ざるが故に、利は能く萬物を擊破するを以てなり、多くは佛智、大智慧、摩訶般若等に譬ふる語なり。

柏樹子の成佛せんことを待つて、汝に向つて指陳せん。」火把を擧げて、「虚空筋斗を蹴し、燈籠笑つて悶悶。」火把を抛つて、「因。」

久庵桂公尼首座の下火 預請

「少林の嬖桂久昌昌、眞丹と搏桑とを蓋覆す、昨夜毘嵐忽ち吹き倒す、百年一夢醒めて猶ほ香し。夫れ以れば、久庵桂公尼、精神掬す可し、意氣當り難し。最後の牢關是れ放開、是れ捏聚、本來の面目。濃抹に非ず、淡粧に非ず。生死を截断して金剛王を抛つ。塵塵無垢世界、歩歩涅槃會場。青山綠水、體露 眞常、此れは是れ大姉の間受用。若し向上に轉じ去らんと要せば、別に山僧が擧揚を聴け。」火把を抛つて、「黄金鑄出す崑崙鐵、火裏の龜毛數尺長し。」咄一咄す。

宗銀尼首座の下火 預請

「天堂地獄假銀城、遊戯神通傀儡棚、春夢一場頻に喚起す、曉鶯枝上花を出づる聲。夫れ惟れば、寶生尼寺住持宗銀尼首座大姉、晚節保ち難し、坤徳、利貞なり、少林門下の總持肉を得たり。法華會上の菩薩名を求む。一枝の佛法的的、百草の祖意明明。山として雲を帯びずといふこと無し、人人具足、水有り皆月を含む。箇箇圓成、須彌燈

王佛、鍼孔に入り、勝熱婆羅門の火坑を出づ。會す麼。」火把を抛つて、「自己清淨を認むること莫れ、直に毘盧の頂を踏んで行く。」喝一喝す。

檀溪宗香尼首座の下火 預請

「法身堅固本來の香、郁郁乎として十方に薰徹す、試みに心頭の火を滅却して看よ、鑊湯爐炭自ら清涼。夫れ惟れば、檀溪宗香尼、温面輒語、石心鐵腸、散花の天、維摩の黙黙を勘破す。半杓の水、末山の嬢嬢を賺過す。無明即明、梅檀木を焼いて猗蘭の臭氣を奪ふ。諸相に非ず、桃李の實を貪つて梅花の孤芳を忌む。出生入死、窠臼を存せず、戒皮定肉、分張するに一任す。正與麼の時、丙丁童子を撈倒し、閻羅大王を棒殺す。丈夫の作略、誰れか写て抵當せん。然も恁麼なりと雖も、更に眞歸の處有り、山僧が擧揚を聴取せよ。」火把を抛つて、「玉樓翡翠を巢はしめ、金殿鴛鴦を鎖す。」咄一咄す。

桃谷周仁尼首座の下火 預請

「千年の桃核舊時の仁、惡鉗鎚に觸れて點塵を絶す、靈雲不疑の地に到らんと欲せば、花は開く空劫以前の春。夫れ惟れば、桃谷周仁尼、預め未來の苦果を懼れて、頓に佛性の三因を了す。靈山の

- ① 心頭を滅却すれば火も又涼しの意。
- ② 高安天恩の法嗣、筠州の人。
- ③ 天台宗にて法華經の意によりて立つる三種の佛性、一には緣因佛性（智慧を緣助して益々明かならしむる六度等の修行）、二に了因佛性（眞如の理を照了し、證悟する智慧）、三に正緣佛性（一切の衆生が具へたる眞如の理、これ正しく佛となるべき本性なり）をいふ。

法華會中に臨むときは、則ち無垢の勝光佛を壓倒す。洋嶼の巖竹篋下に觸るときは、則ち秦國大夫人を冷笑す。或時は南方界に化を戢め、或時は北斗裏に身を藏す。赤洒洒、紅絲綿を斷す、活鱖鱖、鐵磨の輪を碎く。然も與廢なりと雖も、千里不傳の處、大休歇の地に到るを要すや。試みに火把子の指陳を聴け。火把を抛つて、雲破れ月來つて花影を弄す、寒山手を拍して笑閻閻。「喝一喝す。」

玉英 祥瑤尼首座の下火 預請

「大乘の法器魯の 瓊瑤、本有圓成君自ら看よ、未だ一鏈を下さざるに 鐘碎し了る、青山月上つて影團團。夫れ惟れば、玉英 祥瑤尼、竹の節有るに似、環の端無きが如し。春嶺梅に入る、村獺猿の虛能、明鏡を打破す。雪庭柏を埋む、野狐精の達磨、空棺を蓋卻す。悉有佛性、佗の嘴を受けず。淨裸裸、承當を絶す、甚の眞如解脱とか説かん。赤洒洒、窠白沒し、什麼の菩提涅槃をか論せん。然も恁麼地なりと雖も、向上還つて事有り、心肝を吐露し去らん。」火把を抛つて、「石女雲中に舞を作し、木人萬年歡を奏す。」咄一咄す。

桃雲宗悟尼首座の下火 預請

「迷悟を分たす凡聖を絶す、百歳の光陰春夢の中、春夢醒め來つて一年無し、桃花舊に依つて面皮紅なり。夫れ惟れば、桃雲宗悟尼、心鏡清淨、戒珠玲瓏、一氣を略轉して、劉鐵磨の作略を具す。」

五障を掃除して橋臺彌の遺蹤を躡む。智行運動、理事圓融、文殊に二文殊無し。胸中吉祥の宅、彌勒に半彌勒有り、天上の兜率宮。了了の時、霞碧落を穿ち、玄玄の處、月清風を拂ふ。會すや、石火も及ぶこと莫く、電光も通すること罔し。火把を抛つて、喝一喝す。

花屋宗因尼首座の下火 預請

「這の野狐精不味の因、大雄峯下禪身を解す、端無く蹈倒す涅槃の窟、鐵樹花開く火裏の春。夫れ惟れば、花屋宗因尼、金剛の圈を透り、鐵磨の輪を轉す。濁世の糝糠を掃除して、馬祖の篋箕跳不出。形山の一寶を秘在して、龍女の明珠磨すれども磷かす。幻生幻滅、線路を放開す、不去不來、紅塵を截斷す。更に送行の句有り、山僧が指陳を聴け。」火把を抛つて、「夜深けて一片 虛檻の月、寫し出す梅花面目の眞。」露。

春芳宗椿尼首座の下火 預請

莊椿一萬六千歳、昨夜毘嵐吹倒し來る、試みに聴け無上眞の曲調、花間の胡蝶三臺を舞ふ。夫れ惟れば、春芳宗椿尼、形枯木の如く、心死灰に似たり。兜率の三關を透過するとき、則ち葵花眼無うして日に隨つて轉す。臨濟の一喝に觸著するとき、則ち芭蕉耳無うして雷を聞いて開く。鑊湯爐炭一時に滅し、劍樹

①馬祖道一禪師、篋箕を作る家に生れたるを以て、馬祖を馬篋箕と稱し、轉じて大馬祖の口唇の篋箕に似たる點より、又馬祖の言説をも馬篋箕といふ。
②格子より洩る、月。
③兜率從悅禪師、三つの機關を設けて學人を接得す、一、撥草參玄は只だ見性を圓る、即今上人の性、甚の所に在る、二、自性を識得すれば方に生死を脱す、眼光落地の時、什麼か脱せん、三、生死を透得すれば、便ち去處を知る、四大分散して何の處に向つてか去ると、是れなり。

刀山一時に摧く、是れ甚麼の時節ぞ。看よ看よ、燈籠露柱笑哈哈、錯錯。

雲仲心祥尼首座の下火 預請

「率陀天上の雲を劈破して、行に臨んで一朶好し君に呈するに、^①龍華三會夢中の説、殘漏聲沈んで曉色分る。祥首座祥首座、夢中の説、還つて聽取すや。三世の諸佛も亦夢を説く、前臺花發けて後臺に見る。六代の祖師も亦夢を説く、上界鐘清うして下界に聞く。山僧も亦夢を説く、^②漆園の胡蝶若箇影を分つ。末後愍だ慇懃、^③槐國の蝶蟻多少群を作す。生死涅槃昨夢のごとし、鐵枷三百斤を脱脚す。淨裸裸拘束没し、赤洒洒功勳を絶す。與麼の時節阿鼻獄卻つて夢宅と成る。丙丁童子笑閻閻、^④喝一喝す。

希溪善灌尼首座の下火 預請

「迅機截斷す灌溪の流、最後の牢關去つて留まらず、但だ看る百年三萬日、樺花半は照して夕陽收まる。夫れ惟れば、希溪善灌尼、^⑤繡佛晋を欺き鐵磨劉を瞞す。博く毘尼を究めて西天の^⑥苾芻草を學ぶ。先聖を帶累して東福多子の榴を劈く。是なるときは則ち總持肉を得、非なるときは則ち演若頭を失す。玄玄玄の處、又須らく呵す可し。涅槃に入らざる清淨の行

① 龍華は彌勒菩薩成道の際に於ける菩提樹の名。

② 漆園は莊子がいふ、嘗て漆園の吏となる故にいふ。

③ 槐國は槐安國をいふ、淳于棼、廣陵に家す、宅の南に古槐樹あり、棼酔ひて其の下に臥す、夢みらく、二使者曰く、槐安國の王、遣へ奉ると、棼、使に隨つて空中に入る、榜を見らる、曰く、大槐安國と、其の王曰く、吾が南柯郡の政事理らず、卿を風し守となして、之れを治めしめんと、棼、郡に至りて凡そ二十歳、送りて歸らしむ、遂に覺む、因りて古槐下の穴を尋ぬるに、洞然として明瞭なり、一榻を容るべし、一大蟻あり、乃ち王なり、又一穴を尋ぬるに直ちに南柯に上る、即ち棼守りし所の郡なりと。

者、了了のとき、了す可き無し。地獄に墮せざる破戒の比丘、五逆消滅萬機罷休す。火把を抛つて、會すや、向上の那一路、何の處にか蹤由を免めん。喝一喝す。

前任明禪玉宗琳尼藏主、預め百年後秉炬の語を請ふ

「百歳の光陰瞬息の中、五蘊有に非す又空に非す、^①鍼鋒頭上轉身的路、歸らば便ち歸る可し兜率宮。夫れ惟れば、宗琳尼、衆流を截斷して、^②偃跛脚を瞞す。正法を扶起して岳嶺翁を慕ふ。一雙の胡蝶葵花に上る。堅固法身長有り短有り。兩箇の黃鸝翠柳に啼く。眞如自性始無く終無し。赤洒洒拘束没し、淨裸裸羅籠を絶す。與麼の時節、向上の那一句、如何が君が爲に通せん。火把を抛つて、看よ看よ、丙丁童子面門紅なり。喝一喝す。

一宗秀統尼藏主の下火 預請

「釋門の正統苾芻尼、冷笑す少林の尼總持、夜半人有り負ひ將ち去る、^③鍼鋒頭上の五須彌。夫れ惟れば、一宗秀統尼、預め鶴林滅度の相を示して、龍華下生の時を待たす。眼裏の花を掃除するときは、則ち劍樹刀山、即ち眞如界。心頭の火を滅卻するときは、則ち鑊湯爐炭、清涼池と變す。這裏に到つて甚麼の五障とか説かん、什麼の^④三祇をか論せん。機輪轉する處閃電も猶ほ遅し。尼藏主還つて會

① 唐詩選飲中八仙歌に、蘇晉長齋佛の前、醉中往々逃禪を愛す」と、繡佛は刻鏤せる佛像をいふ。

② 印度所生の草、此の草五徳を具ふと、之れを出家人にたとふ。

③ ちんばあしをいふ。

④ 菩薩が佛果を得給ふ迄經たまふ修行の年時なり。

すや。火把を抛つて、花の來處を問はんと欲すれば、東君も亦知らず。喝一喝す。

寶山珍尼藏主の下火 預請

「寶山に秘在す滄海の珍、靈光一點縹緲せず、端無く紅爐の雪に和卻して、百鍊し將ち來つて色轉た新なり。夫れ惟れば、寶山珍尼藏主、末山の頂を坐斷し、鐵磨の輪を推轉す。清淨本然、十方三界、世尊の面、常照寂爾、萬象の中、獨露身頭、顯露物物、全眞線路を通せず、要津を把定す。然も恁麼なりと雖も、更に向上宗乘の事有り、試みに山僧が指陳を聽け。火把を抛つて、白灰撥ひ出す玉麒麟。喝一喝す。」

月心宗珠尼藏主の下火 預請

「衣裏の明珠琢磨せず、一錠に錠碎す看よ如何、大千俱に壞する底の時節、全身を放下して火蛇に與ふ。夫れ惟れば、月心宗珠尼、舌霹靂を轟し、辯懸河を瀉ぐ。一路涅槃門、水有り月を含む。十方薄伽梵、風無きに波を起す。身を北斗に藏し、夢を南柯に託す。箇箇圓成、甚麼の現在佛、過去佛とか説かん。人人具足、什麼の煩惱魔、生死魔をか論せん。了了の時、沒交涉。玄玄の處、早く蹉過す。然も是の如くなり雖も、最後の一句、還つて會得すや。火把を抛つて、石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」

悅巖宗忻尼藏主の下火 預請

「一踢に踢蹴す生死海、一拳に拳倒す涅槃堂、棚頭の傀儡百年の夢、無絲の玉線を牽き得て長し。夫れ惟れば、悅巖宗忻尼、釘背鐵舌、錦心繡腸。娑婆即ち是れ華藏、伽耶豈に寂光に非ざらんや。杜鵑啼破す落花の村、赤洒酒拘束没し、翡翠踏躡す荷葉の雨、淨裸承當を絶す。然も恁麼なりと雖も、向上宗乘の一著、試みに山僧が擧揚を聽け。火把を抛つて、安禪は未だ必ずしも山水を須ひず、心頭を滅卻すれば火も自ら涼し。喝一喝す。」

摠持開基頓庵宗圓尼大姉の下火 預請

「少林門下の摠持尼、元自ら圓成頓機を了す、再見何ぞ勞せん百年の後、殘花啼落す杜鵑の枝。夫れ惟れば、摠持開基頓庵宗圓大姉、短世風驚き雨過ぐ、刹那物換り星移る。鵲噪鴉鳴、檀郎を要して小玉と喚ぶ。牛搏馬踏、鐵磨を拽いて大瀉に到らしむ。機輪轉する處閃電も猶ほ遅し。淨裸赤洒酒、甚の兜率泥犁とか説かん。也た奇快也た奇快、昨夜有力の者、醜雞須彌を負ひ去る。火把を抛つて、咳。」

速縁妙淨禪尼百年後下火の語

「鍊り出す 舍那清淨の身、紅爐焰裏纖塵を絶す、線路を放開して消息を通ず、雨過ぎて青山色轉た新なり。夫れ惟れば、速縁妙淨禪尼、預め苦果を懼れて、蚤に良因を修す。婆子燒庵正に好し趕ひ出すに。倩女離魂

① 夫をいふ。
② 醜雞は酒に生ずる蟲なり、莊子に「孔子、老聃に見え、顔淵に告げて曰く、兵の道に於けるや、それ猶ほ醜雞の如きか、夫子の我が覆を發する微りせば、吾れ豈に天地の大全を知らんや。」劉師道の詩に、「醜雞は酒に生ず」とあり、小

那箇か是れ眞。生也、樹は風の體態を呈す。死也、波は月の精神を弄す。之れを潤せども濁らず、磨すれども磷かす。然も恁麼なりと雖も、向上の田地に到らんと要せば、試みに山僧が指陳を聴け。火把を抛つて、「咄咄、冷灰撥ひ出す玉麒麟。」

琴溪妙泉禪尼の下火 預請

「天に先つて物有り黄泉に徹す、自性の彌陀地を易へば然らん、從來する所無く所去する處無し、頭を擧すれば殘照住居の西。夫れ惟れば、琴溪妙泉尼、迷雲盡きて心月圓なり。人は靜中に向つて忙はし。臺山の婆子を勘破す、路は平處より峻し。趙州老禪を瞞卻す、廣長舌を掉ふこと八十餘年。白滴滴清寥寥、涅槃の一路を踏倒す。淨裸赤洒洒、生死の兩邊を截斷す。這裏に到つて甚の五障とか説かん、甚の十纏をか論せん。然も恁麼なりと雖も、向上卻つて事有り、山僧が敷宣を聴け。火把を抛つて、「木人石女希有と叫ぶ、臘月花開く火裏の蓮。」喝一喝す。

月渚明圓禪尼の下火 預請

「一輪の心月本來圓なり、明鏡臺に非ず碧天に輝く、無孔の鐵鎚鎚碎し

了る、江南の野水白鷗の前。夫れ惟れば、月渚明圓禪尼、眉宇秀發、和氣霽然、三世の妙德尊、智母と稱す。五障の婆娑女、華鮮と號す。邪を捨て、正に歸し、實を顯し權を開す。加之、清淨の行者涅槃に入らず、翡翠踏躡す荷葉の雨。破戒の比丘地獄に墮せず、鷲鷲衝破す竹林の烟。就くこと莫れ錯錯。須らく呵すべし玄玄。禪尼還つて會す麼。火把を抛つて、「向上の一路千聖不傳。」咄一咄す。

春榮慶壽尼大姉の下火 預請

「閻浮壽盡きて百年移る、泥洹の活路を踏倒し來る、一點の塵埃何の處にか著けん、火蛇吞卻す五須彌。夫れ惟れば、春榮慶壽尼大姉、水中の乳味、泥裏の摩尼。或底は繞路に禪を説く、木塔を喚んで老婆子と作す。或底は、當陽直指、林際を瞞じて、小厮兒と稱す。其の人金の如く玉の如し、磨すれども磷かす、涅にすれども縑ます。生也、春風桃李花の開く日、死也、秋雨梧桐葉の落つる時。淨裸裸定肉を割き、赤洒洒戒皮を脱す。萬機休罷、佛祖も知らず。向上に轉じ去れ、多岐に涉ること莫れ。與慶の時節、大姉還つて會すや。火把を抛つて、「會と不會と都來錯、江月照し松風吹く。」

雲林宗怡尼大姉の下火 預請

「直に雲林を把つて鶴林と作す、紅爐煉り出す。紫磨金、端無く入得す如來地、一段の靈光古今を

を以て大を負ふを云ふ。
①毘盧舍那の略なり。
②老婆が庵主を點檢せし逸話、又公案として依用せらる、昔婆子あり、一庵主を供養すること二十年を経たり、常に一妙齡の女子をして飯を造りて給侍せしむ、一日女子をして抱定せしめて曰く、「正當恁麼の時如何、庵主曰く、「枯木寒巖に倚る、三冬暖氣なし」と、女子、婆子に舉似す、婆曰く、「我れ二十年間たゞ此の俗漢を供養し得たり」といつて、終に逐ひ出して庵を燒却せりといふ。一休和尚之れを頌して曰く、「老婆心賊の爲に梯を適す、清淨の沙門に女妻を與ふ、今夜美人若し我を約さば、枯楊春老い更に穉を生ぜん」と。
③趙州二庵主を勘破すること前に見ゆ。

①當陽は文明の義、左傳に、「文公四年天子陽に當つて諸侯命を用ふ」とあり、集賢に「師古の曰く、天子朝に臨む、之れを當陽といふ」と。
②めし使の小兒をいふ。
③紫磨黄金、紫金ともいふ、紫色の光澤ある黄金をいふ、もと閻浮檀金を稱する語なれども、轉じて佛身を稱するに至る、大聖を現す表徴なり。

照す。怡大姉怡大姉、門より入る者は自家の珍に匪す。心即ち是れ佛、佛即ち是れ心。心外に佛を求むるは、海底に鍼を摸るがごとし。清淨の行者、涅槃に入らず、雨を聽いて寒更に盡く。破戒の比丘、地獄に墮せず、門を開けば落葉深し。別に向上の那一窺有り、大姉何の處に向つてか參尋せん。火把を抛つて、「石女舞成す長壽の曲、高山流水知音を絶す。」喝一喝す。

芳室見春尼大姉の下火 預請

「一場の春夢百年の榮、地獄天堂客路程、到り得歸り來つて別事無し、杜鵑啼落す月三更。夫れ惟れば、芳室見春大姉、梅檀の圓頂、桂籍の芳名、親しく鶴樹の終談を聞く、能く慈菴尼の戒律を持つ。龍華の初會を待たず、自ら桃花色の衆生と作る、豈に修證を假らんや。本來圓乘、權大乘、實大乘。火は熱し水は冷かなり。棒正覺喝正覺、電卷き雷轟く、甚麼の眞如佛性とか説かん、甚麼の聖解凡情をか論せん。石女長壽を舞ひ、木人太平を歌ふ。然も與麼なりと雖も、別に少林の那一曲有り、陽關の第四聲を唱ふること莫れ。」火把を抛つて、「須彌座下の烏龜子、直に毘盧頂上を踏んで行け。」喝一喝す。

古柏宗庭大姉の下火 預請

「庭前喫し盡す黄金の草、這の老牯牛鼻巴無し、忽ち馮山に到つて角を

す。又白樂天の詩に「相逢ふ且く推辭し去る莫れ、唱ふるなき陽關第四聲。」

拗折す、化して火裏の牡丹花と成る。夫れ惟れば、古柏宗庭大姉、三界の獄を出でて五蘊の家を離る。死と説き生と説く、炎天の梅蕊に彷彿たり。夢の如く幻の如し、雪裏の蕉芭に依倚たり。脚下の紅線を截斷して頂上の鐵枷を脱卻す。吾が宗に語句無し、須ひす口吧吧なることを。「火把を抛つて、「犀は月を翫ぶに因つて紋角に生じ、象は雷に驚されて花牙に入る。」喝一喝す。

慈德庵春溪明榮大姉の下火 預請

「榮耀は花の如し花は夢に似たり、夢中三萬六千春、靈光味さす涅槃の月、影は浮雲の淺き處に在つて新なり。夫れ惟れば、某名、慈を以て宅と爲す、維れ德隣有り。預め當來の苦果を怖れて、茲に現在の勝因を修す。有時は七軸の蓮を轉じて、八歳の龍女を教壞す。有時は一莖草を拈じて、丈六の金身を熱瞞す。即心即佛、全假全眞。常啼誤つて東請し、善財強ひて南詢す。鐵壁銀山、凡聖を通せず、愛河欲海、要津を把定す。正與麼の時、生死去來本住處無し、地獄天堂、豈に鐵塵を立せんや。赤條條空索索、口吧吧笑閻閻。此れは是れ明榮大姉平生の如幻三昧底、即今火焰裏に向つて大法輪を轉す。諸人還つて看るや、尙し或は未だ委悉せずんば、試みに山僧が指陳を聽け。」火把を抛つて、「白灰拂ひ出す紅麒麟、錯錯錯。」

太虛理圓大姉の下火 預請

「本是れ圓成の那一佛、靈光不昧古來今、忽然として寂滅現前する處、雨殘紅を洗つて新緑深し。夫れ以れば、太虚理圓大姉、外縁飾少く、内戒禁を持す。三萬六千日の前、繡工夫、梅と爲つて香魂夢に入る。三萬六千日の後、間受用、竹を栽ゑて塵事に心無し、彌猴の鏡を打破して、翡翠の簪を抛擲す。加之、總持少室を扣いて、投機強ひて皮髓を分つ。徳雲別峯に在つて、相見何ぞ參尋を勞せん。線路を放開して官には針をも容れず。生魔死魔、粘を去り縛を解す。男相女相、鐵に點じて金と成す。這裏に到つて甚麼の七凹八凸とか説かん、什麼の四大五陰をか論せん。別に轉身の句有り、試みに火把子の獅子音を發するを聴け。」火把を抛つて、「末山の頂、日杲杲、鐵磨の輪風凜凜たり。」喝一喝す。

玉江道琳禪定門の下火 預請

「虚空地に落つる時を待たす、活機前阿毘を蹈倒す、黃頭碧眼間夢無し、蘿月松風吹くに一任す。夫れ惟れば、玉江道琳禪定門、瑚璉價有り、琳琅玕無し。隨緣真如、不變真如。雪裏の芭蕉摩詰が畫。分段生死、變易生死。炎天の梅葉簡齋が詩。展ぶるときは則ち十法界に徧し、收むるときは則ち五須彌を呑む。與麼の時節、什麼の人空法空とか説かん。淨裸裸、天に四壁無し。什麼の眞諦俗諦をか論せん。赤洒洒、地に八維を絶す。泥洹の一路多岐に涉ること莫れ。」火把を抛つて、「看よ看よ、紅爐放出す鐵鳥龜。」喝一喝す。

越州太守雲江守慶居士の下火 預請

「魔軍百萬の兵を掃蕩して、七花八裂す涅槃城、凱歌の一曲、忽ち歸り去る、屋後の松風愈好聲。共しく惟れば、越州太守雲江守慶居士、義井古を汲み、心地精を研く。厥の勇也、蚤に六韜を學ぶ、張千房が黃石に従ふが如し。厥の節也、二主に仕へず、司馬氏の淵明に於けるに似たり。紅塵劍三尺、白髮雪千莖。此の郎子に就いて號を求む、吾が師他の爲に安名す。再び龍潭の舊房を修して、萬年計ることを作す。假に鶴林の滅度を示して、三日庚に先づ。平生頓頭の手段、通身金剛の眼睛。聖に在つては聖に同じ、凡に在つては凡に同す、青山限り無く好し。佛に逢ふては佛を殺し、祖に逢ふては祖を殺す、黃河徹底清し。空空空畢竟空、何物か恁麼に死す。錯錯錯都來錯、何物か恁麼に生ず。」喝。「更に向上の那一著有り、試みに山僧が施呈するを聴取せよ。」火把を抛つて、「須彌倒に鐵馬に誇つて、丙丁童を踢蹴して行く。」

神野氏雙月慧晃居士の下火 預請

「不生不滅涅槃門、門外の青山月一痕、舜若多神驚いて舌を吐く、火蛇吞卻す鐵崑崙。夫れ惟れば、神野氏雙月慧晃居士、南嶽の祖に承けて東海の孫と稱す。道家の蓬萊、弱水三萬里を縮む。神野の種草、出雲八重垣を詠す。維摩居士を靠倒し、大覺世尊を罵呵す。放行するときは則ち虎穴魔宮一喝に

舊本周呂蒙撰すと爲す、然れども其の文義三代の作に類せず、恐らくは後人の偽作ならん、蓋し莊子の金版六韜の語によりて附會したるものなるべし、陸徳明の莊子釋文に謂ふ、太公の六韜は文武虎豹龍犬なりと。

喝散し、把住するときは則ち、鶴樓鵝洲一陽に踴躍す。淨裸赤洒洒、窠白を離れ籠樊を絶す。更に向上宗乘の事有り、吾れ齒牙の餘論を惜まず。火把を抛つて、「聞くや、杜鵑啼破す落花の村。錯錯。」

宗靖居士百年後の下火

火把、圓相を打して、「第一の達磨陶靖節、蓮社を修せず禪に參せず、人本有圓成佛、秋菊春蘭地を易へば然らん。夫れ惟れば、宗靖居士、騎射兩ながら得たり、文武兼ね全し。竺土の黃面老、一卷の兵書を説く、籌を運し勝つことを決す。林際の白拈賊、三玄の戈甲を施す。銳を執り堅を被す。意氣雷霆を奔らしめ、眼睛坤乾に輝く。世縁淺うして道根深し。黃太史、五祖を稱す、天魔降し波旬伏す。韓京兆、大顛に參す、菩薩の第十地を超え、居士の不二門に入る。有餘涅槃、無餘涅槃、活計を鬼窟に作す。半字の知識、滿字の知識、妙手を龍泉に試む。鐵團圓百雜碎。華甲子萬斯年、別に轉身の處有り。山僧重ねて宣べんと欲す。火把を抛つて、「倒に鐵馬に鞭つ春風の裏、須彌の最上巔を抹過す。喝一喝す。」

玉麟宗仁居士の下火 預請

能仁元是れ大醫王、壽域萬年八荒を開く、試みに看よ。五千の貝多葉、願神換骨の一靈方。夫れ惟れば、玉麟宗仁居士、烏豆の喙吻、狼毒の肝腸、佐使君臣、本草經を佛日に誦んず。焙乾生熟、炮

①黃鶴樓、鵝鵝州をいふ。
②六十一歳を華甲といふ、華の字を分析すれば、十の字六つと一の字一つよりなる故に云ふなり、なほ邦俗に八十八を米年といふが如し。
③五千餘卷の經卷をいふ。

灸論を洪堂に學ぶ。四味の平胃散を點じて、一念相應湯と名く、能く邪氣を除き忽ち顛狂を治す。面瘡煙に染んで木瓜の呆風子を瞞す。力民社を拯ふて人參の司馬光を欺く。或時は八火を用つて、般若波羅蜜を煉り、或時は三熱を除いて、知見解脫香を抹す。實を瀉し虚を補ふ、味脾胃を和す。空に沈み寂に滯る、病膏肓に入る。幻生幻滅、無病に艾を著く。持齋持律、禁物糧を絶す。能殺能活、吾が愚老に任す、患費患旨、他の謝郎に還す。菩提果熟し、安心藥良なり。然も與麼なりと雖も、至聖の命脈、陰陽に屬せず。仁居士仁居士、冬來の事如何が商量せん。火把を抛つて、「疎山の作略將軍の令、舊に依つて京師。大黃を出す。」

心源宗徹居士の下火 預請

「西江吸盡して心源に徹す、靠倒す龐蘊居士の門、到り得歸り來る底の時節、杜鵑啼過す落花の村。夫れ惟れば、心源宗徹居士、武門の閥閱、法社の藩垣、此の郎迹を蓬島に託す。其の先姓を菅原と賜ふ。丈夫の威雄を振ふときは、則ち溟鵬九萬里の名翼を展ぶ。大善知識に參するときは、則ち野狐五百生の精魂を離る。碧巖集昔燒卻す、黃石の書今尙は在す。有餘

③三十九卷、明人李時珍が三十年の歳を費して著したる書にして、子書の醫家類に屬す、寛文十二年の和版あり。蓋し此の人醫師なりしか。
④諸の龍陀に三患あり、之れを三熱といふ、一に熱風燥砂身に付き、その皮肉骨髓を燒き苦惱をなす、二には惡風吹起りて、蛇龍の居所及び飾衣等を失はしめ、龍身を苦惱せしむ、三には諸龍娛樂の時、金翅鳥あり、龍の所居に入りて生る、所の龍子を搏奪して之れを食ひ、龍をして恐怖せしむと、法華經に見ゆ。
⑤疎山光仁禪師、洞山良价禪師の法嗣、疎山の有句無句の公案名高し。
⑥蔓科植物、支那原産の多年生草、高五尺に達す、葉大形、掌狀に淺裂し、且つ鋸齒を有

涅槃、無餘涅槃、水枯れ雪盡く。棒下の正覺、喝下の正覺、電卷き雷奔る。諸聖の解脱を求めず、豈に閻王の平反を借らんや。淨裸裸、赤洒洒、明杲杲、暗昏昏、更に眞の般若有り、無説又無言。會す麼。炬を抛つて、「火光三昧に入得して看よ、黄金鑄出す鐵崑崙。」喝一喝す。

前の豊州太守和智氏太成宗功居士の下火 預請

「此の郎今代の一英雄、未だ麒麟に上らざるに先づ功を識り、從來する所無く所去する無し、夕陽は長く我が西に在つて紅なり。夫れ惟れば、前の豊州太守、棟梁の質を具し、葵菴の忠を抱く。威十方に振ふ、譬へば漢の降準公の沛邑に起るが如し。名四海に喧し、恰も宋の執拗夫が元豊に出づるに似たり。忽ち國家の興盛に遇ふ、永く山河の始終を誓ふ。或時は生死の流を截つて、臨濟三尺の劍を提ぐ。或時は威音の梁を築いて、石鞏一張の弓を揮す。箭鋒相柱へ毒氣以て攻む。自的の分清寥寥、娑婆華藏を隔てず。淨裸裸兮赤洒洒、地獄天宮を管すること莫れ。千佛の一數、廣額兒刀子を抛つ、萬法不侶、龐居士心空と叫ぶ、最後の句有り、更に君が爲に通せん。」火把を抛つて、「泥牛月に吼え、木馬風に嘶ゆ。」喝一喝す。

江州建部左典厩鐵船宗堅居士の下火 預請

「法身堅固鐵團圓、吾が鉗鎚下に觸著して看よ、百雜碎兮百雜碎、涼風月を吹いて欄干に上す。共しく惟れば、某名、衝を筆陣に折き、將に詩壇に拜す、茂を騰げ英を飛ばす。朝廷の上に置くときは、則ち三槐九棘、根を深くし蒂を固うす。山林の中に在るときは、則ち十蕙一蘭、將に謂へり、江州の白司馬、由來宛陵の梅都官、天女散花惟れ新なり。毘耶の老居士、假に病を示す、宗師落草且く爾り。瑞岩の主人公、何ぞ瞞を受けん。或時は武を能し文を能す、雲門の紅旗風偃す。或時は佛を殺し祖を殺す、林際の金剛霜寒し。泥洹の一路を踢翻し、生死の兩端に涉ること莫れ。然も與麼なると雖も、更に頤神の妙術有り、君が爲に平安を報じ去らん。」火把を抛つて、「倒に一枝の笛を把つて、吹き起す萬年歡。」喝一喝す。

寂知宗空居士預請百年後乘炬の語

「太虛空に向つて鐵船を駕す、須彌頂上浪滔天、大唐載せ得て歸り來つて看れば、紅海棠開く秋日の西。夫れ惟れば、寂知宗空居士、才華俗を銷し、釣築賢を收む。法法圓融、裴相國、心を黃檗に傳ふ。塵塵解脱、陶酔漢、眉を白蓮に皺む。將に謂へり天地に先つて物有り。元來淨土を離れて禪無し。或時は峭峻孤危、禪板蒲團、用不得。或時は遊戯三昧、舞衫歌扇、舊

して互生し、消化不長、漫性下痢等に用ひ、又瀉下劑にも用ひらる。

① 從順の誠を有するに比す。

② 漢の高祖をいふ、史記に漢太祖高皇帝は堯の後なり、姓は劉氏、名は邦、字は季といふ、沛豊邑の中陽里の人也、母の媪大澤の陂に息ひて夢に神と遇ふ、時に大いに雷雨して晦暝なり、父の大公往きて交龍を其の上に見る、已にして劉季を産む、降準にして龍顔なりとあり。

③ 矢を受くる爲に的なかけ置く處。

梅樹命、名は幾臣、宋の宣州宣城の人、仁宗召して試み、國子監直講と爲り、都官員外郎に遷る、唐書を修するに預る、歐陽修の詩友たり、宛陵集四十卷を著す。

④ 斐休、法を黃檗禪師に受く。

⑤ 陶淵明など白蓮社に入り、惠遠法師と共に念佛を唱へしをいふ。

⑥ 仙人の罪せられて人間界に下れるもの、轉じて詩人などが事によりて、都より遠き所に謫遷せられたるものにいふ、李白少にして逸才あり、志氣豪放、飄然超世の才あり、天寶

因縁。回也儒門の知識と稱するを羨むと雖も、卻つて笑ふ軾が人間の 譎
仙と作ることを。楓葉落ち分萩花乾く。萬機休するときは則ち全く方に歸
す。松風吹き分蘿月照す。一念起るときは則ち早く大千を隔つ。涅槃の四柱
を拗折して生死の兩邊に涉ること莫れ。錯錯錯、都て是れ錯。玄玄玄、須ら
く玄を呵す可し。然も與麼なりと雖も、更に宗乘向上の事有り。試みに
山僧が敷宣を聴け。火把を抛つて、雨中に杲日を見、火裏に清泉を酌む。」

義翁宗高居士の下火 預請

「日高山を照して遍界明かなり、一人も復た暗中行く無し、網珠範を
垂る雜華藏、眼を開いて看來れば 乾闥城。夫れ惟れば、義翁宗高居士、
光を頼み彩を鏖る、思を覃ぼし精を研く、邪正分ち難し。天魔外道、八萬
劫を了す。因果昧さず、野狐精魅、五百生を脱す。崑崙の鼻孔に撞着し、
金剛の眼睛を突出す。兜率權に三關を設く、華嶽連天の色を擘開す。瞿
曇一字を説かず、黃河徹底の清を放出す。轉身自在、受用縱橫。端的を識
らんと欲せば、多程に涉ること莫れ。然も與麼なりと雖も、更に末後の句
有り。山僧が施呈するを聴け。火把を抛つて、「滄浪の水濁らば、以て吾が足を濯ふ可し、滄浪の

の初め長安に至り、賀知章を
見る、知章その文を見て歡じ
て曰く、「予は謫仙人なり」と。
③乾闥婆城、碎香城と譯す、龍
神が空中に示現する城郭にし
て、即ち彼の髮氣樓のことな
り。大智度論に「日初出時城
門、樓櫓、宮殿、行人出入を
見る、日轉た高ければ轉た滅
す、但だ眼見すべく、實ある
にあらず、乾闥婆城を見る」
とあり。

④南岳下十二世寶峰克文禪師の
法嗣、兜率從悅禪師なり。
⑤孟子の離婁に「孺子あり、歌
ひて曰く、滄浪の水云々と、
孔子曰く、小子之れを聞け、
清まば斯に纒を洗ひ、濁らば
則ち足を濯ふ、自ら之れを
る也」と、此の歌當時の俗語な
り、漁父の辭にも引けり。

水清めらば、以て吾が纒を濯ふ可し。」喝一喝す。

天真宗守信男預請乘炬の語

「眞如自性天真を守る、元是れ金剛不壞の身、一夢百年三萬日、花は開く桃李火中の春。夫れ惟れ
ば、天真宗守信男、預め苦果を懼れて、逆め良因を修す。起居動靜、六時念佛、論詞蒸嘗、四序神に
養す。唐朝の 白文殊、鳥窠師に參す、蒲半夜吼ゆ。 宋家の黃達磨、晦堂老に見ゆ、桂花露勺し。
涅槃を證して涅槃に住せず、清風明月を拂殺す。生死を示して生死に染まず、溪水紅塵を截斷して、
凡聖を通せず、要津を把定す。木人高く奏す長壽の曲、燈籠口を開いて笑闊
闊。然も恁麼なりと雖も、更に向上宗乘有り、試みに山僧が指陳を聴取
せよ。」火把を擲つて、「色色只だ舊に依る、青山雨後新なり。」喝一喝す。

寶隣宗善信男預請百年後乘炬の語

「善惡都來思量すること莫れ、阿爺の面目露堂堂、百年壽盡きて後の消
息、火裏の蓮華遍界香し。夫れ惟れば、某名、維れ時大法の季運に丁つて、其の家積善の餘慶を保つ。
釋迦を東土に揖し、彌陀を西方に念す。涅槃城を打破して、直に梅陽の竹篋子に觸る。生死の縛を截
斷して、倒に林際の金剛王を提ぐ。淨躰赤洒洒、窠臼を離れ承當を絶す。然も恁麼なりと雖も、若
し向上に轉じ去らんと要せば、試みに眞正の擧揚を聴け。」火把を擲つて、「三足の金鳥飛んで海に

①白居易の鳥窠禪師に見ゆるな
いふ、衆善奉行、諸惡莫作の
語、名高し。
②黃山谷、晦堂祖心に見ゆ、山
谷木犀の話、前に見ゆ。
③莊子に曰く、「鳥に足三あり」
と。

入る、曉天舊に依つて扶桑を照す。「喝一喝す。

春岳宗英信男の下火 預請

「蝸牛角上の一英雄、心地收め來る汗馬の功、吹いて紅爐燭中の雪と作す、刀山劍樹落花の風。夫れ惟れば、某名、才文武を兼ね、節始終を克す、五位の槍旗を豎つ。其の先、昔洞山の顯訣を傳ふ、三玄の戈甲を用ふ。此の老、今臨濟の正宗を興す。龜毛の箭を架し、兎角の弓を張る。或時は佛を殺し祖を殺す、寶劍光寒うして、塵塵解脫。或時は凡を鍊り聖を鍊る、金鎚影動いて、物物圓融。涅槃の窠窟を出で、生死の羅籠を脱す。本來圓成、麻矢は直く蓬矢は曲れり。當陽直指、李花は白く桃花は紅なり。慙麼不慙麼、一口に吸盡す西江の水。不慙麼慙麼、一棒に打破す太虛空。然も是の如くなりと雖も、後昆を保祐する底の一句、試みに丙丁童子に問取し去れ。「火把を抛つて、「面り王覇を陳す龍庭の上、手ら乾坤を抜く虎口の中。」

泰岳宗韓信男百年後秉炬の語

一韓佛を推く佛何ぞ推けん、端的邪を捨てて正に歸し來る、劫火洞然として毫末盡く、泰山舊に依つて碧崔嵬。夫れ惟れば、泰岳宗韓信男、箕

①洞山真价禪師の五位頃の偏中至に曰く、「兩刃鋒を交ふ、避くることを用ひず、好手猶ほ火裏の蓮の如し、宛然自ら冲天の氣あり」と。
②莊子の駢拇篇に「長きもの餘りありと爲ます、短きもの足らずと爲ます、是の故に龜の脛短しと雖も、之れを續がば憂へなん、鶴の脛長しと雖も、之れを斷たば悲まん、故に性の長きは斷つ所に非ず、性の短きは續ぐ所に非ず、憂を去る所無きなり」と。
③陸巨大夫、南泉に見ゆ、問うて曰く、古人瓶中に一蠶を養ふ、蠶漸く長大にして出すこ

裘の業を繼いで、棟梁の材を負ふ。生死の流を截る、風塵三尺の劍。文武の道を學ぶ、丹心一寸の灰。法爾如然、鶴脛は長く、鴨脛は短し。無常迅速、牛頭没し馬頭回る。阿鼻獄を掀翻し、涅槃臺を踢倒す。赤洒洒、窠窟を離れ、清寥寥、纖埃を絶す。然も與麼なりと雖も、後昆を保祐する底の活句。元亨利貞、徳大なる哉。「火把を抛つて、「倒に少林の無孔筍を把つて、風に和して吹き落す一枝の梅。「咄一咄す。

春澤宗光禪定門の下火 預請

「靈臺不昧靈光を發す、乾坤を映徹して覆藏を絶す、閻浮百年の夢を喚び醒して、曉鐘月落つ一聲の霜。夫れ惟れば、春澤宗光禪定門、備陽の華族、藤家の棟梁、全假全真、晦堂、黃太史を接して、月中の桂子を示す。如夢如幻、南泉、陸大夫を召して庭前の花王を指す。鼻を穿ち眼を換ふ、腹を倒し腸を傾く。無明即明、鑊湯爐炭。眞如地諸相に非ず、劍樹刀山古道場。赤洒洒全く窠窟没し、淨裸裸何ぞ封疆を守らん。燈籠露柱を吞盡し、泥人金剛を撈倒す。然も慙麼なりと雖も、向上宗乘の事、只だ重ねて商量せんことを要す。「火把を抛つて、「安禪は未だ必ずしも山水を須ひず、身心を滅卻すれば火も自ら涼し。」

義江光忠信男の下火 預請

と能はず、鵲を損することを得ず、和尚作麼生か出すことを得んと、泉、大夫を召す、陸應諾す、泉、曰く、出せりと、大夫茲に於いて省ありと。

「白髮丹心 吠敵の忠法社に金湯として全功を立つ、呵呵として手を拍して好し歸り去るに、失脚して踏躓す都率宮。夫れ惟れば、義江光忠信男、在家の菩薩、亂世の英雄、苦樂逆順、道其の中に在り。生死涅槃、芭蕉葉上に愁雨無し。擒縱與奪、電光影中春風を斬る。佛界魔界に入らず、頓に人空法空を了す。淨裸裸赤洒洒、窠臼を離れ羅籠を絶す。此れは是れ光忠禪定門行履の處、猶ほ梅花の路未だ通せざる有り。」
火把を抛つて、「門外の金剛白汗出づ、丙丁童子面皮紅なり。」喝一喝す。

但州太守大用宗碩信男の下火 預請

「百年一枕 黒甜の餘、索索たる涼風秋墟に入る、大用現前軌則無し、龍泉斗を射て清虚を犯す。共しく惟れば、但州太守大用宗碩信男、世縁淺しと雖も、俗氣未だ除かず。是の故に、香至の季子、大乘の器を、赤縣の東に求む、暗に隻履を失す。竺乾の猛將、涅槃城を金河の側に構へて、徒らに兵書を説く。松源の黑豆の法を用ふるに依倚たり。頼川が雪芭直を畫くに彷彿たり。無滅無生、火光三昧を證得す。即空即假、物我一如を會し盡す。恁麼に轉じ去れ、敢て蹶踏すること莫れ。」火把を抛つて、「乾坤を吞卻す鍼眼の魚。」喝一喝す。

① 吠は田開の「みぞ」なり、敵は田の「うれ」なり、田舎といふが如し、孟子に「舜吠敵の中より發り」とあり。
② 黒甜は午睡なり、支那南方の俗語なり。
③ 四天の初祖菩提達磨をいふ。
④ 漢土一名赤縣神州といふ、史記孟軻傳に「中國名けて赤縣神州といふ、赤縣神州の内、自ら九州あり、禹の序する九州是なり」と。
⑤ 王維字は摩詰、開元九年進士第一に擢んでらる、尙書右丞に遷る、頼川に別墅あり、故に又頼川といふ。名畫錄に頼川の圖を畫く、山谷懸壺、雲水飛動、意塵外に出て怪筆端に生ず、秦大虛云ふ、「予病あり、高符中頼川の圖を携へて予に示す、予之れを因して恍として維と頼川に入るが如く、數日にして病愈ゆ」と。
⑥ 心を蓋ふ五種の煩惱、一に欲貪蓋、二に瞋恚蓋、三に憍慢蓋、四に掉悔蓋、五に疑蓋、之れを五蓋といふ。
⑦ 提婆達多をいふ。
⑧ 雲門の承衆に曰く、「乾坤の内宇宙の間、中に一寶あり、形由に秘在す、燈籠を拈じて佛殿裏に向ひ、三門を將つて燈籠上に來す」と、形由は五蘊所成の肉身をいふ。宇宙乾坤に秘在する一寶を、其の儘に我等人人の五蘊の中に秘在す、宇宙と肉團と大小の差ある如くたれども、秘在する所の寶は一寶なり。又形由は名玉の產地故、暗に其の意をも含む、よつて荆字を打する也。

覺林宗圓信男の下火 預請

「光萬象を吞んで月孤圓、心外に心を求む錯つて果然、生死涅槃別路無し、等閑に踢倒す率陀天。夫れ惟れば、覺林宗圓信男、時節因縁、柏樹の成佛を待つこと莫れ。當陽直指、頻に落葉の單傳を掃ふ。正覺喝下、寂滅現前、甚の七顛八倒をか説き、甚の五蓋十纏をか論せん。然も恁麼なりと雖も、後昆を保祐する底の活句、試みに火把子の敷宣を聽け。」火把を抛つて、「頭を擧すれば殘照在り、元是れ住居の西。」喝一喝す。

續芳宗繼信男の下火 預請

「武門の閻閻箕裘を繼ぐ、亂世の英雄獨り尤を抜く、生死涅槃是れ常事、一刀兩段凡流を截る。夫れ惟れば、續芳宗繼信男、調羹補袞、跨窻衝樓、眞如隨緣、二乗聲聞空寂に沈む。邪見即正、五逆の調達冤讎を結ぶ。燈籠口を開けば露柱點頭す。更に最後の句有り、汝聽取せよ、我れ焉んぞ度さん。」火把を抛つて、「碧眼黃頭會不得、野梅風定つて暗香浮ぶ。」唱。

荆叟宗玉信男の下火 預請

「玉本圓成縞縞を絶す、之れを求むれば轉た遠し求めざれば臻る、形

山手に信せて劈開し了る、萬里雲無くして月一輪。夫れ惟れば、荆叟宗玉信男、村上帝に承けて源の朝臣と稱す。法社の金湯、臨濟の大龍に跨つて頭角を拗折す。武門の棟梁、洋嶼の黑虺に觸れて凡鱗を脱却す。佛を殺し祖を殺す、全俗全眞。了了了の時、甚の溪聲廣長舌にか干らん。妙妙妙の處、山色清淨身と認むること莫れ。畢竟門より入る者は、是れ家珍にあらず。我れをして如何が説かしめん。物の比倫に堪へたる無し。火把を抛つて、
① 錯、春草池塘の夢、昨夜今日の塵。錯錯。

希道宗弘信男の下火 預請

「生死を截斷して、寶劍光寒し、閃電擊石、多端に移らす。夫れ惟れば、某名、文韜武略、義膽忠肝。人主を輔佐して、孤を立つるを難しと爲す。京師舊に復して世を安泰に置く。魯直鼻を穿つて、蟾桂を認著す、王老夢を説いて牡丹を指示す。露電泡影、如是觀を作す、預め冥福を修して、報應の殫きんとを懼る。是の故に五逆の達多、頓に地獄を出づ、千佛の廣額、直に涅槃を證す。鬼畜人天同じく一致に歸す。迷悟凡聖、全く兩般なし。須彌崩倒し大海枯乾す。希道希道、一期願の後、如何が相看せん。秋風索索として葉落ちて根に歸す。聞くや木人笛を把つて萬年歡を奏す。咄一咄す。」

道本禪門の下火 預請

「人人本有圓成佛、古に輝き今に騰つて大光を放つ、惡鉗鎚に觸れて爐輪を出づ、黄金色上に更に黄を添ふ。道本禪門、耳邊に看るや、山色清淨。眼處に聴くや、溪聲廣長。虚空を打破して芭蕉の拄杖子を奪ふ、生死を截斷して林際の金剛王を提ぐ。正與麼の時節、甚麼の無明煩惱とか説かん、甚麼の地獄天堂をか論せん。赤洒洒冥白無し、淨裸承當を絶す。別に宗乘、向上の事有り、來れ吾れ汝と與に商量せん。火把を抛つて、鳥啼いて人見えす、花落ちて木猶ほ香し。喝一喝す。」

石窓秀堅大姉預請の乗炬

堅固法身變遷無し、鉞鋒頭上に坤乾を定む、末後の牢關子を打開して、月は落つ。金雞一拍の天。夫れ惟れば、石窓秀堅大姉、河陽の新婦子を欺き、濟北の老風顛を瞞す。金沙灘頭馬郎に約して、菩提樹に上り無明樹に上る。靈山會上龍女を接して、當體蓮を説き、譬喻蓮を説く。休休休、百年壽盡きて後、妙妙妙、一漚未だ發せざる先。或時は放去收來、泥牛耕破す瑠璃の地、或時は出生入死、玉兔換開す碧落の門。須彌筋斗を翻し、虚空鐵船を駕す。更に眞の歸處あり、山僧が敷宣を聴け。火把を抛つて、頭を擧すれば殘照在り、本是れ住居の西。咄一咄す。

聞溪宗音大姉の下火 預請

此の方眞の教音聞に在り、心腸を傾倒して君に説與す、諸佛出身の那一路、青青たる脩竹、南薰を

① 宋文公の詩に云ふ「未だ覺めず池塘春草の夢、塔前の梧葉已に秋風」と。
② 魯直、黃山谷なり、祖心禪師に従つて山中に木犀花を嗅ぐ、前に見ゆ。
③ 月の桂にて、木犀のことを云ひしなり。
④ 六喻の偈に曰く、「一切有爲法、如夢幻泡影、如露亦如電、應作如是觀」と。

⑤ 祖庭事苑に曰く、「人間本金雞の名なし、以て天上金雞星に應するなり」と。
⑥ 南方の薰風なり。

送る。夫れ惟れば、開溪宗音大姉、始終一節、末後慇懃、尼德持吾が肉を
得たり、^⑤仙陀婆其の群を出づ。隨緣真如、不變真如、水有り皆月を含む。
觀照般若、實相般若、山として雲を帯びずといふこと無し。拄杖七八尺
を拗折して、鐵枷三百斤を脱卻す。正與廢の時、還つて寒毛卓豎すること
を覺ゆるや。紅爐燄裏雪紛紛。

江甫秀清大姉の下火 預請

「法身清淨本然の體、大地山河活眼睛、金鴨香消して人見えす、頻に小
玉と呼ぶ是れ何の聲ぞ。夫れ惟れば、江甫秀清大姉、老瞿曇の遺教を受け、
尼德持の芳名を慕ふ。恁麼不恁麼、分れて六和合と成る。不恁麼恁麼、本
是れ一精明。生也、佛界魔宮紅爐の雪、死也、地獄天堂乾闥城。左轉右轉、
逆行順行。看よ看よ、毘盧頂上月白く風清し。」咄一咄す。

天慶元祐大姉預請百年後乘炬の語

「百年幾許ぞ天祐を保つ、生死涅槃春夢の中、虚空を打破して一事無し、
^⑥鷓鴣啼き亂る落花の風。夫れ惟れば、天慶元祐大姉、胸際映徹、戒珠玲
瓏、少林門下の尼德持、意氣相奪ふ。法華會上の大愛道、記前全く同じ。」^⑦八

⑤ 王素仙陀婆、王は大王にして
素は要求なり、仙陀婆未だ講
語を見ず、一名四寶を義と
す、水、鹽、器、馬、一名に
して水鹽器馬の四種を含むが
故に、王、群臣に向つて仙陀婆
を索むるも、智慧拔群の者に
非ずんば奉仕するを得ずと、
自由の機輪を示す。

⑥ 鷓鴣類に屬する鳥の名、多く
支那南地に産す、形は鶴に似
て稍大なり、背部は灰蒼にし
て柿色の斑點あり、腹部は灰
色なり、春陽花の咲く頃、多
く相對して鳴くといふ、鷓鴣
鳴く所百花香し」などの語あ
り。

⑦ 眼、耳、鼻、舌、身、意の六識
に未那識、阿頼耶識を加へて
八識といふ、七情は喜怒哀樂
愛惡慾をいふ。
⑧ 論語先進に、南宮自圭を三復

識七情、風來れば波浪起る、三從五障、日出で、乾坤融す。眞如不變、豈
に始終有らんや。正與廢の時、無明煩惱他物に非ず、正法眼藏汝が躬に在
り。赤洒酒窠白沒し、淨裸羅籠を絶す。此れは是れ元祐大姉、平常受用
底。即今鉢鋒頭上に筋斗を翻し、火燄裏に神通を現す。看よ看よ。」火把を
抛つて、「妙處言はんと欲するに言ひ及ばず、海棠雨過ぎて夕陽紅なり。」喝一喝す。

惟清了圭大姉の下火 預請

「^⑧白圭玷無し本來圓なり、形山に秘在す一百年、拈得す分明に人に與へて看せしむ、華鯨吼破
す夕陽の天。夫れ惟れば、惟清了圭大姉、内晩節を持ち、外塵縁を謝す。玉線金針を穿つて、日種氏
の鴛鴦の教を笑ふ。藥爐經卷を把つて、秦國太の蚌蛤の禪に參するを瞞す。丈夫の意氣大千を捏聚す。
幻化空身即法身、花は猶ほ風雨の後、無明の實性即佛性、松は只だ雪霜の先。正與廢の時、什麼の
泥洹の一路をか認めん。甚麼の生死の兩邊にか涉らん。」火把を擧して、「會すや、龍女變じて男子と成
る處、枝頭露重し火中の蓮。」喝一喝す。

古梅妙林大姉の下火 預請

「地獄と天宮とを踏躡して、死路に通ずる時活路通す、此れは是れ少林眞の一曲、三千刹界落梅の
風。夫れ惟れば、古梅妙林大姉、戒乘俱に急に、心境混融す。菩提坊裏の病維摩、□□□□、金沙灘頭

鎖子骨、誦經玲瓏。三賢十聖電拂の如く、四大五蘊本來空。空空に非ず、色色に非ず。始に始無く、終に終無し。上霄漢に透り、下己躬を絶す。正與廢の時、什麼の冥官鬼主とか説かん、什麼の黃頭碧瞳をか論せん。然りと雖も、妙林大姉、畢竟如何が研窟し去らん。」炬を抛つて、「劫火洞然毫末盡く、青山舊に依る白雲の中。」

蘭室理秀大姉の下火 預請

「蘭に秀でたる有り菊に芳しき有り、法身邊の事露堂堂、夜來吹き送る涅槃の雨、心頭を滅せざれども火自ら涼し。夫れ惟れば、蘭室理秀大姉、能く緇禮を學んで、彩粧を掃除して、三心を點出す、臭婆子が徳嶠を接するを笑ふ。五障を消得して尼長老の戒香に住するを瞞す、平生の作略意氣當り難し。是の故に寂然不動、春の花に在るが如し。了了、分曉無し、眞如隨縁、月の水に印するに似たり。玄玄玄、沒商量、透關萬重、或は擒縱、或は與奪。還郷の一曲、角徴に非ず、宮商に非ず。正に好し力を著くるに。黒漆桶を打破す、直に得たり行に臨んで金剛王を抛擲することぞ。這箇は理秀大姉平生の間伎倆。」火把を擧して、「別に勝熱婆羅門大光を放つを看よ。」唱、「紅日扶桑を照

①に喜心、二に老心、三に大心なり、喜心は喜悅感謝の心、老心は慈悲愛憐の心、大心は不偏不黨の心といふ。
②徳山嘗て青龍の疏鈔を擔ふて蜀を出で、澧陽に至る路上、一婆子の餅を賣るか見、因みに肩を休め、餅を買ふて點心せんとす、婆子、擔を指して曰く、這箇は是れ何の文字ぞ、師曰く、青龍の疏鈔なりと、婆曰く、我れに一間あり、爾若し答へ得ば點心を與へん、若し答へ得ずんば別所に去れ、金剛經に曰く、過、現、未不可得と、未審し上座那箇の心を點すと、師無語と。

す。」

心田永安大姉の下火 預請

「眼界平なる時心地安じ、三更の紅日黒漫漫、崑崙倒に孃生の袴を著く、火裏の梅花雪を吹いて寒し。夫れ惟れば、心田永安大姉、越裳の翡翠、摩利梅檀、五障本空、項上の枷鎖を脱卻す、百年夢の如し。庭前の牡丹を指示す、迹を洛漣に寄せ、道を邯鄲に假る。加之、或時は龍女宮中に在つて、是文珠の説法を聴き、非文殊の説法を聴く。或時は、蠅螟國裏に入つて、善知識と相看す、悪知識と相看す。易易、凡を轉じて聖と成すことは易し。難難、聖を轉じて凡と成すことは難し。生也、鐵壁迸開す雲片片、死也、黒山輓出す月團團。永安大姉、慈直に去る、太だ端無し。若し向上の事を要せば、是の如くの觀を作す應し。」火把を擲つて、「一把の柳絲收不得、風に和して搭在す玉欄干。」

陽甫玄春大姉の下火 預請

「威音空劫の春を待たず、無根樹子花を著けて新なり、毘嵐昨夜忽ち吹倒す、大地茫茫として人を愁殺す。夫れ惟れば、陽甫玄春大姉、名珪類無し、槌鏡塵を絶す。生也、蝴蝶夢中家萬里、死也、翡翠簾前月一輪。凡聖を通せず、要津を把定す。玄春大姉、正與廢の時、何の處に向つてか渾身を著け去らん。」火把を抛つて、「須彌踰跳す鍼鋒上、丙丁童子笑閻閻。」喝一喝す。

③小蟲の名なり、列子に「江浦の間際蟲を生ず、其の名を焦螟と云ふ、群飛して蚊睫に集り、而して相觸る」と、人の世にありて互に相争ふを達觀するときは、猶焦螟が蚊睫に集りて相觸るゝが如しとなり。

穆庵芳春禪定尼の下火 預請

「喚起す一場の春夢婆、落花啼鳥百年過ぐ、端無く心頭の火を吹滅して、月白く風清し安樂窩。夫れ惟れば、穆庵芳春禪定尼、脚實地を踏み、心劫波を澄しむ。甘露門を開いて、探菽青提女を拯ふ。楞嚴會を設けて、甘蔗、摩登伽を度す。寸刃を施さず、魔佛を殺し盡す。毫端を隔てず、自他を忘す。甚麼の生死涅槃とか説かん、驪珠光燦爛。什麼の無明煩惱をか論せん、蟾桂影婆娑。更に向上の那一路有り、試みに一步を進め得てんや。」火把を抛つて、「石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」喝一喝す。

⑤月の桂なり。

雪溪宗春信女の下火 預請

「風驚き雨過ぐ百年強、心火滅する時心自ら涼し、啼鳥落花人見えす、一場の春夢覺めて猶ほ香し。夫れ惟れば、雪溪宗春信女、錦心繡口、鐵肝石腸、水の源有るが如し。姓を賜うて清和の苗裔と稱す。禪の海に歸するに似たり。師を擇んで鄧林の棟梁を得たり。黃河帶を誓ひ、岷江觴を濫ぶ。或時は生死の流を截る、赤洒洒窠白没し。或時は如來地を超えて、淨裸承當を絶す。這裏に到つて甚麼の無明煩惱とか説かん、什麼の地獄天堂をか論せん。線路を通せず、封疆を把定す。然も恁麼なりと雖も、後昆を保祐する底の一句、試みに山僧が擧揚し去るを聴け。」火把を抛つて、「自家頼に門前の雪を掃つて、他人屋上の霜を管すること莫れ。」喝一喝す。

全室宗盛信女の下火 預請

「百年三萬六千霜、盛者必衰人常ならず、漏盡き鐘鳴る底の時節、泥犁兜率黒甜の郷。夫れ惟れば、全室宗盛信女、懐胎の鬼子、乳を擇ぶ鵝王、截流の機を具して、秦國夫人洋嶼に參す。救世の願を起して、鎖骨菩薩馬郎に嫁す。見性羅穀を隔てず、我れを試むるに革囊を以てすること莫れ。煩惱即菩提、水は竹邊より流出して冷に。娑婆即華藏、風は花裏より過ぎ來つて香し。向上宗乘の事、直下に承當し去れ。」喝一喝し、火把を抛つて、「安禪は未だ必ずしも山水を須ひず、心頭を滅卻すれば火も自ら涼し。」

⑥魚籃の觀音の馬郎に嫁するをいふ、前に見ゆ。

壽岳宗永信女の下火 預請

「王母が蟠桃永年を祝す、神仙の秘訣錯つて流傳す、崑崙の核子果して何物ぞ、今日看來れば火裏の蓮。夫れ惟れば、壽岳宗永信女、奕葉秀を競ふ、貞節彌々堅し。靈山會上の龍女、華鮮如來と號す、邪を捨てて正に歸す。金沙灘頭の馬婦、鎖骨菩薩と化す、感に赴き縁に隨ふ。眞如界に入つて眞如に住せず、花は猶ほ風雨の後。生死の中に在つて生死に染まず、松は只だ雪霜の先。虚空裂けて地に落ち、須彌跳つて天に上る。然も恁麼なりと雖も、後昆を興す底の一句、試みに山僧が敷宣を聴け。」火把を抛つて、「臨濟命根元斷せず、一條の紅線手中に牽く。」喝一喝す。

梅屋妙薰信女の下火 預請

「諸佛出身活路開く、薰風昨夜南より來る、端無く吹いて紅爐の雪と作す、六月炎天一朶の梅。夫れ惟れば、梅屋妙薰信女、五障を掃除し、三災を消得す。說法度生、應身の如來、鶴林に滅を唱ふ。拔苦與樂、積行の菩薩、龍門に顯を曝す。見性猶ほ羅穀を隔つ、遺骨強ひて冷灰を撥ふ。了了の時、乾坤窄く、星辰黒し。玄玄の處、虚空消し鐵山摧く。妙薰妙薰、是れ甚麼の時節ぞ。」火把を抛つて、「石女舞成す長壽の曲、燈籠露柱笑哈哈たり。」喝一喝す。

春榮壽椿信女の下火 預請

「莊椿世を閱八千歲、胡蝶園中一刹那、無説無聞眞の般若、燈籠口を開いて摩訶を念す。夫れ惟れば、春榮壽椿信女、穉沙門を拜して草架装を受く。盛者必衰、鶴樹の滅を甘蔗氏に示すと雖も、熾然常説、龍華會を迦葉波に待たす。物物全眞、無數の飛花、圓通の境、塵塵解脫、兩三の脩竹、安樂の窩。従前の間絡索は且く置く、向上宗乘如何。」火把を抛つて、「白鷗は人間の暑を受けず、江上の清風雨を吹き過ぐ。」喝一喝す。

松溪宗貞信女の下火 預請

「真節彌々堅うして始終を克す、眞如佛性絶だ如同、丙丁童子呵呵として笑ふ、三十三天活火紅なり。夫れ惟れば、松溪宗貞信女、本然清淨、内外玲瓏。諸佛出興、水天を浮べ、天水を浮ぶ。世尊入滅、風月を拂ひ、月風を拂ふ。生死去來全く住處無し、苦樂逆順、道其の中に在り。正與廢の時節、甚麼の千生萬劫とか説かん、什麼の五障三従をか論せん。轉身自在、八達七通、然も恁麼なりと雖も、向上の事を知らんと欲せば、須らく教外の宗に參す可し。」火把を抛つて、「看よ看よ、一棒に打破す太虚空。」喝一喝す。

景雲壽慶信女百年後乘炬の語

「地獄天堂一夢の中、五障を掃除し三従を絶す、凡鱗脱盡する底の時節、其の面華鮮なり。娑竭龍。夫れ以れば、景雲壽慶信女、世間の相を觀じて教外の宗に歸す。隨緣眞如、不變眞如、燦翠竹を鎖す。觀照般若、實相般若、風幽松を吹く。了了の時、是れ何物ぞ、玄玄の處、蹤を留むること莫れ。然も恁麼なりと雖も、聲前的一句、君聽取せよ。」火把を抛つて、「青山改めず舊時の容。」咄一咄す。

宗光信女の下火 預請

「萬機休して無心に住まらず、一段の靈光古今に亘る、向上の鉗鎖纜に手を下せば、都盧大地黄金と變す。宗光宗光、還つて萬兩の黄金を消得すや。煩惱即菩提、蜂房を截つて獅子窟と作す。娑婆即華

① 水災、火災、兵災の稱。又小三災、四劫の中住劫(滅劫)の人壽十歳の時起る、饑饉災、疾疫災、刀兵災の稱。又大三災、四劫の中、壞の最後の劫、即ち外器壞の時起る、火災、水災、風災の稱(世界)。
② 初利天のことなり、須彌山説によれば、須彌山の頂上に四峰あり、而して各峰に八つの天あり、その中央に喜見城ありて帝釋天これに住し、四方三十二天を統ぶ、この内外の三十三天を初利天(欲界第二の天)といふ、而して日月の二輪、須彌の半腹を廻りて晝と夜とな爲すと。

③ 八大龍王の一、新華嚴五十一、如來出現品に「沙羯羅龍王、龍王大自在力を現じ、衆生を饒益し、咸く歡喜せしめんと欲し、四天下より化自在天處に至る、大雲網を興し、周匝彌覆、其の雲色相、無量差別云々」と。

藏、荆棘を變じて梅檀林と成す。木人暗に玉線を穿ち、石女密に金針を度す。火把を抛つて、無生の那一曲を聴かんと要すや、三千里外知音を絶す。」

芳室宗繼信女の下火 預請

「手中の絲線の長を截斷して、繡し成す端的兩鴛鴦、涅槃生死春宵の夢、枕破の斜紅覺めて尙ほ香し。夫れ惟れば、芳室宗繼信女、露芽蘭秀で、晚節菊芳し。本是れ一精明、華鮮如來、龍女と現す、分れて六和合と作る。鎖骨菩薩、馬郎に嫁す、天も蓋ふこと無く地も載すること無し。昔生せず今亡せず。淨裸裸白を出で、赤洒洒覆藏を絶す。燈籠跳つて露柱に入り、泥人金剛を撈倒す。向上宗乘の事を識らんと要すや。鏡を打破し來れ、彌と與に商量せん。」火把を抛つて、「少林の嫖桂久昌昌たり。」喝一喝す。

桂雲昌慶 信女預請百年後乘炬の語

火把、圓相を打して、「珠を獻する龍女太だ頼預、信せずんば一錠に錠碎して看よ、鐵壁迷開す雲片片、黒山輾出す月團團。昌慶信女、還つて會すや。當陽直指、多端に涉らす。昔甘蔗先生、西方に出で、法華を一由旬に布く、袈裟下に毒藥を藏す。後香至大士、東海に入つて慈航を十萬里に泛ぶ、平地上に波瀾を起す。甚麼の三車火宅とか説か

① 連磨、東土に來らんとする時、般若多羅曰く、法の往く所、其の法の趣く所の者は繁くして、稻麻竹葉の若し、數ふるに勝ふべからず、然して其の國我が滅後六十餘歳必ず離有るべし、水中文布を作し、自ら之れを降せ、然して汝彼の南方に至り、即ち止るべからず、蓋し其の天王方に有爲を好む、恐らくは汝を信ぜざらん、吾が偶をきけ、曰く、路行水を跨いで又羊に逢ふ、獨り自ら樓々暗に江を渡る、日下憐むべし雙象馬、二株の頼桂久昌々」と。我が禪門の榮ゆべきをいふ。

ん、什麼の隻履空棺をか認めん。三世の心不可得。心を將ち來れ、汝が爲に安せん。然も恁麼なりと雖も、百年壽盡きて後、應に是の如きの觀を作すべし。知見知を立する、即ち無明の本、知見見無き、斯れ即ち涅槃。」火把を抛つて、喝一喝す。

花溪宗春信女預請乘炬の語

「驚き起く一場の春夢婆、百年の光景鳥飛び過ぐ、虚空昨夜希有と叫ぶ、火裏花開く優鉢羅。夫れ惟れば、花溪宗春信女、肅爾として權淡く、温然として氣和す。三萬の祝狀、維摩病に毘耶室に臥す。五千の貝葉、瞿曇滅を、尼連河に示す。衆生の母と作つて、煩惱の魔を降す、本來の面目露堂堂。梅瘦せて春を占むること少し、金剛の眼睛鳥律律。庭寛くして月を得ること多し。當陽直指、端的會すや。」火把を抛つて、「石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。」喝一喝す。

瑞甫清珍信女の下火 預請

門より入る者は家珍にあらず、龍女寶珠磨すれども磷かす、直下に天外に出頭して看よ、浮雲散する處月光新なり。清珍清珍、是れ甚麼ぞ、是れ甚麼ぞ。溪聲は廣長舌、山色は清淨身。迷悟を立せず、要津を把定す。正與麼の時、三世の諸佛、火焰裏に向つて大法輪を

② 維摩經の弟子品、菩薩品、文殊問疾品等に委し。

③ 具には尼連河、梵音「ナリイランガヤナ」、有金河、不樂著河と譯す、摩訶陀國王舍城附近を流る、河の名、釋尊苦行の眞の修行にあらざることを知りて、これを棄て、此の河に浴し、積年苦行の身垢を洗ひ、木に攀ちて岸に上り、牧女の牛乳の供養を受け、身力を恢復して後、佛陀伽耶に行き、菩提樹下に端坐し給へり」と云ふ傳記によりて知らる、今のリヤヤン河是れなり

轉ず。然も是の如くなりと雖も、更に歸處有り。試みに山僧が指陳を聴け。咄咄、白灰撥ひ出す玉麒麟。

梅憲理清信女の下火 預請

「直に純清絶點を得る時、機輪轉する處、電光も遅し、丙丁童子希有と叫ぶ、火裏の優曇雪に和して吹く。夫れ惟れば、梅憲理清信女、物を愛して黨無し、民に莅んで慈有り。法華會中、倒に五臺の獅子に跨る。無垢世界、忽ち八歳の龍兒と化す。直に涅槃の一路に入る、何ぞ生死の兩岐に涉らん。公案現成、荷葉團圓鏡似も團に。當陽直指、菱角尖尖雖似も尖きなり。淨裸裸地、寸絲を挂けず。然も恁麼なりと雖も、向上還つて事有り。山僧誰にか説向せん。」火把を抛つて、「花の來處を問はんと欲すれば、東君も亦知らず。」咄一咄す。

支那山西省代州五臺縣にあり、支那六朝時代より佛教の靈地として著く知らる。無著文喜、五臺山にあつて典座たりしとき、文殊彌鍋上に現じたりしと云ふ話柄、禪林に繪奕す。文殊は獅子に乗り給ふ故に、此所の五臺は單に輕く文殊と見てよし。

心源宗清信女の下火 預請

「心源を放出して徹底清し、清寥寥地太だ分明、一條界破す轉身の路、直に毘盧頂上を蹈んで行り。夫れ惟れば、心源宗清信女、山川秀を鐘めて閻里榮に向はんとす。露柱懷胎、鹿足般若の説を感す。明珠掌に在り、龍女華鮮の名を受く。直に佛果を證す、豈に凡情に墮せんや。花を弄すれば香衣に

滿つ。遊戯神通、解脱國土、岳に歩すれば風面を吹く。刹那に滅卻す阿鼻の火坑、正與廢の時、甚の三從五障とか説かん、甚の萬劫千生をか論せん。然も恁麼なりと雖も、最後の那一句、如何が施呈し去らん。」火把を抛つて、「頻に小玉と呼ぶ元も無事、只だ檀郎が聲を認得せんことを要す。」

天章宗清信女の下火 預請

火把、圓相を打して、「直に浮雲絶點の時を得て、一輪の明月自ら清奇、當處を離れず南方界、龍女の寶珠我れに還し來れ。夫れ惟れば、天章宗清信女、五障を掃除し、二儀を化育す。隨緣真如、不變真如、荷盡きて已に雨を撃ぐる蓋無し。觀相般若、實相般若、菊残つて猶ほ霜に傲る枝有り。這裏に到つて、甚の菩提煩惱とか説かん、甚の兜率泥犁をか論せん。然も恁麼なりと雖も、向上の那一句を聞かんと要すや。」火把を抛つて、「針眼の魚須彌を吞卻す。」咄一咄す。

和仲妙春信女の下火 預請

「生死涅槃春夢婆、天堂地獄亦南柯、當陽直指君聽取せよ、風楓林を攪して一雨過ぐ。夫れ惟れば、和仲妙春信女、香を焼いて佛を禮し、鏡を掛けて魔を降す。苦海の慈航、濡首五障の龍女を化度す。昏衢の慧炬、慶喜四果の登伽に逢著す。單傳霜寒し、流蓬落葉、大法秋晚る。折葦枯荷、誰が家か春ならざらん。塵塵隨身の兜率、水有り月を含む。物物唯心の彌陀、無佛

元稹が詩に、「小玉牀に上りて夜衣を鋪き、檀郎謝安同處に眠る」と、註に檀郎は潘安仁、小字は檀と名づく、之れより婦は夫を檀郎と名くと。
二儀は乾坤をいふ、即ち天地なり。

の處、住することを得ず。玄玄の窟、須らく呵すべし。從前の間絡索は且く措く、向上宗乗の事如何。火把を抛つて、「曬珠光燦爛、蟾桂影婆娑たり。」喝一喝す。

大有宗豐信女の下火 預請

「二神豐葦原を開きしより、今に至るまで天地是れ同根、泥犂兜率春閨の夢、醒めて後簾前月一痕。夫れ惟れば、大有宗豐信女、精神雪潔く笑語春温なり。混沌の眉を畫いて贖岳の生苜蓿を拈す。正法眼を滅して、密庵の破沙盆を敲す。暗に祖師の鼻孔を穿ち、明に諸佛の心源に徹す。無餘涅槃、泥牛耕破す瑠璃の地。不昧因果、玉兔挨開す碧落の門。百丈山、一拳に拳倒し、四大海、一陽に照耀す。那箇か真底の倩女離魂。」火把を抛つて、「紅爐一點の雪、鑄出す鐵崑崙。」

保天慶祐信女預請下火の語

火把、圓相を打して、「坤德至れる哉天これを祐く、始終一節曾て移らず、行に臨んで唱へ起す還郷の曲、風前に向つて竹枝を歌ふこと莫れ。夫れ惟れば、保天慶祐信女、五障を掃除し二儀を化育す。其の人の如く玉の如し。短褐磷磷かす緇まます。生也、春風桃李花の開くる夜、死也、秋雨梧桐葉の落つる時。淨裸躰、赤洒酒、生死を離れ、去來を絶す。恁麼恁麼、毛巨海を

① 密庵咸傑禪師、衢州の明果庵に到つて應庵華に參ず、一日應庵室中に問ふ、如何なるは是れ正法眼、師曰く、破沙盆と、應庵之れを肯ふと。
② 須彌山の周圍にある四香水海をいふ。
③ 坤德は婦德のこと、坤は地なる故なり。
④ 土地のはやり歌なり。

呑む。不恁麼恁麼、芥、須彌を納る。葛直に轉じ去れ、兩岐に涉ること莫れ。然も是の如くなりと雖も、山僧痛處に向つて、重ねて鐵錐を下さん。」火把を擲つて、「力因希、咄咄、紅爐放出す鐵烏龜。」

海雲宗龍 信女百年後乘炬の語

火把、圓相を打して、「生死の海を出で、龍鱗を脱す、元是れ如く淨法身、一陣の清風明月を掃ふ、門より入る者は家珍にあらず。夫れ惟れば、海雲宗龍信女、胸中芥せず、眼裏塵無し。其の德也、金の如く玉の如し。其の行也、緇まます磷磷かす。四大本空、紅英地を掃つて風曉に驚く。五蘊有にあらず、綠葉陰を成して雨春を洗ふ。鐵眼の魚石佛を呑む、丙丁童笑閨閣。更に向上宗乗の事有り、試みに休上座が指陳を聽け。」火把を抛つて、「千峰萬岳雲收つて後、翡翠簾前月一輪。」喝一喝す。

德陰妙性信女の下火 預請

「成佛は他の見性の人に還す、無陰陽の地織塵を絶す、夜來月半江に入り去る、龍女の寶珠磨すれども磷かす。夫れ惟れば、德陰妙性信女、慈菴草の種、桃花色の民、大慧の禪を慕ふ。臨濟中興の日に際す、永明の旨を會す、彌勒下生の辰に値ふ。允なるかな矣、則天皇后の化迹、記すや否や。秦國夫人の舊因、彩鳳丹霄に舞ふ。涅槃の古鏡を打破す、清風明月を拂ふ、生死の苦輪を脱卻す。凡を轉

① 永明延壽大師、翠巖に臨つて得度し、後天台德韶に隨つて法を嗣ぐ、法眼宗第三祖となる。禪と念佛とを兼修し、夜は別峰に行道念佛するを常とせり、德陰妙性信女は淨土教の人なりしや。

じて聖と作し、假を弄して眞を像る。淨裸裸、承當を絶す。針鋒頭に足を翹て、火焰裏に身を藏す。喝一喝して、然も恁麼なりと雖も、後昆を覆蔭する底の活句、試みに休上座が指陳を聴け。火把を抛つて、「^①揭諦波羅僧揭諦、故家の喬木又春に逢ふ。」

覺林妙等信女の下火 預請

「平等一如々の法門、百千の妙徳心源を接す、須彌野跳して鍼眼に入る、八角の磨盤空裏に奔る。夫れ惟れば、覺林妙等信女、風を移し俗を換ふ、子を抱き孫を弄す。其の芳隣や、左は花を以てし、右は竹を以てす。其の貞節や、兄に梅有り、弟に禁有り。理智圓融、甚麼の始覺本覺とか説かん。與奪自在、什麼の上根下根をか管せん。端的雙收雙放、畢竟亡に非す存に非す。^②黃鶴樓に和して一拳に拳倒す、鴛鴦湖を把つて一陽に陽翻す。此れは是れ妙等信女、眞履實踐の處、百年壽盡きて後の消息、火把子の重ねて論するを聴取せよ。」火把を抛つて、「紅爐一點の雪を拾ひ得て、黃金鑄出す鐵崑崙。」喝一喝す。

花屋周林信女の下火 預請

「鶴林滅を示す二千年、山色は灰の如く花は烟に似たり、元是れ圓成の

①心經の咒文、彼の五種不誦の一なり、然れども強ひて之れを誦する時は、揭諦は、去と度との過去を現す文字なり、故に去れり度せりとの意を含む、即ち自ら一切の苦厄を度し、他一切の衆生の苦厄を度し終りたりと云ふ意、叮嚀したるなり。

②事言要玄地集四に「府城の西、黃鶴磯上に仙人子安、黃鶴に乗じて此を過ぐ、又費文律登仙して黃鶴に駕して返り、此所に憩ふと傳ふ、唐の閻伯程、記を作り、文律が事を以て信と爲す」と。唐の崔韻が詩に「昔人已に白雲に乗じて去り、此の地空しく餘す黃

那一佛、木人石女蒼天と叫ぶ。夫れ惟れば、花屋周林信女、有情世間の事を觀じて、無生の一大縁を了す。七賢女、死屍を尸陀林に問ふ、時有りて盡く。八歳の龍、正覺を無垢界に唱ふ、地を易へば皆然らん。虚空裏に筋斗を翻し、須彌頂に鐵船を駕す。洛陽是れ兜率、風は南岸の柳を吹く。娑婆即華藏、雨は北地の蓮を打つ。峭嶮嶮、孤迥迥。窠臼を離れ蓋纏を出づ。上件底は且く措く、達磨甚としてか禪を會せざる。」喝一喝す。

月溪妙秋信女の下火 預請

「秋風昨夜乾坤を動す、葉落ち樹凋みて本根に歸す、心空の那一火に和卻して、黃金鑄出す鐵崑崙。夫れ惟れば、月溪妙秋信女、美玉價無し、^①赤繩婚を定む。摩耶千佛の母爲り、則天三會の尊と稱す。生死涅槃、翡翠踏躡す荷葉の雨。眞如實相、玉兔挨拶す碧落の門。」火把を抛つて、喝一喝す。

宗眞信女の下火 預請

「試みに看よ嬢、生面目の眞、窓中の眉黛遠山新なり、端無く打破す曹溪の鏡、放出す天邊の月一輪。夫れ惟れば、宗眞信女、南無佛と唱へて、西子の鬢に効ふ。隨緣眞如、不變眞如、翠竹風冷し。觀照般若、實相般若、黃花露勻し。金の如く玉の如し、緇ます磷かす。然も恁麼なりと雖も、門より

①書言故事に「婚姻の前定せるを赤繩足を繫ぐといふ、唐の章固、旅行中、月下の老人に問ふ、囊中何物かあると、曰く「赤繩子なり、以て夫婦の足を繫ぐ。譬敵の家、吳楚の異郷、富貴懸隔すと雖も、この繩一度繫げば、遂に違ふべからず」と見ゆ。

入る者は不是、那箇かそれ自家の珍。火把を抛つて、鐵鋒頭に足を翹て、火焰裏に身を藏す。喝一喝す。

宗龜信女の下火 預請

「紅爐放出す鐵鳥龜、皮骨を裏むか骨皮を裏むか、當時の大隋老を屑とせず、草鞵靴を生じて天に上り来る。夫れ惟れば、宗龜信女、鐵鋒足を翹て苕帚眉を鬪す。自然の源に徹するときは、則ち黃河を攪いて酥酪と成す。心頭の火を滅するときは、則ち鑊湯を變じて寶池と作す。意氣堂堂、一踢に踢蹴す四大海。眼光爛々、一拳に拳倒す五須彌。這裏に到つて菩提の證す可き無く、生死の離る可き無し。石火も及ばず閃電も猶ほ遅し。向上に轉じ去れ、多岐に涉ること莫れ。咄一咄、火把を抛つて、花の來處を問はんと欲すれば、東君も亦知らず。」

春芳妙榮信女の下火 預請

「朝榮暮辱共に空と成る、今日の顔昨日の紅に非ず、生死涅槃一場の夢、天堂地獄大槐宮。夫れ惟れば、春芳妙榮信女、偏も無く黨も無し、始を克し終を克す。總持尼を接して、達磨皮髓を分張す。登伽女に逢ふて、慶喜姪躬を撫摩す。眞如佛性、顛預備伺。縦ひ般若の光を放つも、蚌蛤天上の明月を含む。定慧の力を得ると雖も、蚊虻空裏の猛風を弄す。淨裸裸亦

◎自樂天の太行路に曰く、人生婦人の身と作る莫れ、百年の苦樂他人に由る、行路難山より、難く水よりも險し、獨り人世の夫と妻のみにあらず、近代の君臣皆此の如し、君見すや左納言右納史、朝に恩を受けて暮に死を賜ふと。

酒酒、諸方の羅籠を受けす。三從五障を掃除して、直に八達七通を得たり。金剛圈を透り、栗棘蓬を呑む。然も是の如くなりと雖も、轉身の處を識らんと要せば、丙丁童に問取せよ。火把を抛つて、喝一喝す。

妙蓮信女百年後下火の語

「夢幻空花一百年、風驚き雨過ぎて刹那に遷る、回光返照自ら看取せよ、露清香を滴る火裏の蓮。夫れ惟れば、妙蓮信女、五障を消滅し、十纏を脱離す。將に謂へり、金沙灘頭の鎖骨と。元來無垢世界の華鮮、鐵鋒頭上の五須彌、石女起つて舞を作す。地獄門前の鬼脱卵、扇子跳つて天に上る。藤直に轉じ去れ、言詮に涉ること莫れ。會すや。火把を抛つて、向上の一路、千聖不傳。咄咄。」

宗祐信女の下火 預請

「半は黃梁を熟す夢蝶の牀、頭を回せば三萬六千場、明明に說與す西來意、紅蓮花の前夕陽ならんと欲す。夫れ惟れば、宗祐信女、精神雪潔く、貞節菊芳し。五障本空、文殊佛に代つて龍女の度す。兩願成就、觀音婦と作つて馬郎に約す、罪垢を蕩滌す。經卷流水、生死を截斷す、慧劍秋霜。赤洒洒窠白沒し、淨裸裸承當を絶す。然も是の如くなりと雖も、向上還つて事有り、我れ汝が爲に擲揚せん。火把を擲つて、安禪は未だ必ずしも山水を須ひす、心頭を滅卻すれば火も自ら涼し。喝一喝

◎塵生、邯鄲に夢む、一代の榮を夢に盡す、覺め來れば僅かに前業一炊の問。

す。

心月妙性信女、預め三十三白忘の冥福を修するの次で、更に百年後の冥福の語を請ふ

「佛性元來變遷無し、時節と因縁とを論せず、請ふ君指頭を離却して看よ、月は青天に在つて夜夜圓なり。夫れ惟れば、心月妙性信女、劫波濁ると雖も、晚節彌々堅し。翠袖の佳人、竹疎壁に動く。書眉の京兆、花細川に滿つ。夫れ美名を身後に留めんよりは、如かじ冥福を生前に修せんには。赤豆兩車、無量壽を唱ふること百萬玉函、七軸妙法華を轉すること一千、終を慎み遠きを追ふ。三十三年、無明即ち明、普廣王に對して鴛鴦教を説く、諸相に非ず。秦國太を接して蚌蛤の禪を露す。涅槃の窠窟を出でて、生死の蓋纏を脱す。燈籠露柱に入り、虚空鐵船を駕す。然も恁麼なりと雖も、更に向宗乘の事有り、試みに山僧が敷宣を聴け。火把を抛つて、「雨中泉日を看、火裏に清泉を酌む。」

西夕明慶信女、預め百年後の下火の語を請ふ

「元是れ餘慶積善の家、光明照徹す盡河沙、試みに看よ大用現前の處、火裏の優曇一朶の花。夫れ惟れば、西夕明慶信女、神水雪を深くし、語煙霞を帯ぶ。栽松の禍根、五祖の兒、周氏に託す。甘蔗の惡孽、千佛の母、摩耶と稱す。心生すれば種種の法生ず、澁閨洞房、枕上の化蝶、心滅すれば種種の法滅す、地獄天堂、

⑤五祖大滿禪師を我松道者といふ、其の生前の因縁によりて名づく。舊説に曰く、四祖大醫禪師、牛頭山に居る、山中

杯中の假蛇。頓に三界の火宅を出で、直に一乘の大車に駕す。江月照すと雖も、曉風に遮らる。赤洒洒拘束没し、淨裸裸誑語を絶す。末後の句を知らんと要せば、金口の吧吧を聴け。火把を抛つて、「會すや、夕陽は長く我が西に在つて斜なり。」咄一咄す。

希西唯心信女の下火 預請

「即心即佛一精明、吹滅して阿毘の大火坑、若し檀郎を認めば千萬錯、頻に小玉と呼ぶ杜鵑の聲。夫れ惟れば、希西唯心信女、群を出でて萃に抜く、茂を騰げ英を飛す。龍女、華鮮如來と號す、頭を改め面を換ふ。馬婦、鎖骨菩薩と化す、物を接し生を利す。轉身自在、遊戲縱橫、生死涅槃、落花三片五片、真如實相、脩竹一莖兩莖、塵塵解脫、箇箇圓成。露堂堂月白く、淨裸裸風清し。然も恁麼なりと雖も、向上卻つて事有り、端的君が爲に呈せん。」火把を抛つて、「一心を本とす常樂我淨、一氣に始まる元亨利貞。」喝一喝す。

渭川宗清信女の下火 預請

昔 日種氏四十九年、三説鹿野に資つて始めて鶴林に終を示す。爾よ

老僧ありて松を栽う、人呼んで我松道者といふ、曾て四祖に請ふ、法道聞くことを得べきや、曰く、汝已に老ゆ、聞くことあるとも其れ能く化を敷かんや、當し能く再來せば善れ尙ほ汝を待つべしと、乃ち去つて水邊に行き、周家の女子の衣を浣ふを見、掛して曰く、宿を寄することを得るや否や、女曰く、我れに父見あり、往いて之れを求むべし、曰く、諾せば我れ即ち行かん、女首肯す、僧策を回らして去る、女歸つて懐ち孕む、父母之れを惡みて逐ふ、女歸する所無く、日々里中に庸紡して夕に衆館の下に於いてす、既にして一子を生む、以て不祥となして水中に棄つ、明日之れを見るに流に浮つて上る、氣體鮮明なり、大いに驚いて之れを擧ぐ、童となりて母に

り來、地藏の願輪に乗るときは、則ち外聲聞を現じ、内菩薩を秘す。彌陀の利劍を揮ふときは、則ち上攀仰無く、下己躬を絶す。無明の窠窟を出で、生死の羅籠を破る。木人太平の歌、長樂の鐘花外に響く。石女長壽の曲、關山の笛月中に揚る。塵塵解脱、法法圓融。然も是の如くなりと雖も、向上還つて事有り、一偈君が爲に通じ去らん。火把、圓を打して、清容獨り秀づ内家叢、粉黛三千淡濃を争ふ、去無く來無く所住無し、夕陽は長く我が西に在つて紅なり。火把を抛つて、喝一喝す。

眞如妙性信女の下火 預請

「眞如妙性曾て移らず、昨夜虚空地に落つる時、從來する所無く所去無し、蠅螟吞卻す五須彌。夫れ惟れば、眞如妙性信女、火中の木母、泥裏の摩尼、百媚千嬌、金沙灘頭の馬婦、鎖骨菩薩と現す。三從五障、靈山會上の龍女、華鮮如來と稱す。甚だ希有甚だ希有、也太奇也太奇。淨裸裸承當を絶す、其の鏝湯爐炭とか説かん。赤洒酒菓白没し、甚の兜牟泥犁をか論せん。喝一喝、火把を抛つて、杜鵑啼いて落花の枝に在り。」

古梅妙意信女の下火 預請

「祖師無意西來せず、虚空を吹裂して鐵笛哀む、道ふことを休めよ少林消息斷ゆと、送行唯だ一枝の梅有り。夫れ惟れば、古梅妙意信女、正因信淨く、世相心灰す。瞿曇三界の師、燈籠台掌、摩耶千佛の母。露柱懷胎、教外別傳、葵花眼無うして日に隨つて轉す。喝下正覺、芭蕉耳無うして雷を聴いて聞く。希有希有、奇なる哉奇なる哉。曹家女寶鏡臺に現す。看よ看よ、本來無一物、何の處にか塵埃を惹かん。火把を抛つて、咄一咄す。」

春芳妙榮信女の下火 預請

「百年の富貴一場の榮、風落花を攪して春夢驚く、歸らば便ち歸る可し兜率の路、杜鵑枝上月三更。夫れ惟れば、春芳妙榮信女、錦心繡口、玉振金聲、堅固法身、磨すれども磷かす、涅にすれども縑ます。眞如自性、之れを濁せども濁らず、之れを澄せども清ます。倩女離魂、那箇か眞底、龐婆團圓、共に無生を説く。瑜伽の法水を瀉いで、阿鼻の火坑を滅す。教外の宗旨を知らんと要せば、山僧汝が爲に施呈し去らん。火把を抛つて、誰が家の別館ぞ池塘の裏、一對の鴛鴦畫けども成らず。喝一喝す。」

維馨宗葩信女の下火 預請

「無常迅速太だ端無し、假に雙林の般涅槃を示す、此れは是れ孃生本來の面、月梅影を移して

隨つて食を乞ふ、邑人呼んで無姓兒と爲す、今の五祖弘忍即ち是れなりと。

③釋迦をいふ。

④阿彌陀佛、無量と譯す、西方極樂世界の教主、四位には法華比丘と稱し、世々自在王佛の所に諸佛の淨土を觀見し、五劫の思惟を重ねて四十八の大願を建立す、永劫の修行を経て、所願滿足成佛して阿彌陀と名づけ、淨土を西方に設け、阿彌陀は光明無量壽命無量なる因願酬報の覺體なり、宗門にては己身の彌陀、唯心の淨土にして來世の往生、他力の救済を求めず、現身に彌陀覺體を成じ、此の土に極樂淨土を現するを以て理想となす。

⑤孟子に、「伯夷は聖の清なるものなり、伊尹は聖の任なる者、柳下惠は聖の和なる者なり、孔子は聖の時なるものなり、」孔子は之れを集めて大成すといふは、金聲のべて玉之れを振む、金聲とは條理を始むるなり、玉之れを振むとは條理を終るなり、條理を始むるは、智の事なり、條理を終るは聖の事なり。

⑥孃孃居士の母をいふなり。

⑦入榮涅槃の略なり、滅度をいふ。

欄干に上す。夫れ惟れば、維馨宗範信女、珠簾玉案、禪板蒲團。少林の響に效ふときは、則ち西施が淡粧、興化を除非す。首楞の咒を持するときは、則ち摩登が愛纏、阿難を逼殺す。手に壙中の雙履を携へ、脚に門前の刹竿を倒す。加之、初頓の華嚴、後分の華嚴、南詢の善財正覺を成す。實相般若、觀照般若、東請の常啼心肝を賣る。眞箇若し未穩在ならば、心を將ち來れ、汝が與に安せん。火把を抛つて、喝一喝す。

渭川宗清信女の下火 預請

「鑊湯爐炭清涼界、熱鐵洋鍋安樂窩、佛法南方梅一點、人を驚かす春色多きことを須ひす。夫れ惟れば、渭川宗清信女、竹の節を保つが如く、花の和を養ふに似たり。山として雲を帯びすといふこと無し。則天下生の彌勒、水有り皆月を含む。豐干上品の彌陀、淨に入り穢に入り、佛に入り魔に入る。天女花ぞ散す、維摩の憑を笏室に判す。古人菊に題す、涅槃の相を金河に示す。了了の時了す可き無く、玄玄の處亦須らく呵すべし。然も恁麼なりと雖も、最後の事如何。火把を抛つて、石女舞成す長壽の曲、木人唱へ起す太平の歌。喝一喝す。

芳園妙椿信女の下火 預請

「這の一株無根の大椿、花開き花落つ幾回の春ぞ、毘嵐昨夜忽ち吹倒す、驚起す南華夢裏の人。夫れ惟れば、芳園妙椿信女、髮を截る。陶母、機を斷つ軻親。預め未來の兩果を懼れて、逆の現在の三因を修す。聞くや、溪聲廣長舌、見るや、山色清淨身。龐老、心空の第に登り、龍女、無價の珍を獻す。吾が這裏密密の處、凡聖を通せず。了了の時、何ぞ主賓を分たん。然も恁麼なりと雖も、向上一句、如何が指陳せん。火把を抛つて、只だ補袞調羹の手を將つて、如來の正法輪を撥轉す。喝一喝す。

玉浦妙珍信女の下火 預請

火把、圓を打して云く、「價直三千衣裏の珍、靈光味さす緇磷を絶す、百年夢覺めて後の消息、翡翠簾前月一輪。夫れ惟れば、玉浦妙珍信女、佛見忽ち盡き、凡情已に泯す。繡彌勒の前、吾が室に入つて八齋戒を受く。珠羅漢の後、聖位を證して二乗の倫を超ゆ。鶴算龜齡、王母が蟠桃實を結ぶ。鳥飛び兎走る、桓娥が靈藥、神を願ふ。聞くや、溪聲廣長舌、見るや、山色清淨身。然も恁麼なりと雖も、倩女離魂、那箇か是れ眞。若

摩登伽 (Mandagā) 又は摩登祇 (Mandagī) の略、男を摩登伽、女を摩登祇といふ、義翻して本性といふ、楞嚴に性比丘尼と云ふ、具には阿徒多摩登祇、旃陀羅と云ふ、此れ女車殿なり。

豐干禪師、天台山國清寺に居り、髮を剪りて屑に等しうし布裘を衣る、人、佛理を問へば隨時の二字を以て之れに答ふ、本寺の厨中に二人の苦行子あり、寒山、拾得といふ、之れと相親しむ、古鏡磨せざるとき如何が照燭せん、曰く、冰壺影像無し、猿猴水月を探る、曰く、此れは是れ照燭せざる也、更に請ふ、師道へ、曰く、萬德將來せずんば、我をして什麼と道はしめん、寒拾共に禮拜すといふ、尋で獨り五臺山に入りて巡禮す、曾て閩丘風、丹丘に牧たりし

時、豐干に師事して法要を問ふ、曰く、此の二菩薩何くにありや、師曰く、國清寺に龕かとつて器を洗ふもの寒山拾得是れなりと、閩丘拜辭してゆくと。

陶侃の母湛氏、一夜鄱陽の孝廉范逵來りて侃が家に宿す、適々大いに雪ふる、依つて其の髮を截ち、隣人に賣りて肴饌を買ひて以て供す、逵之れを聞いて嘆じて曰く、此の母に非ずして此の子を生むこと能はずと、侃遂に功名を成すと。

し復た會せずんば、我れ指陳し去らん。」火把を擲つて、「冷灰撥ひ出す玉麒麟。」

賢屋利養大姉の下火 預請

長養功成つて年を記せず、浩然の一氣自ら完全、眼光落地底の時節、朶朶新に開く臘月の蓮。

ふ、敢へて問ふ、何をか浩然の氣といふか、曰く、言ひ難きなり、其の氣たるや、至大至剛、直を以て養ひて害ふなきときは天地の間に塞るゝとあり。

附 録

① 後平城帝の宸翰

朕、參禪年尙し矣。祖師許多の語頭古則、一一參究、一一證明す。本有圓成の話を擧して、未聞の聞を獲焉。後一日別峯に在り、直に徳雲比丘と相見了也。従前參得底、悟得底、一時に瓦解氷消す。洒洒地落落地、是れより佛祖の瞞を受けず、受用確乎たり、大安樂を得。此の恩甚だ深し、何の日か報謝し盡さん。縷縷不宣。

天文壬寅五月十三日

大休上人禪室

大休和尚 後平城帝に上る法語

世尊正法眼藏を摩訶大迦葉に付してより以來、一絲毫をも移易せず、東西の諸祖、的的相承、直に山僧に至るなり。恭しく以れば、日出處の國百六代 聖天子、吾が禪に參すること年尙し矣。一日召して再三請益し、奏するに本有圓成の話

① 第百四代後奈良天皇なり、御名は知仁、後柏原帝の皇子、御母は贈左大臣教秀の女、轉樂門院藤原藤子、後柏原帝崩じて即位す、此の頃は所謂戰國時代にして皇室の式微甚だしく皇室民屋に異ならず、公卿多くは皆諸侯に寄食し、或は出でて食を乞ふものあり、帝在位三十一年、弘治三年崩す、陵は深草にあり。

② 妙心寺山内の徳雲院に住せしよりしか云ふ。